

J R 両毛線国定駅南口整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田部井大根谷戸遺跡

(群馬県佐波郡東村)

Tamegai-daikongaido site
Sawa-Azuma Village, Gunma

2002

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
群 馬 県 土 木 部
群 馬 県 佐 波 郡 東 村

『田部井大根谷戸遺跡』正誤表

頁	位置	誤	正
14頁	2段目右	30号遺構全景	北西から 南東から
67頁	42号遺構右下グリッド	348-718	345-718
77頁	76号遺構右下グリッド	350-690	350-726

J R 両毛線国定駅南口整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田部井大根谷戸遺跡

(群馬県佐波郡東村)

Tamegai-daikongaido site
Sawa-Azuma Village, Gunma

2 0 0 2

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
群 馬 県 土 木 部
群 馬 県 佐 波 郡 東 村





古代大塚東方向
遠くの鉄塔が早川
右は旧あずま道村道



あずま道最古路面
東から





子持山

縮木川

利根川

権名山

大堀

早川

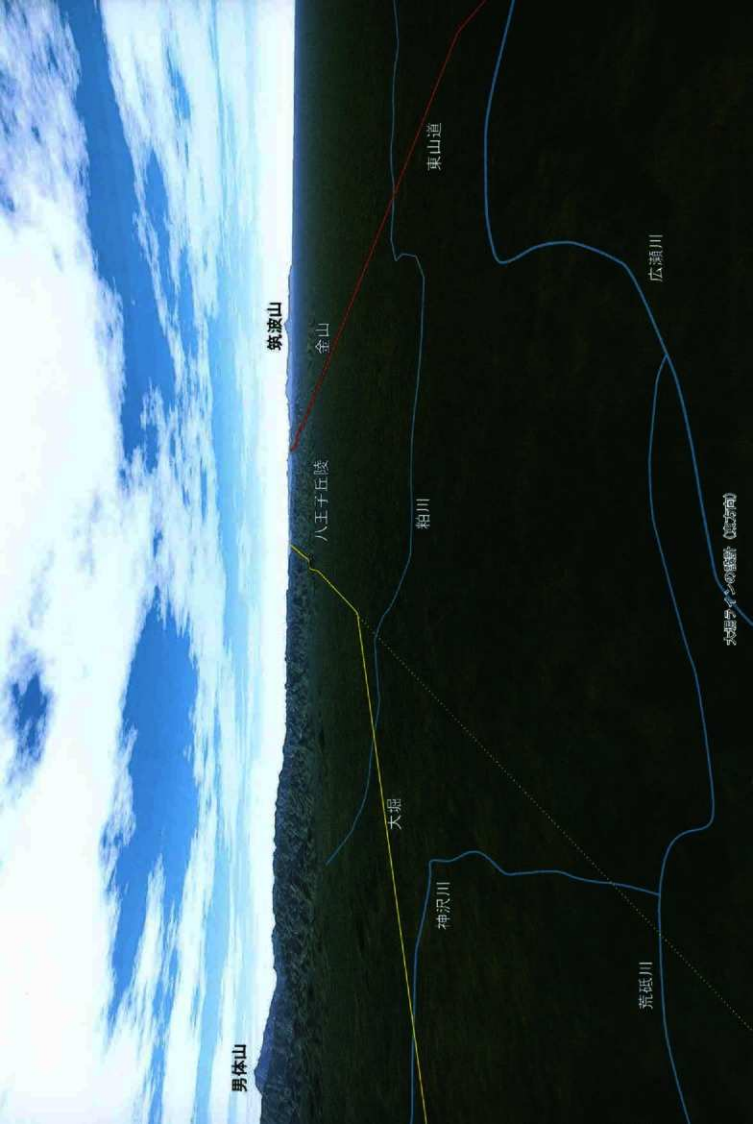
遠間山

粕川

物見山

夢科山 荒船山

東山道



男体山

筑波山

金山

八王子丘陵

大堀

東山道

柏川

神沢川

荒砥川

広瀬川

大塚寺の境内 (北山方面)

序

佐波郡東村は県内平野部のほぼ中央に位置しますが、その名は、村内を通過する中世以来の道路「あずま道」から付けられたと聞いております。この道には源義経通行伝説が残っており、また大字上田の六道に残る江戸時代の道標の存在は広く知られたものでした。

このたび、交通事情改善を目的として、JR両毛線国定駅南口駅前の開発とそこに至る県道国定停車場線の改築が行われることになりました。この事業に伴って埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。その結果、最も古い「あずま道」を確認しただけではなく、思いもかけず奈良時代に作られた謎の古代大堀までもが発見できました。群馬県の古代を考える大きな材料が現れたこととなります。

ここに公刊する発掘調査成果が東村のみならず広く県内の各位に利用されることを願うと共に、発掘調査以来さまざまにご協力をいただいた群馬県土木部道路建設課伊勢崎土木事務所、佐波郡東村、群馬県教育委員会そして地元の皆様方に感謝の意を表したいと思っております。

平成14年9月30日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野宇三郎

例 言

- 1 本書は、JR両毛線国定駅南口整備事業に伴う田部井大根谷戸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 事業主体：群馬県土木部道路建設課伊勢崎工事事務所
群馬県佐波郡東村
- 3 調査主体：財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野宇三郎 常務理事 吉田 豊 赤山容三
- 4 調査期間：平成13年7月1日～9月30日
- 5 調査担当：財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団東毛調査事務所
所長 水田 稔 調査研究部長 津金沢吉茂 調査研究第一課長 佐藤明人
現場担当 坂井 隆 橋本 淳 西原和久
- 6 整理期間：平成14年4月1日～9月30日
- 7 整理担当：事業局長 神保侑史 調査研究部長 巾 隆之 資料整理課長 西田健彦
編集担当 坂井 隆 遺物写真撮影 佐藤元彦 保存処理 関 邦一
- 8 原稿執筆：本報告には、調査時にもご指導をいただいた古代交通史研究会会長木下 良氏から、玉稿を賜った。ここに謝意を表する。その他については、坂井が執筆をした。
- 9 協力者：調査ならびに整理にあたっては、次の方々・機関のご協力をいただいた。
小島通悦 小林 章 坂爪久純 戸田康一 林晴嵐 平田貴正 森村健一
佐波郡東村企画調整課 伊勢崎佐波広域市町村圏振興整備組合東消防署
- 10 整理班：高橋優子 土田三代子 光安文子 吉澤照恵 淺辺八千代
- 11 発掘作業員：
あ 赤羽規仁 阿左見幸子 新井康之 石川年男 石田周三 石田トシ子 石田町子 井野米子
池田弘 岩上幸子 内田武二
か 国定茂 桑原健 小島輝和
さ 佐藤多美子 下田ぬい子 須賀美津次 鈴木初江
た 高柳慎治 田中一子 田村哲夫
な 野口貴美子
は 早川フサ子 樋沢静江 藤縄和夫 古澤瑞枝 細井美佐子 細井絹子 細井芳雄 星野幸江
堀年子
ま 丸山浩子 村田千代子 茂木一二 森田光二
や 矢内宗雄 矢内ヒロ子 矢内良枝 吉田静江 吉田寛

凡 例

報告内容：本報告書は、国定駅南口整備事業に関わる田部井大根谷戸遺跡調査成果の全てを収録した。当事業団による本調査と共に、県教育委員会文化課による村道交差部分立会調査の成果も併せて掲載した。

- 遺 構：1 調査で検出した全ての遺構を報告した。
2 調査地点は北区と南区の2調査区に分かれるが、検出遺構は調査区及び種類にかかわらず通し番号を付与した。
3 掲載順序は、北区の新しい時代から古い時代、南区の新しい時代から古い時代とした。
4 遺物出土状態を図示したものは、() 内に遺構底からの高さを付記した(単位cm)。
5 遺構計測値は、下場の最大値を測った。
6 使用方位は、国土座標(旧)方位である。測地成果2000での読替については4頁調査方法欄に記した。
7 土層説明での火山テフラの呼称は、次のとおりである。
 浅間As-A：浅間山の天明3(1782)年噴火軽石
 浅間As-B：浅間山の天仁1(1108)年噴火軽石
8 番号順の検索は、第4章の遺構索引を利用されたい。
- 遺 物：1 番号は出土状態にかかわらず4桁の通し番号を、全ての掲載遺物に付与した。第1桁目は次のように種類で区分した。
 1(土器陶磁器) 2(石製品・石器) 3(金属・ガラス製品) 4(有機物)
2 掲載図は原則として3分の1の縮小率としたが、それ以外については図に縮小率を記した。
3 全ての遺物は、群馬県埋蔵文化財センターで保管している。
4 種類ごとの検索は、第4章の遺物索引を利用されたい。
5 非掲載遺物については、種類別の重量を遺構索引に記した。
6 石材鑑定は飯島静氏による。
- 写 真：1 遺構写真は調査時に撮影した全てのカットを、原則として掲載した。
2 遺物写真は報告遺物の全てを掲載した。
- そ の 他：1 参考文献などの記載では、当事業団を群組文と略称した。

目次

口絵

序

例言・凡例

目次

1	序章	1
1-1	周辺の環境と遺跡	2
1-2	調査経過と方法	4
1-3	調査に至る経過	5
2	検出成果	9
2-1	北区	10
2-1-1	概要	10
2-1-2	近世以降	12
2-1-3	中世・古代	12
2-1-4	時期不明の遺構	30
2-2	南区	32
2-2-1	概要	32
2-2-2	近世以降	35
2-2-3	古代	37
2-2-4	時期不明の遺構	90
2-2-5	遺構外出土遺物	91
3	まとめ	93
3-1	あずま道	94
3-2	古代大堀と女堀・あずま道	98
3-3	古代集落	102
3-4	古代道路と堀状遺構の関係について(木下 良)	104
3-5	成果概要・summary	115
4	資料	117
4-1	地形と長大遺構検討資料	118
4-2	遺構索引	119
4-3	遺物索引	120
	抄録	122

第1章 序 章

1-1 周辺の環境と遺跡

佐波郡東村は、群馬県南東の平野部に位置している。東村北部の本遺跡（1）は、利根川支流で南流する粕川と早川に囲まれた大岡ろ福状地桐原面の扇端部湧水地帯に位置する。より詳細には本遺跡の位置は、粕川の東2.7km、早川の西約0.9kmに当たり、海拔95mほどになる。

ほぼ似た高さの西側には大井戸（伊勢崎市三和町 伊勢崎市の水源）と天ヶ池（東村上田）の湧水地があり、また西国定集落の北西のつつみ沼も同様の湧水地である。つつみ沼からは独結田という細長い低地（幅約15m×長2km）が西小保方沼まで延びている。本遺跡調査地は、西国定と東国定の境をなす谷替戸低地（早川の旧流路で途中には東村の水源地がある）上にあたる。周辺には、それらの川沿いや水源地からの細長い低地に水田があるが、多くはローム台地の畝作地である。また谷替戸低地の水田化は、近代以降になされた。

本遺跡周辺は、国道17号上武バイパスそして北関東自動車道という二大幹線交通路の建設、そしてそれに付随する工業団地などの大規模開発を中心として、かなり多くの発掘調査が過去20年間になされてきた。その結果判明した遺跡は、本遺跡と直接関係する古代以降だけでも、次頁図に示したようになり多い。

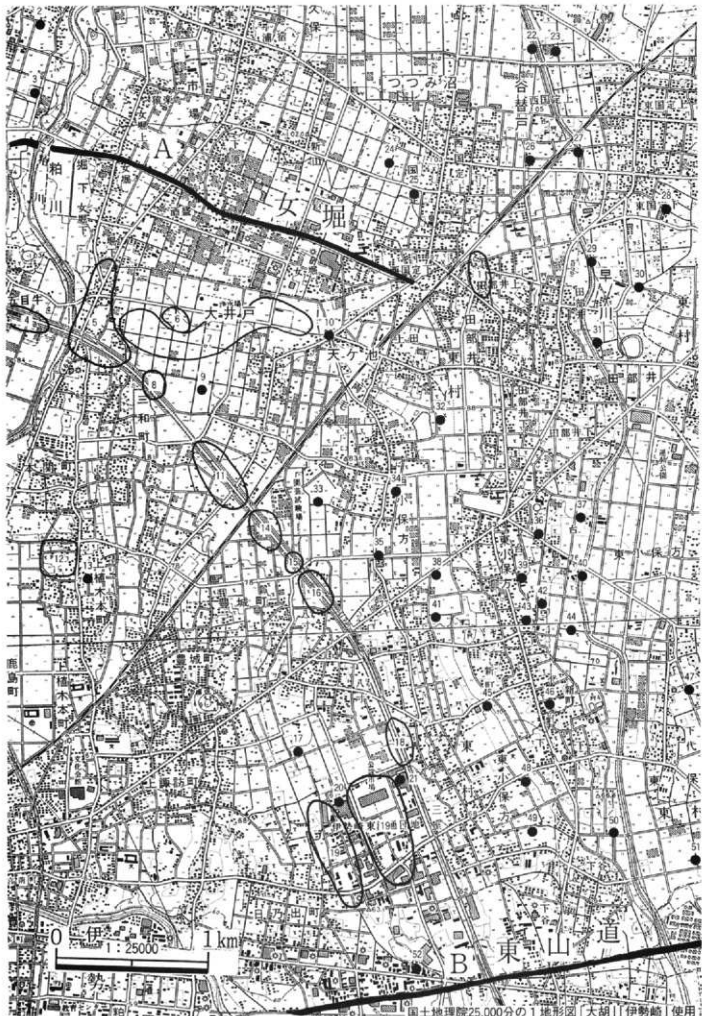
重要なもののみをあげても、12世紀初頭に掘削された大用水路女堀（A）がすぐ西の独結田まで来ているだけでなく、8世紀の東山道（B）は4.5km南を走っている。この二つの長大な遺跡に挟まれた地域には、7世紀に創建された上植木庵寺（12）、9世紀前半頃の須恵器窯跡群である舞台遺跡（6）、多くの黒書土器が出土した下敷川上遺跡（3）などがある。そして古代の大規模集落も、三和工業団地遺跡（7）、上植木光仙房遺跡（5）、書上上源之城遺跡（14）、伊勢崎・東流通団地遺跡（19）など検出例は少ない。三和工業団地では本遺跡と直接関係する8世紀築造の長大な堀が発見され、書上上源之城では掘立柱建物群と共に八楼鏡が出土している。

中世遺跡としては、上植木光仙房・舞台や上植木老町田遺跡（8）そして伊勢崎・東工業団地遺跡や上中西Ⅱ遺跡（40）などで居館が検出されている。また天ヶ池のほとりにある六道遺跡（10）には、やはり本遺跡と直接かかわりのある近世の遺構が残っており、「あずま道」の名が記されている。

本遺跡周辺地域が、古代においては佐波郡にあたり、中世からはそれをほぼ踏襲した漏名庄となったことは確かである。興味深いのは、いずれの場合も北端の水源地帯である本遺跡周辺に比較的重要な遺跡が集中していることである。また水の確保が難しい女堀以北の扇状地上には、ほとんど遺跡が確認できないことも注意すべきである。

- 1 田部大根谷戸 2 今井南原 3 下敷川上 4 五日牛清水田 5 上植木光仙房 6 舞台 7 三和工業団地 8 上植木老町田 9 無沼東 10 六道 11 書上本山 12 上植木庵寺 13 恵下 14 書上上源之城 15 書上下吉祥寺 16 八寸大道上 17 西ノ畑 18 三室坊主林 19 伊勢崎・東流通団地 20 鬼ヶ島 21 道上 22 曲沢Ⅰ 23 曲沢Ⅱ 24 独結田Ⅰ 25 独結田Ⅱ 26 天神前Ⅰ 27 天神前Ⅱ 28 諏訪原 29 東ノ宿 30 天神沼Ⅱ 31 天神沼Ⅰ 32 塚下 33 中西原 34 上栗本 35 八幡付 36 根性坊 37 野間 38 下柳沢 39 上中西Ⅰ 40 上中西Ⅱ 41 寺東 42 上中西Ⅲ 43 下中西Ⅰ 44 下中西Ⅱ 45 渡戸 46 新町 47 小泉南 48 下ノ西 49 高原 50 頼光塚 51 平井西 52 下原 A 女堀 B 東山道

参考文献：群野文1985「女堀」；1988「上植木光仙房遺跡」；1988「書上下吉祥寺遺跡・書上上源之城遺跡・上植木老町田遺跡」；1999「三和工業団地Ⅰ遺跡②」；2001「舞台遺跡」、東村教育委員会1987「佐波郡東村の遺跡」、群馬県企業局1982「伊勢崎・東流通団地遺跡」、伊勢崎市教育委員会1985「上植木庵寺」、群馬県歴史博物館2001「古代のみら たんけん！東山道駅路」



国土地理院25,000分の1地形図「大湖」〔伊勢崎〕使用

1-2 調査経過と方法

1-2-1 調査経過

本遺跡の調査は、用地買収のめどがたった平成13年6月から準備作業に入った。県教育委員会文化課による対象地範囲確定のための試掘調査も、大部分はこの時に実施され、我々もそれに立ち会うことになった。

その結果、事業用地の中央が自然の谷であることが判明し、調査対象地は大字固定⁽⁶¹³⁰⁷⁾所在の駅前広場に当たる部分と大字田部井所在の県道南側部分の南北2カ所に分かれることになった。以後前者を北区、後者を南区と呼称する。調査は7月1日から具体的な事前準備に入り、5日には北区から表土掘削を開始した。

大きな調査上の問題になったのは、排水である。周辺水田は田植え直後で水が入り、地下水位は高まっていた。そのため北区では東側境界部分に排水用溝を掘り、南区では中央を南北に走る用水路周辺約5m幅は調査対象からはずした。また北区の北西端には池跡に膨大な廃棄物が投棄されており、その処理にも手間がかかった。北区で検出した遺構は、古代大堀がほとんど全てで、摂氏40度に達する猛暑の中、その調査は8月8日まで続いた。

一方、南区の遺構確認作業は8月6日から開始したが、粘土に近い低地性の地山のため大規模な散水をしなければ確認作業を行うことができず、消防署から借りた放水ポンプの使用でようやく確認できる状況だった。しかし直射日光にさらされるとすぐに乾き、実際の調査では遺構埋土と地山の識別がかなり難しかった。にも関わらず確認面の下1mはすでに地下水位面であるため、やや深い遺構はすぐに出水した。

8月中旬頃までに古代大堀の特異性が判明したため、その成果に焦点をあてて8月26日(日)に最初の現地説明会を開催した。地元の方々を中心に当日約530人の見学者があっただけではなく、その後も村の関係者また小中学校生徒などともまった見学者が続いた。そのため、北区の工事への引き渡しは当初よりも延びて9月13日となった。南区は苦勞して確認した割には遺構の残存状況は悪く、発掘作業自体は9月下旬までにはほとんど終了した。そして撮影・実測作業を終えて9月30日に調査は完了した。

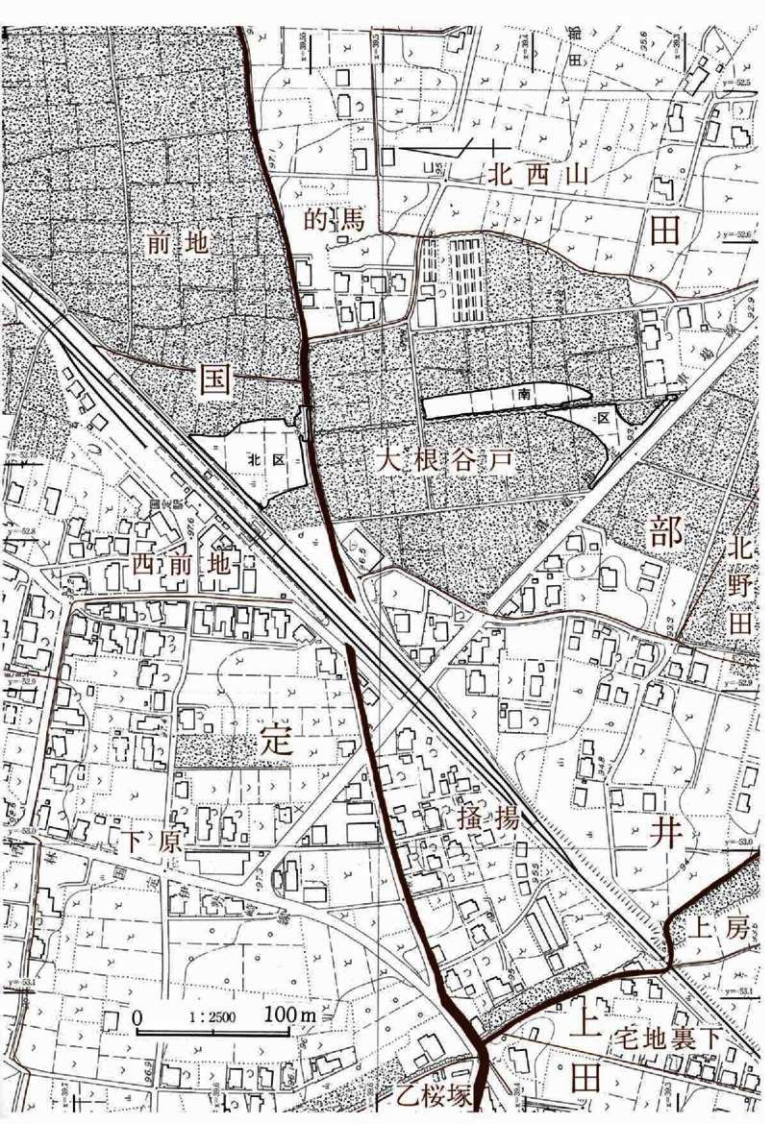
この時までには未調査であった北区南端の村道下については、工事と関連した立会調査を平成14年1月23日から県教育委員会文化課が実施した。その結果、東村の名前由来とも言われている中世の「あずま道」が発見され、1月27日(日)には降雪の中、説明会が開催された。

1-2-2 調査方法

北区は大字固定⁽⁶¹³⁰⁷⁾西前地、南区は大字田部井⁽⁶¹³⁰⁷⁾大根谷戸⁽⁶¹³⁰⁷⁾に位置する。両者の間には自然の谷が入っているため別の遺跡と考えることも可能だが、北区の主要遺構である古代大堀とあずま道が現在の大字境界の村道になった経緯を考慮して、一つの遺跡とした。

両者は次回図に記したように北北東から南南西に走る谷⁽⁶¹³⁰⁷⁾戸と呼ばれる低地で、調査前は水田だった。標準土層は、南区南側で1.水田耕作土(0～約20cm)・2.As-B軽石混入褐色砂質土(～約40cm)・3.暗褐色粘質土(～約80cm)・4.黒色粘質土(～約80cm以下)となる。北に向かうにつれ2層以下は浅くなるが、土地改良により3層上面まで攪乱を受けている場所が多かった。また南区南端では4層がより上面で現れ、谷地上位の状況が認められた。

調査では3層上面もしくはそのような攪乱下面の確認面までを、重機で掘削して遺構を確認した。低地質の土層であるため、旧石器試掘は行っていない。また絶対位置の特定は旧国土座標を使用した⁽¹⁾が、測地成果2000での読替⁽²⁾(内数値)は次のとおりである。北区古代大堀北西端(A地点) X=39,566(39,917) Y= -52,765(-53,046) 南区掘立117号遺構南東柱穴(B地点) X=39,352(39,703) Y= -52,712(-52,993)



1-3 調査に至る経過

伊勢崎市の東に位置する佐波郡東村では、北端にJR両毛線が通り、国定駅が村内唯一の鉄道駅として存在する。しかし同駅はこれまで線路の北側に駅舎があって、南側の村内大部分からは踏切を越えねば到達できない状況にあった。

そのため、国定駅南口整備事業が、平成11年に国土庁による地域戦略プランにおいて、佐波伊勢崎地区の重点整備事業として認定された。事業は、群馬県が実施する県道国定停車場線の改築（現県道からの南口アクセス道路の建設）と、東村が実施する自由通路の建設及び南口駅前広場の整備で構成された。どちらも平成11年度から設計が開始された。

自由通路は国定駅の南北を結ぶもので、駅前広場やアクセス道路とともに、これが完成すれば駅利用客の半数以上は南口を利用することになり、北口の混雑が大幅に解消される。駅前には送迎車の待機場所や待合所などが設置され、完備された歩道とともに、車両は一方通行によるロータリー方式でスムーズな出入りが出来るよう配慮されることになる。

アクセス道路は、県道国定停車場線から直接南口へ通じる、両側に歩道をもつ2車線の道路で、交差点も右折・左折レーンが設けられる設計となった。

整備事業前の南口は田が広がり、稲と小麦の二毛作が行なわれていた。そのような農地の用地買収は当初の予定より遅れ、ようやく平成13年6月初頭に下旬の麦刈り後の引き渡しが確定した。県教育委員会文化課による調査対象地確定のための試掘も、最終的に終了したのは6月21日になってからである。その結果、事業予定地の中央部分は遺構の見られない自然の谷であることが判明し、調査対象地からはずされることになった。一方、調査主体については、当初県と村の実施部分が別個に行われる可能性もあったが、最終的には当事業団が一括して実施することになった。

アクセス道路及び駅前広場整備工事箇所である本体部分の調査は、7月1日から9月30日まで行った。その期間の中で未調査であったアクセス道路と村道の交差点部分は、工事に並行して立会調査されることになった。県教育委員会文化課による同調査は、平成14年1月23日から29日まで行われた。



北区全景 東から



北区全景 西から



北区遠景 西方向



北区全景 西から



北区遠景 西から



北区遠景 東方向



南区全景 南から



南区全景 南から



南区全景 西から



南区全景 北東から



南区全景 西から



南区北側全景 南東から



南区遠景 北東方向



六道の辻道標



31号道構作業風景



31号道構作業風景



31号道構作業風景



118号道構作業風景



第一回現地説明会



第一回現地説明会



第一回現地説明会

第 2 章 検出成果

2-1 北区

2-1-1 概要

北区では合計39基の遺構を調査時点で確認した。整理時に確定した時代別の内訳は次の通りである。

現代	土坑	10基
近代	池	1基
	土坑	1基
近代の可能性	土坑	13基
中世	道路	1条
	溝	3条
中世の可能性	土坑	1基
古代	堀	1条
時期不明	土坑	8基

遺物は全体に非常に少なく、遺構外出土遺物は皆無である。上記以外の時代の遺物は、僅かに縄文土器の小片が古代の堀内から1点出ただけである。

全体に北から南、西から東に向けて緩い傾斜がある。確認面は水成堆積の暗褐色粘質土で、その下の地山は白色シルト質土になる。調査時には東・北側の隣接地の水田に水が入っていたため、東側境界には排水溝を設置した。北西部分の近代池跡は大量の現代の廃棄物が投棄されており、攪乱となった。他に遺跡範囲確認時の試掘及び水田の排水溝跡が攪乱になっている。



田部井大根谷戸遺跡北区全体図

2-1-2 近世以降

33号遺構 (図13頁 写真14頁)

【位置】575-755G 【形状】方形か 【規模】2.4以上×1.4m以上 【重複】なし 【埋土】1 灰褐色砂質土炭化粒微量含む 2 黒褐色砂質土 硬く締まり硬・遺物を多く含む炭化物少量含む 3 黒褐色シルト質土暗褐色土少量含む 【遺物】覆土より透明ガラス瓶 (3001)・瀬戸美濃二彩尾呂碗 (1007)・肥前刷毛目陶器鉢 (1008)・肥前染付筒型碗 (1009) 出土 【特徴】検出部分は底が平坦で隅も直角に近い形状が見える。自然の池そのものとは考えにくく、人為的かつ大がかりな造成の痕を感じさせる。出土遺物より近代以降の所産だろう。少なからず出土した近世の遺物も含めて、周辺集落の廃棄物が投棄されたと考えられる。

29・30・32・34～38号遺構 (図13頁 写真14頁)

【位置】560-760G周辺 【形状】不整形 【規模】長1m前後 【重複】なし 【埋土】記録せず 【遺物】なし 【特徴】これらは木柱が残っていたものから判断できるように、現代の架線支持坑と考えられる。埋土はいずれも全く締まりのない砂質土だった。

1～6・15～21・24～26号遺構 (図15頁 写真16・17頁)

【位置】600-735～615-730G 【形状】円形・長方形 【規模】円形径1.0×0.1～0.3m 方形0.9～1.7×0.6～0.7×0.2～0.3m 【重複】17号 (旧)・16号 (新)・15号 (新)・21号 (旧)・20号 (新) 【埋土】1 黒褐色砂質土 地山暗褐色粘質土粒少量含む 2 同前 黄褐色土粒多く含む 3 同前 黄褐色土塊少量含む 4 同前 黄褐色土粒少量含む 【遺物】なし 【特徴】1・2号は木柱が内部に残っており現代の架線支持坑である。それ以外は大きく形状から2種類に分けられるが、埋土はほとんど同じで明瞭な新旧関係はほとんど確認できない。性格を特定する決定的な材料に乏しいが、他遺跡の例から近世・近代の畝作に関わる貯蔵用土坑の可能性も考えられる。

2-1-3 中世・古代

118号遺構 (道路) (図19頁 写真23・24頁)

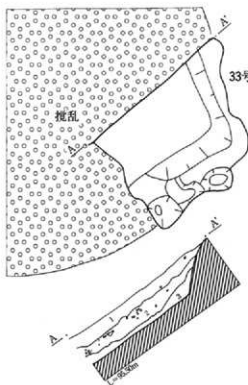
【位置】550-710G 【形状】走向N84° E 両端の路面硬化面高低差16cm 【規模】路面幅3.2m、北側溝土幅1.2m南側溝土幅0.8～1.0m 検出長23.9m 【重複】なし

【埋土】1 褐色砂質土 浅間As-A軽石混じる 2 同前 炭化粒・小礫混じる 3 同前 As-A混じる 4 同前 3に粘質土水平に混在 5 同前 As-A多く含む 6 同前 硬化 砂混在 7 同前 硬化 As-A混じる 8 同前 小礫混じる 9 硬化 3層以上互層堆積 10 同前 As-A混じる 11 同前 やや硬化 As-Aが主体 12 同前 As-B混じる 13 同前 やや硬化 As-Bと砂が多い 14 同前 As-Bと炭化粒混じる 15 暗褐色砂質土 硬化 砂主体 16 褐色砂質土 硬化 As-B・鉄分混じる 17 同前 As-B多い 18 同前 やや粘質 19 同前 硬化 As-B混じる 20 同前 部分的硬化 As-B多い 21 黒褐色粘質土 As-C混じる 22 同前 21より暗色 23 茶褐色粘質土 橙色粒混じる 24 褐色砂質土 14に似るがより緻密 25 同前 締まり弱As-B多く含む 26 同前 締まり弱粘質土混在

【遺物】西側攪乱から瀬戸美濃陶器刷毛目皿 (1011)・瀬戸美濃磁器染付碗 (1012) 出土

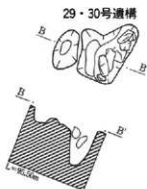
【特徴】断面上では6枚の路面硬化面と3時期の側溝 (2・12・14層)を確認したが、平面的には最下位の路面のみを調査した。近代以降の攪乱が多かったが、主に北側と西側を中心に硬化面を検出した。硬化面には不規則な浅い凹凸が見られる。全体としては東側に少し傾斜している。側溝は両側とも似た形状だが北側のものが部分的に深い (調査時間の制約で完掘していない)。両側溝はほぼ平行している。

29・30・32・33・34~38号遺構



33号遺構

29・30号遺構



32号遺構

北
西

34号遺構



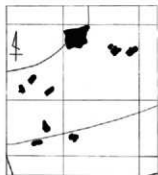
36号遺構



35号遺構



+570
-780



37号遺構



38号遺構



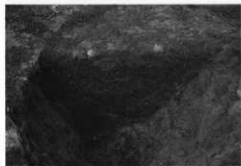
+565
-785



33号遺構出土遺物

0 1:3 10cm

0 1:80 2m



29号遺構断面 南西から



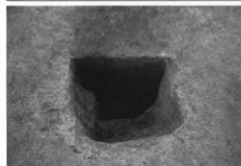
29号遺構全景 南西から



30号遺構断面 北西から



30号遺構全景 北西から



34号遺構断面 南西から



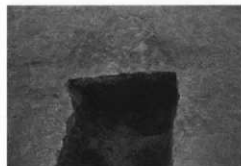
35号遺構断面 南から



36号遺構断面 北から



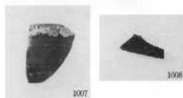
37号遺構断面 南東から



38号遺構断面 西から

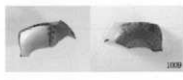


3001



1007

1008



1009

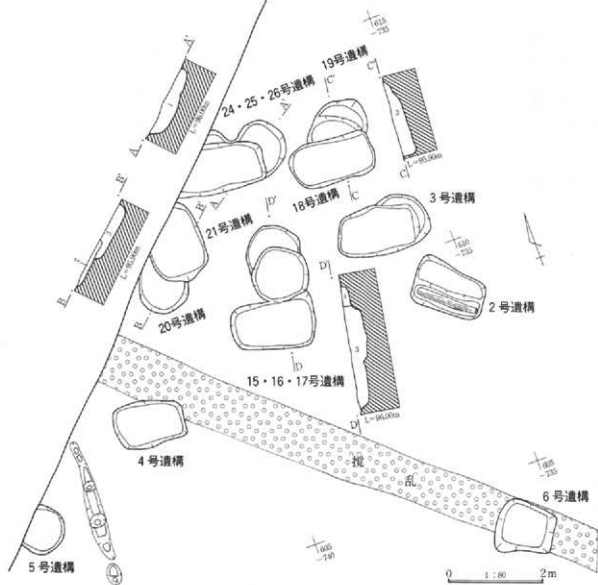
33号遺構 出土遺物

1~6・15~21・24~26号遺構



調査区外

1号遺構





1号遺構断面 南西から



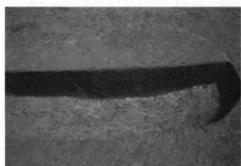
1号遺構全景 南西から



2号遺構断面 南西から



2号遺構全景 南東から



3号遺構断面 南から



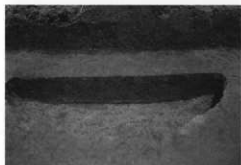
3号遺構全景 東から



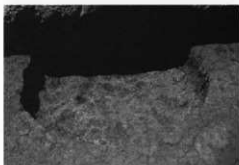
4号遺構断面 東から



4号遺構全景 東から



5号遺構断面 南東から



5号遺構全景 南東から



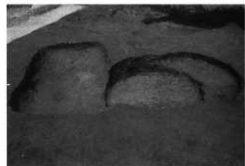
6号遺構断面 南東から



6号遺構全景 南東から



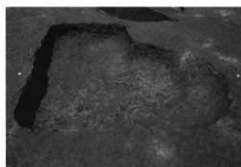
15・16・17号遺構断面 東から



15・16・17号遺構全景 東から



18・19号遺構断面 東から



18・19号遺構全景 東から



20・21号遺構断面 南東から



20・21号遺構全景 南から



24～26号遺構断面 南東から

【その他】最下位の路面の形成時期は、As-B降下以後でAs-A降下以前の範囲になる。だが、その間に3枚の路面があることと、最下位路面直下はAs-B降下以前の黒褐色粘質土であるため、As-B降下時からそれほど隔たらない可能性が高い。また硬化面は側溝間の北側に偏している傾向がある。通行の特徴を示しているかもしれない。

31号遺構（堀）（図19頁 写真21～23頁）

【位置】560-720G 【形状】断面逆台形 走向N80°E 両端底の高低差約40cm 【規模】上幅5.2～6.2m底幅2.6～3.0m 検出長45.3m 【重複】28号より旧

【埋土】1黒褐色砂質土 浅間As-B軽石混在 2同前 As-Bやや多い 3黒褐色砂質土 As-B多く含む 4As-B純層 5黒褐色粘質土 浅間As-C軽石微量混じる 6同前 含有物少ない 7暗褐色粘質土 地山シルト質土粒少し混じる 8黒褐色粘質土 シルト質土多く含む 9同前 8より暗色 10同前 含有物なし 11同前 As-C微量混じる 12暗褐色粘質土 地山シルト質土多く含む 13暗褐色シルト質土 地山と同質 14黒褐色粘質土 地山シルト質土微量混じる 15同前 地山シルト質土混在 16同前 As-C全体に含む 17同前 含有物なし 18暗褐色シルト質土 黄色粒微量混じる 19暗褐色粘質土 地山シルト質土混在 硬い 20同前 地山が硬化 浅間YP軽石混じる

【遺物】下層から土師器杯（1003）、中層から須恵器杯（1005,16）、覆土から袋状鉄斧（3002）・縄文土器浅鉢片（1006）出土。

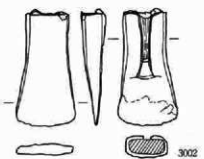
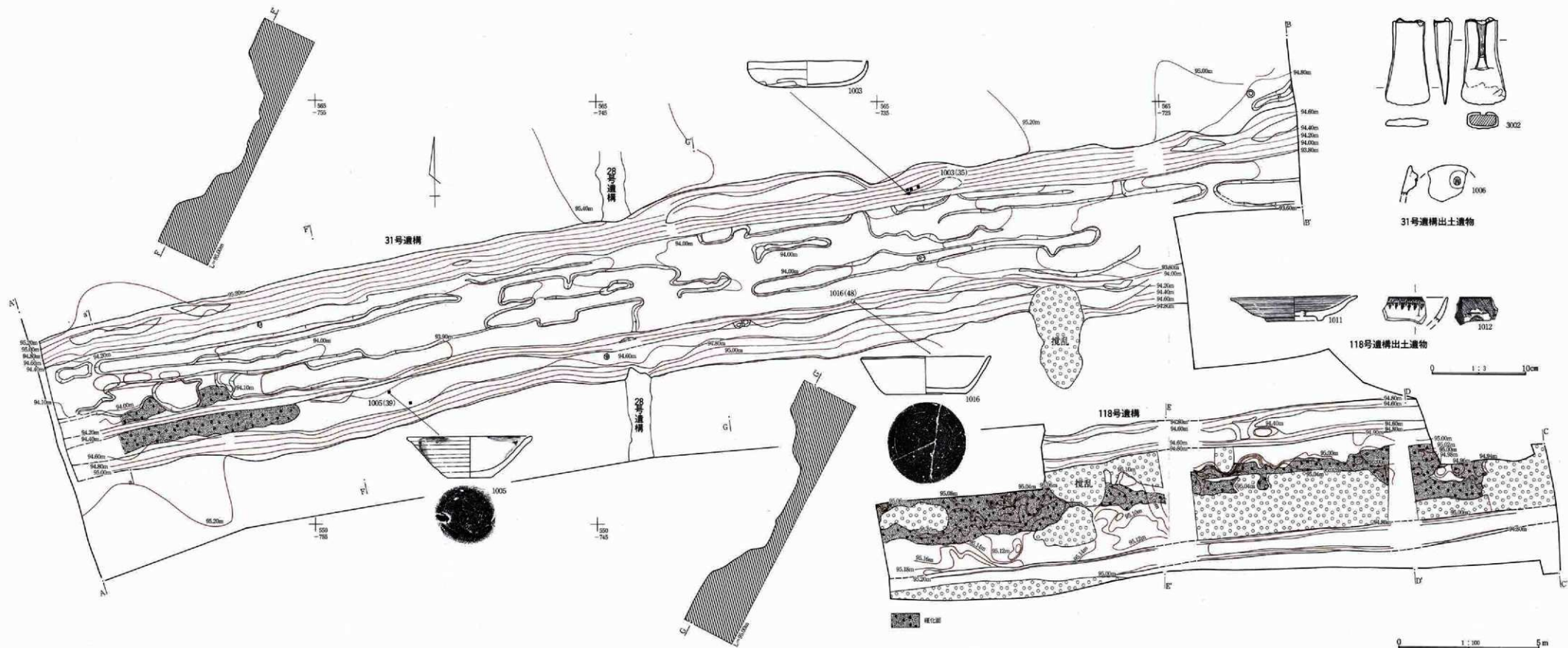
【特徴】土層断面から明らかのように、掘り返しがなされており、平面的に検出したのはその重なった姿である。A断面から確認できる本来の規模は、後期（上幅5.5m底幅1.0m深さ1.5m）と前期（上幅約5m底幅約1.6m強、深さ1.4m）で底幅が少し異なる。だが逆台形の断面に基本的な差はない。前期の埋土中にはかなり多量に、地山土が不規則に見える。掘削土を北側に土塁状に盛り上げていたものが崩落した痕跡と考えられる。後期には顕著な崩落痕はないが、西端の底の一部に硬化面がある。また後期の南側法面には顕著なテラスがあり、東側で狭くなるものの基本的に続いており、北側法面とは差が見られる。

底には主に主軸方向に平行して10cm程度の段差の凹凸が延びるが、全体としては平坦を意識して掘削されている。調査時には周辺の水田からの影響で出水したが、基本的に水流痕は平断面共に全く見られない。平面的には北側が僅か膨らむ傾向は認められるが、直線を企図した掘削であることは間違いない。なお、遺物は図示したものが全てで、極めて少なく、いずれも水流による磨耗は認められない。

【その他】後期の時期は、浅間As-B軽石が降下した1108年には2/3程度が埋没していることと、中層から10世紀の須恵器杯(1005)が出土したことで、10世紀前後に掘削され12世紀初頭には完全に埋まってなかったことが分かる。前期の掘削は、後期より古いことと下層に8世紀の土師器杯（1003）があったことから、8世紀頃と考えられる。

底の凹凸や一部に残る硬化面は、掘削作業の痕跡が残ったものであろう。また北側の膨らみは調査地点での部分的な特徴で、本来は直線状を計画したことは間違いない。東西両端での深さの差は、東側が自然の低地にあたるために恐らく雨水の排水用に設けられたと思われる。しかし恒常的な流水を前提とした、用水路的使用は考えられない。

なお袋状鉄斧（3002）については詳細な出土状態を確認できなかった。



31号遺構出土遺物



118号遺構出土遺物

1:3 10cm

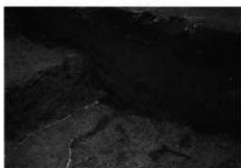
1:100 5m



31号遺構東端断面 B-B' 西から



31号遺構東端断面 B-B' 西から



31号遺構西端断面 A-A' 東から



31号遺構西端断面 A-A' 東から



31号遺構西端 東から



31号遺構全景 東から



31号遺構底 東から



31号遺構西側 東から



31号遺構西側 東から



31号遺構東側底 西から



31号遺構東側底 西から



31号遺構中間部 西から



31号遺構全景 東から



31号遺構全景 北西から



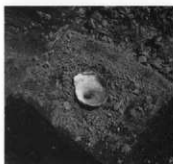
31号遺構全景 西から



31号遺構全景 西から



31号遺構全景 東から



31号遺構遺物1005出土状況
北西から



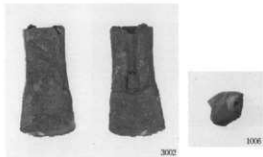
31号遺構遺物1016出土状況 北から



31号遺構遺物1003出土状況 南から



31号遺構遺物1003出土状況 西から



31号遺構出土遺物



118号遺構東端断面 C-C' 西から



118号遺構東端断面 C-C' 西から



118号遺構東端断面 C-C' 西から



118号遺構全景 東から



118号遺構全景 東から



118号遺構全景 東から



118号遺構全景 西から



118号遺構全景 西から



118号遺構全景 南西から



118号遺構西端硬化面検出状況 西から



118号遺構西端硬化面検出状況 東から



118号遺構全景 西から



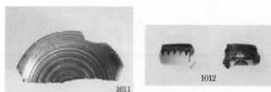
118号遺構全景 西から



118号遺構全景 西から

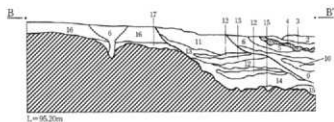
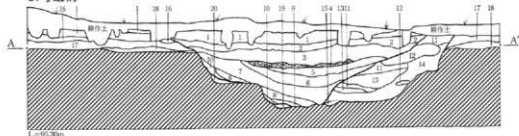


118号遺構全景 南東から



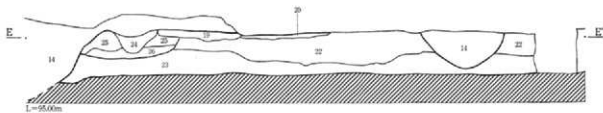
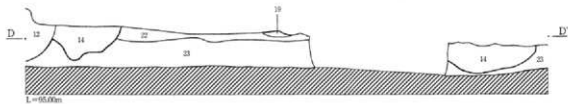
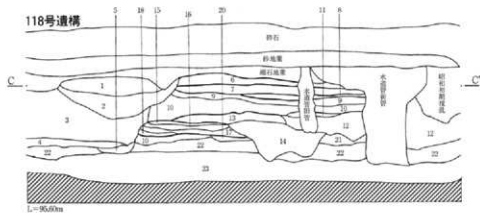
118号遺構出土遺物

31号遺構



0 1:80 2m

118号遺構



0 1:40 1m

溝群 (図27頁 写真28・29頁)

26号遺構

【位置】550-740G 【形状】断面逆台形 走向北：N10° W 南：N5° W 【規模】上幅0.9～1.0m底幅0.4～0.6m深さ0.3～0.4m 検出長北：32m南：21m 【重複】27号と合流 22号より旧か 【埋土】1 暗褐色砂質土 地山褐色土粒少量含む 2 黒褐色砂質土 地山褐色土粒少量含む 3 同前 褐色土塊含む 【遺物】下層よりかわかけ皿 (1004) 出土 【特徴】27号との合流点で走向が変わる。自然の傾斜に合わせて南が低い。顕著な水流痕は見られない。合流点から南は少し高くなる傾向があり、本来北側と27号が最初のものであった可能性がある。その点から22号も後から作られたと考えられる。

27号遺構

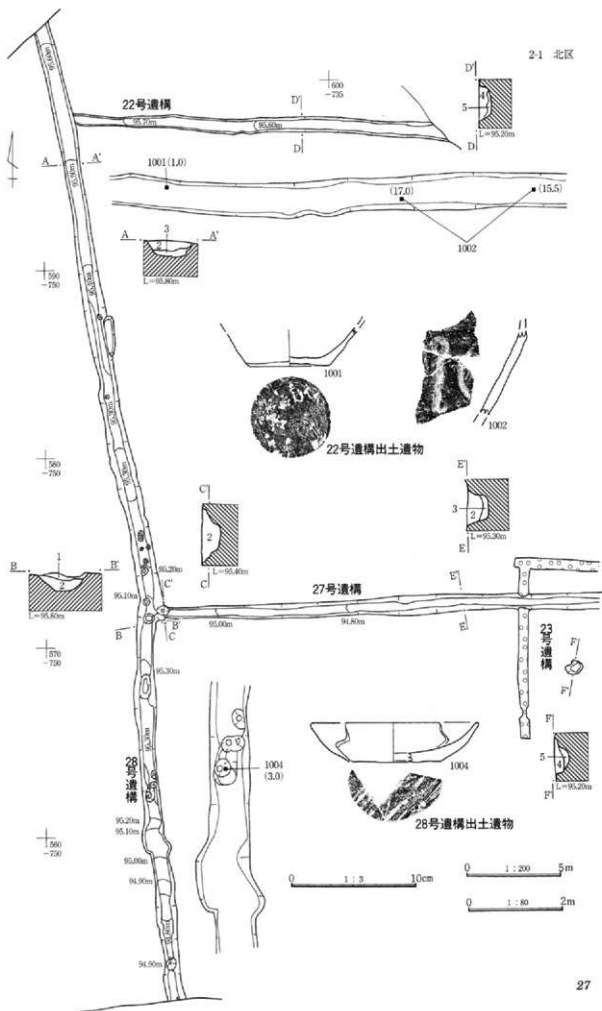
【位置】570-720G 【形状】断面U字形 走向N88° E 【規模】上幅0.8m底幅0.5m深さ0.5m 検出長23.5m 【重複】28号と合流 【埋土】前記2・3層 【遺物】なし 【特徴】直線状に延びる。

22号遺構

【位置】595-730G 【形状】断面U字形 走向N88° W 【規模】上幅0.8m底幅0.5m深さ0.3m 検出長19.5m 【重複】28号より新か 【埋土】4 黒褐色砂質土 黄褐色土粒少量含む 5 暗褐色砂質土 黒褐色土粒含む 【遺物】下層より須恵器環 (1001)、上層より縄文土器深鉢片 (1002) 出土 【特徴】28号との接点には段差がある。水流痕はない。

23号遺構 (土坑)

【位置】565-720G 【形状】不定形 【規模】0.5×0.3×0.3m 【重複】なし 【埋土】前記4・5層 【遺物】なし 【特徴】性格不明 中世か。

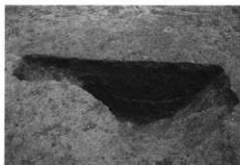




22号遺構断面 東から



22号遺構全景 西から



23号遺構断面 西から



23号遺構全景 北西から



27号遺構断面 C-C' 東から



27号遺構断面 E-E' 東から



27号遺構全景 西から



28号遺構断面 A-A' 南から



28号遺構断面 B-B' 南から



28号遺構全景 南から



28号遺構全景 北から



1001



1002

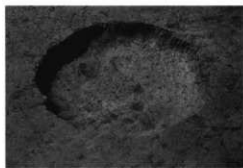


1004

22・28号遺構出土遺物



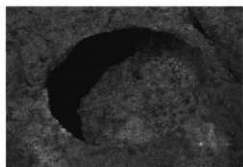
7号遺構断面 南から



7号遺構全景 南から



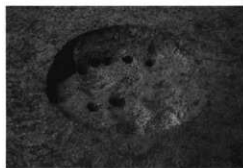
8号遺構断面 南から



8号遺構全景 南から



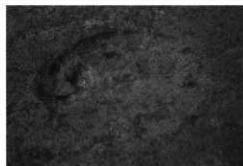
9号遺構断面 南から



9号遺構全景 南から



10号遺構断面 南から



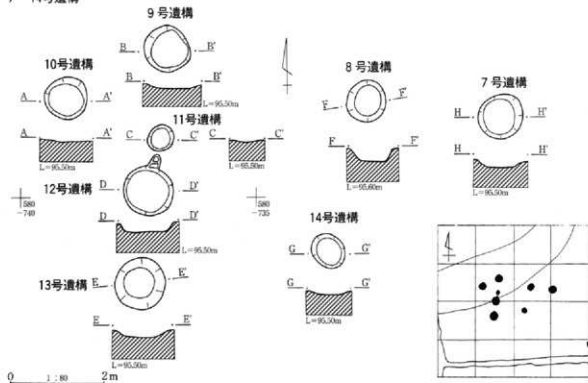
10号遺構全景 南から

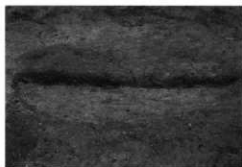
2-1-4 時期不明の遺構

7～14号遺構 (図30頁 写真29・31頁)

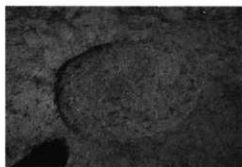
【位置】575-730～580-735 G 【形状】円形 【規模】大型：径0.6～0.9×0.1～0.2m 小型：径0.4m 【重複】なし 【埋土】褐色砂質土 【遺物】なし 【特徴】集中して検出した土坑群だが、形状が似ている以外に積極的な痕跡を残していない。中世以降のものとは推定できるが、性格は不明。

7～14号遺構

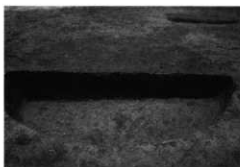




11号遺構断面 南から



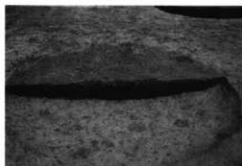
11号遺構全景 南から



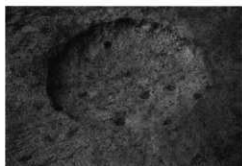
12号遺構断面 南から



12号遺構全景 南から



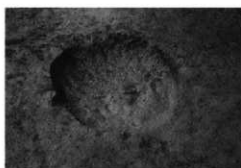
13号遺構断面 南から



13号遺構全景 南から



14号遺構断面 南から



14号遺構全景 南から

2-2 南区

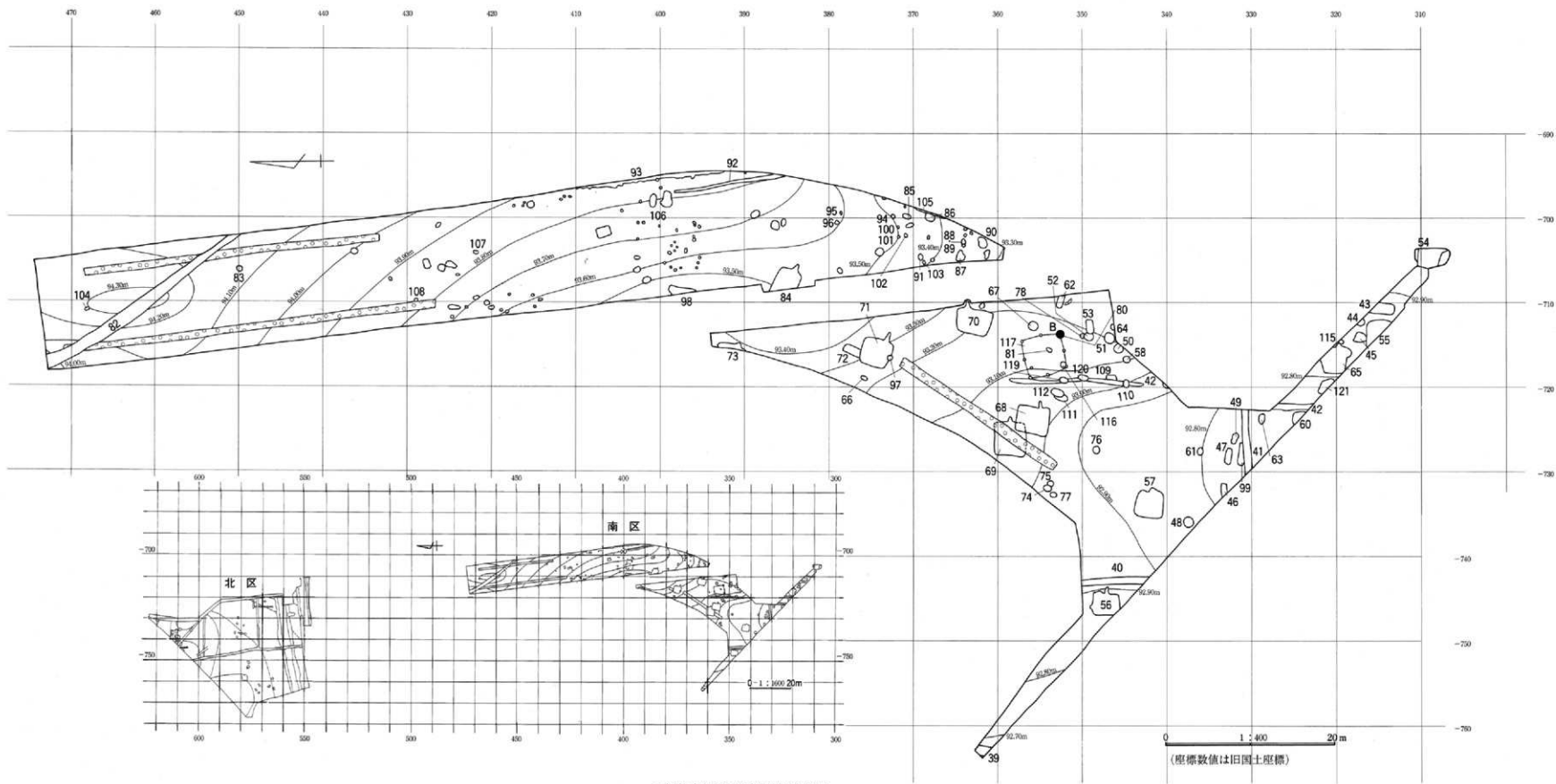
2-2-1 概要

南区では合計82基の遺構を調査時点で確認した。整理時に確定した時代別の内訳は次の通りである。

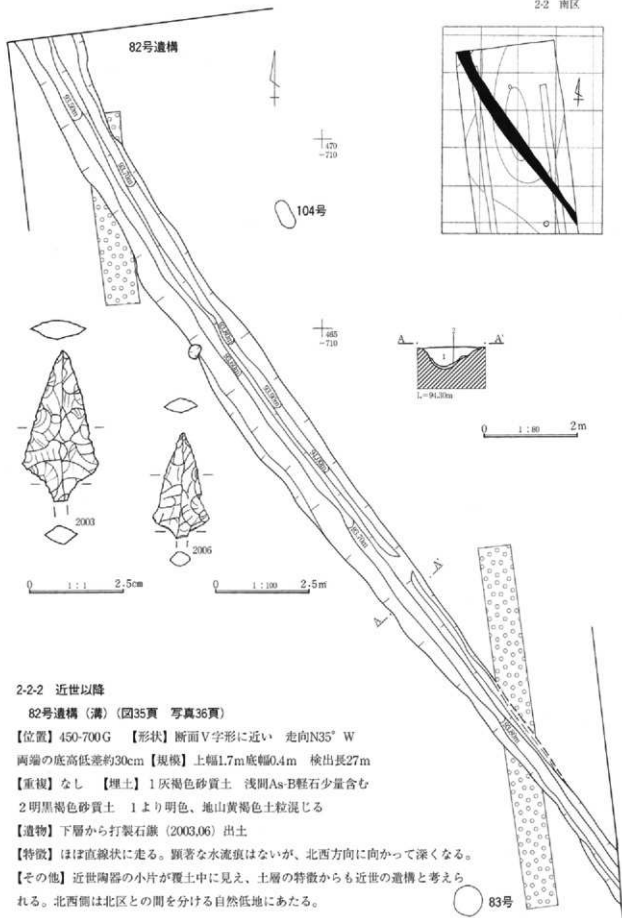
近世	道路	1条
	溝	1条
	土坑	4基
古代	竪穴住居	11軒（他に可能性あるもの1軒）
	掘立柱建物？	2基（単独柱穴）
	溝	3条（他に可能性あるもの1条）
	土坑	4基
古代の可能性	ピット	1基
	竪穴住居？	1基
	掘立柱建物	1棟（他に可能性ある単独柱穴1基）
	溝	1条
	土坑	24基
時期不明	ピット	4基
	土坑	10基
	ピット	7基

遺物は竪穴住居以外は少なく、遺構外出土遺物も多くない。ただし前記以外の時代の遺物として、竪穴住居掘り方などから旧石器が2点、また縄文時代の石鏃が3点出土している。

全体に北から南、東から西に向けて緩い傾斜がある。確認面は北区と同様水成堆積の暗褐色粘質土で、その下の地山は白色シルト質土になる。僅かに南東端のみにローム層が存在した。遺跡範囲確認時の試掘だけが攪乱だが、中央には南北に現在の用水路が走っており、約5m幅で調査はできなかった。



田部井大根谷戸遺跡南区全体図



2-2-2 近世以降

82号遺構（溝）（図35頁 写真36頁）

【位置】450-700 G 【形状】断面V字形に近い 走向N35° W
 両端の底高低差約30cm 【規模】上幅1.7m底幅0.4m 検出長27m

【重複】なし 【埋土】1 灰褐色砂質土 浅間As-B軽石少量含む
 2 明黒褐色砂質土 1より明色、地山黄褐色土粒混じる

【遺物】下層から打製石鏃（2003,06）出土

【特徴】ほぼ直線状に走る。顕著な水流痕はないが、北西方向に向かって深くなる。

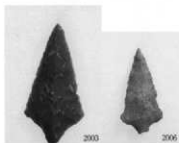
【その他】近世陶器の小片が覆土中に見え、土層の特徴からも近世の遺構と考えられる。北西側は北区との間を分ける自然低地にあたる。



82号遺構断面 南東から



82号遺構石礎出土状況 南東から



82号遺構出土遺物



82号遺構石礎出土状況 南東から



82号遺構全景 南東から



54号遺構掘り方全景 北から



54号遺構掘り方 西から



54号遺構掘り方 北西から



1027



1024

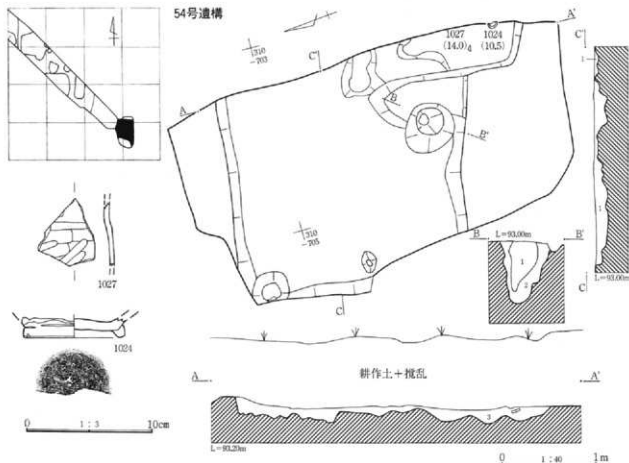
54号遺構出土遺物



54号遺構掘り方 西から



54号遺構掘り方遺物出土状況 西から



2-2-3 古代

54号遺構（竪穴住居）（図37頁 写真36・37頁）

【位置】305-700 G 【形状】長方形？ 【規模】2.2×2.3m以上 【重複】不明

【埋土】1 黒褐色粘質土 ローム粒少量含む 2 暗褐色粘質土 ローム塊少量含む 3 暗褐色粘質土 ローム塊混在

【遺物】掘り方から須恵器瓶類？（1024）・土師器甕（1027）出土

【内部施設】検出したのは掘り方で、南側のピットは柱穴と考えられるが、北西側のピットは浅く性格不明。南東側の突出部分の性格も不明。

【その他】検出した竪穴住居では唯一完全なローム層中に掘られた遺構だが、上位は大きく攪乱されていた。

55号遺構（竪穴住居）（図39頁 写真38頁）

【位置】310-710 G 【形状】方形？ 【規模】2.1×3.0m以上 【重複】不明

【埋土】1 褐色砂質土 浅間As-B軽石混在 2 暗褐色粘質土 白色軽石・ローム粒少量含む 3 暗褐色粘質土 ローム粒少量含む 4 同前 ローム塊少量・炭化粒僅か含む

【遺物】下層から土師器甕（1028）、中層から須恵器大甕（1023）・同碗（1025）・土師器甕（1022）・同坏（1029）、覆土から須恵器坏（1026）出土

【内部施設】中央付近に浅いピットがある。

【その他】東壁側のみがローム層を地山とし、初期埋没も東側から大きい。



54号遺構掘り方 南東から



54号遺構掘り方 南から



54号遺構掘り方 南から



55号遺構断面 東から



55号遺構遺物出土状況 北から



1020



1022



1023



1025



1029



1026

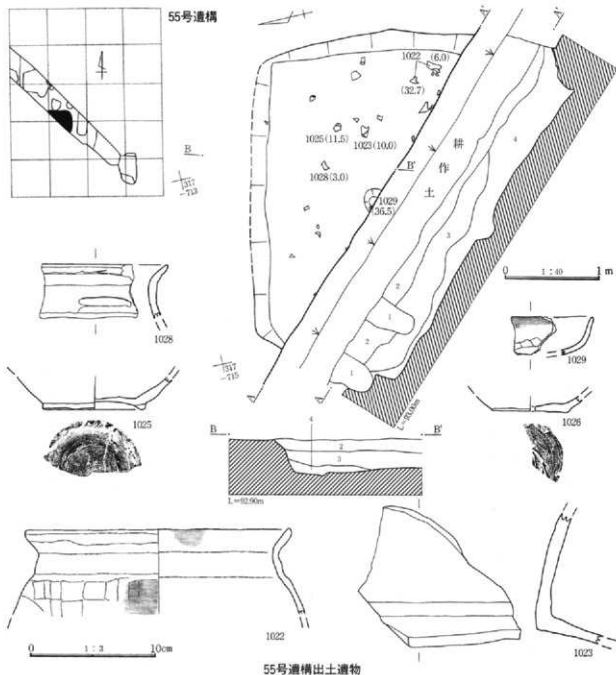
55号遺構出土遺物



56号遺構断面 C-C' 南から



56号遺構断面 B-B' 西から



56号遺構（竪穴住居）（図41頁 写真38・40頁）

【位置】345-745 G 【形状】隅丸方形？ 【規模】2.8×2.8m以上 【重複】なし

【埋土】1 黒褐色粘質土 白色軽石少量・暗褐色土粒多く含む 2 同前 暗褐色土粒・ローム粒多く含む
3 同前 焼土粒多く含む 4 同前 暗褐色土粒少量・焼土粒僅か含む

【遺物】竈・下層から須恵器環（1031,32）、覆土から須恵器小型環（1033）出土

【内部施設】南東隅に貯蔵穴がある。竈は地山を掘り残して軸とし、焚き口部分の構造材として石を使う。北壁西よりに小さな張り出しがあるが性格不明。

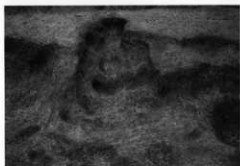
【その他】地山と埋土が近似していたため、正確な形状は捉えていない。須恵器環（1031）内部には線刻がある。



56号遺構遺物出土状況 西から



56号遺構カマド遺物出土状況 西から



56号遺構カマド掘り方 西から



56号遺構掘り方全景 西から



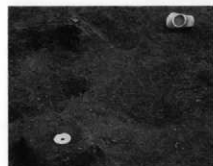
56号遺構出土遺物



57号遺構出土遺物(1)



57号遺構断面 A-A' 東から



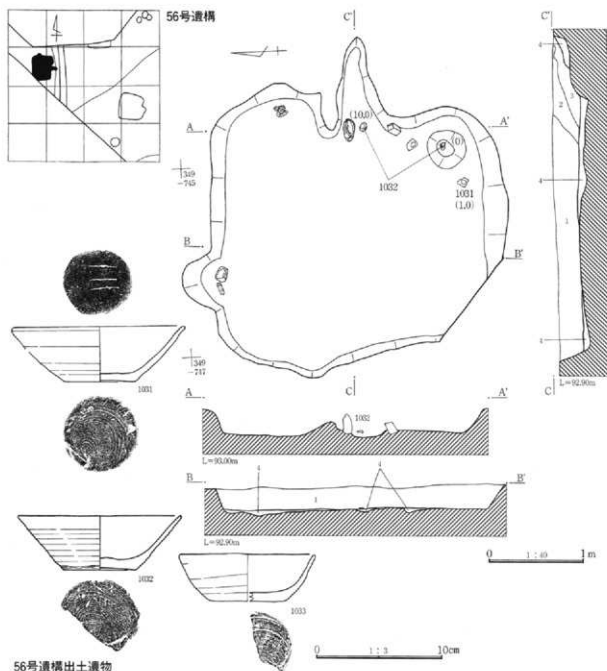
57号遺構遺物出土状況 西から



57号遺構遺物出土状況 西から



57号遺構遺物出土状況 西から



57号遺構（竪穴住居）（図42・43頁 写真40・44頁）

【位置】340-730 G 【形状】隅丸方形 【規模】3.0×2.8m以上 【重複】なし

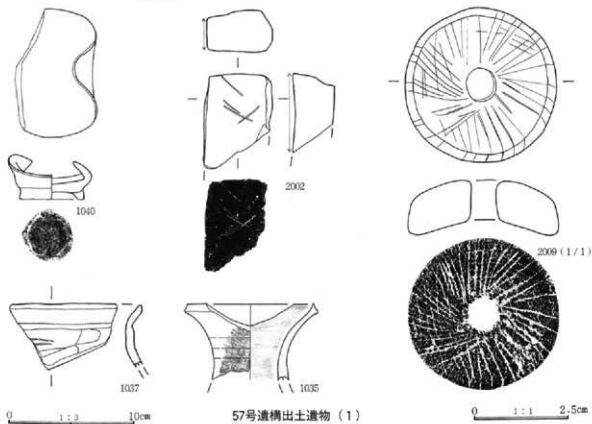
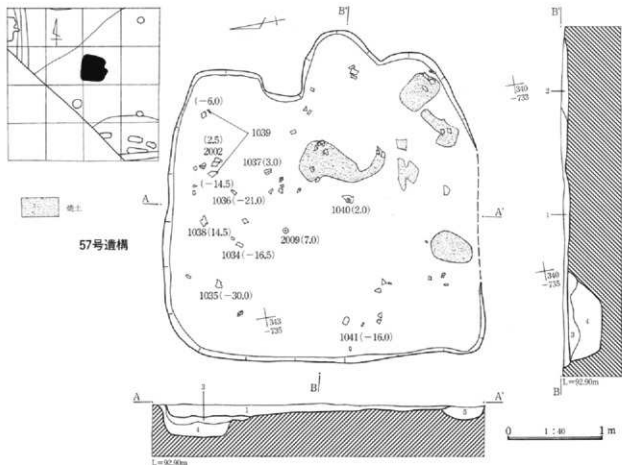
【掘土】1 黒褐色粘質土 焼土粒・白色粒子少量、暗褐色土粒僅か含む 2 同前 焼土粒微量含む 3 同前 小礫多く含む 4 同前 暗褐色土粒微量含む 5 暗褐色粘質土 3層・ローム粒僅か含む

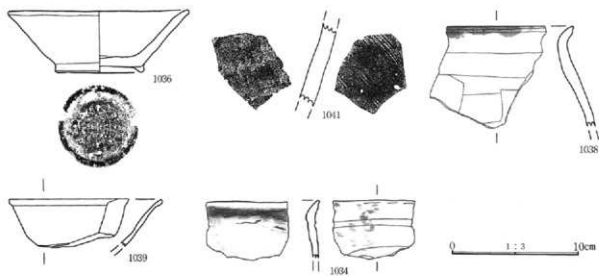
【遺物】下層から須恵器耳皿（1040）・土師器甕（1037）・砥石（2002）・石製紡錘車（2009）、掘り方から猿投灰軸短頸瓶（1035）・須恵器碗（1036,39）・同大甕（1041）・土師器小型甕（1034）・同甕（1038）出土

【内部施設】上位の残存状態は極めて悪く正確な形状は捉えられない。南東側を中心に焼土が床面に散在。生活面での施設は不明だが、掘り方は東側以外が幅広く溝状になる。

【その他】焼失の可能性がある。掘り方中には遺物の残存が多い。

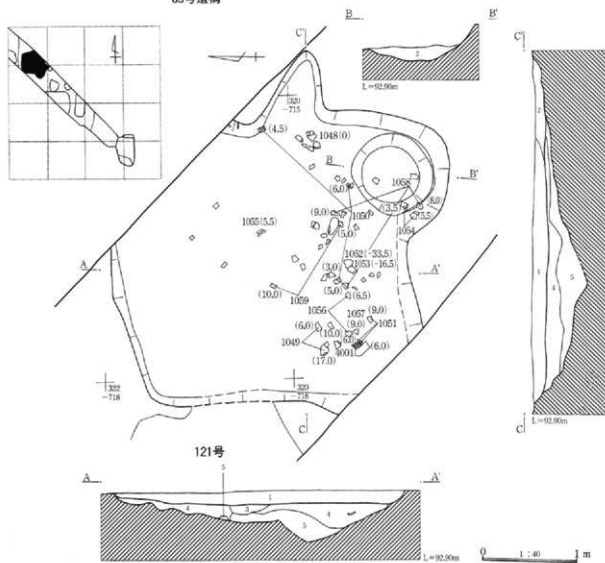
第2章 検出成果





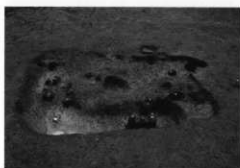
57号遺構出土遺物(2)

65号遺構





57号遺構遺物出土状況 西から



57号遺構掘り方全景 西から



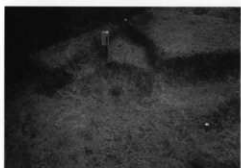
57号遺構出土遺物(2)



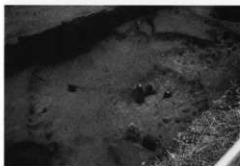
65号遺構断面 C-C' 南から



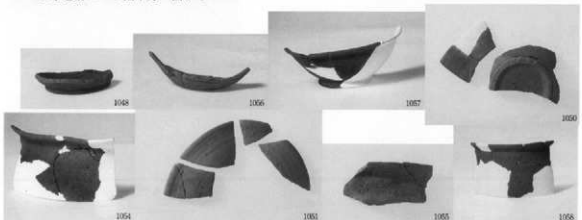
65号遺構遺物出土状況 西から



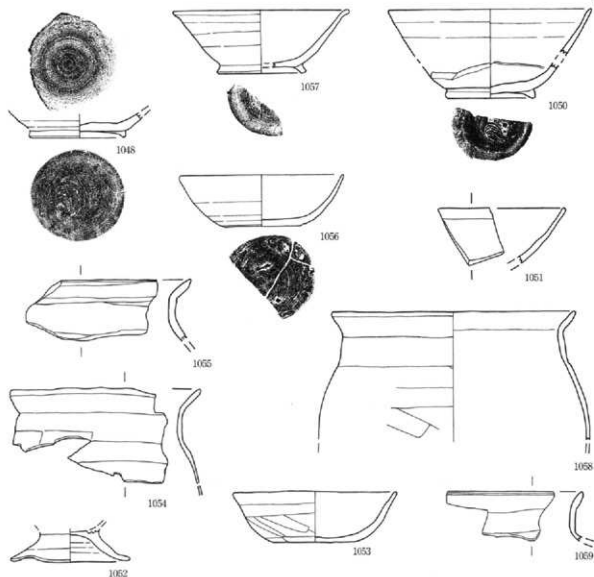
65号遺構カマド掘り方 西から



65号遺構掘り方全景 西から



65号遺構出土遺物(1)



65号遺構出土遺物

65号遺構（竪穴住居）（図43・45頁 写真44・46頁）

【位置】315-715G 【形状】隅丸方形？ 【規模】3.3×3.0m以上

【重複】西側で121号と重複

【埋土】1 黒褐色粘質土 焼土粒・暗褐色土粒少量含む 2 同前 焼土粒多く含む 3 同前 暗褐色土粒僅か含む 4 同前 暗褐色土塊多く含む 5 同前 白色軽石・焼土粒少量、暗褐色土粒多く含む

【遺物】甕・下層から須恵器瓶類？（1048）・同碗（1050,57）・同坏（1051,56）・土師器甕（1054,55,58）、掘り方から土師器台付甕（1052）、中層から土師器坏（1053）・同甕（1049,59）出土 また南西隅付近から炭化材片（4001）も検出

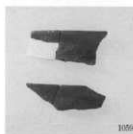
【内部施設】南東隅で断面皿状の貯蔵穴確認。他の内部施設は不明。また南西側には掘り方土坑があった。

【その他】遺物は南半側に集中し、不定形土坑となったその掘り方でも検出。床は全体にあり。炭化材の残存は少なく、上層材かは不明。

第2章 検出成果



65号遺構出土遺物 (2)



69号遺構断面 C-C' 南から



69号遺構断面 A-A' 東から



69号遺構遺物出土状況 西から



69号遺構カマド遺物出土状況 西から



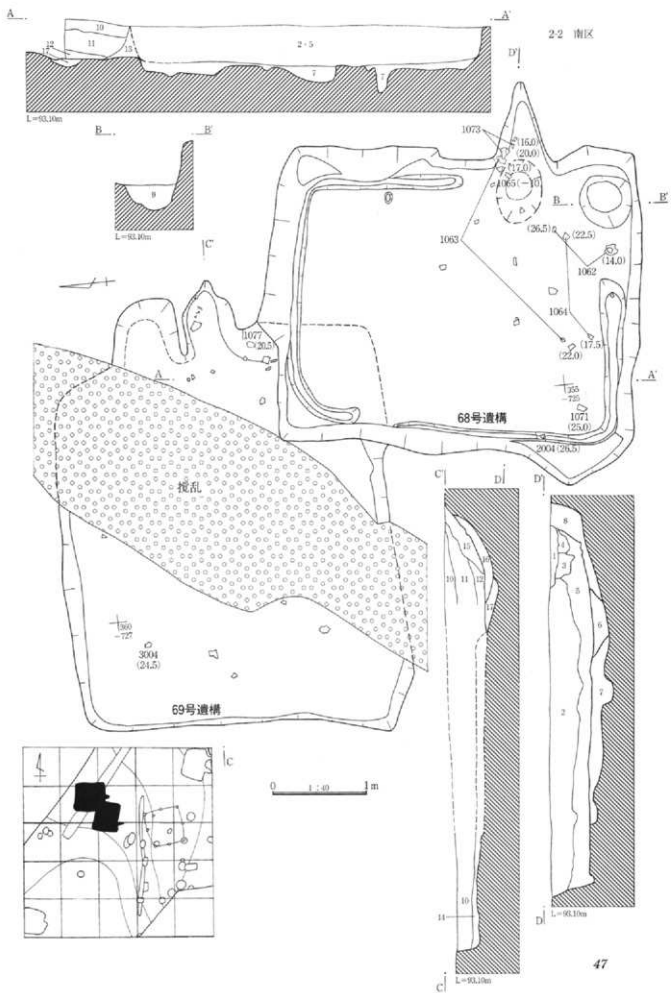
69号遺構全景 西から

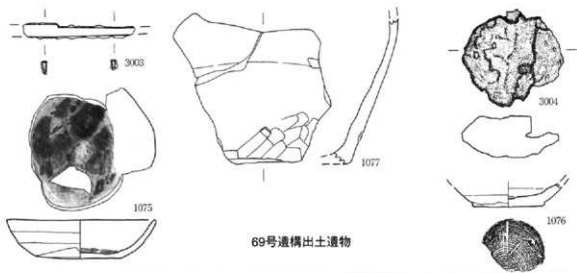


69号遺構掘り方全景 西から

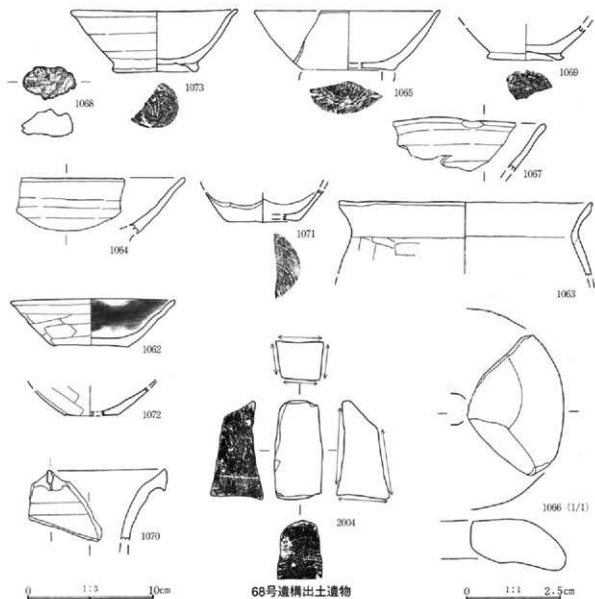


69号遺構出土遺物





69号遺構出土遺物



68号遺構出土遺物



68号遺構断面 D-D' 南から



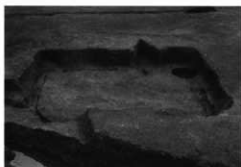
68号遺構断面 A-A' 東から



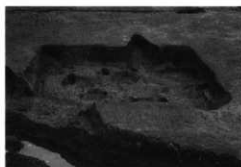
68号遺構遺物出土状況 西から



68号遺構カマド遺物出土状況 西から



68号遺構全景 西から



68号遺構掘り方全景 西から



1072



1073



1063



1069



1082



1071



1066



2004



1067



1064



1070



1066



1063

68号遺構出土遺物

68号遺構（竪穴住居）（図47・48頁 写真49頁）

【位置】355-720G 【形状】長方形 【規模】3.4×2.7m 【重複】69号より新しい

【埋土】1暗褐色粘質土 焼土炭化粒含む 2黒褐色粘質土 焼土含む 3焼土 4褐色粘質土 焼土多い
5黒褐色粘質土 焼土多い 6同前 しまりなし 7同前 褐色土塊含む 8暗褐色粘質土 焼土粒微量
9黒褐色粘質土 焼土粒微量

【遺物】竈内から須恵器碗（1073）、貯蔵穴内から被焼成粘土塊（1068）、掘り方から須恵器碗（1065,67,69）、
上層・覆土から須恵器碗（1064）・同環（1071）・同甕（1070）・土師器杯（1062）・同甕（1063,72）・
砥石（2004）・土製紡錘車（1066）出土

【内部施設】貯蔵穴を南東隅に、周溝を各階階で検出。柱穴は不明。カマド内に風状落ち込み（径80cm、深
さ20cm、第6層）がある。

【その他】調査時には重複する69号が新しいとの所見を持ったが、出土遺物と床面の深さから本遺構が新しい
と判断した。

69号遺構（竪穴住居）（図47・48頁 写真46頁）

【位置】355-725G 【形状】長方形か 【規模】3.8×3.2m

【重複】68号より古い 中央部分は試掘で破壊

【埋土】10黒褐色粘質土 焼土粒微量 11暗黄褐色粘質土 焼土少量 12同前 焼土多い 13黒褐色粘質土
軽石少量 14褐色粘質土 褐色土粒微量 15褐色粘質土 焼土炭化粒多い 16黒褐色粘質土 灰・炭多い
17暗褐色粘質土 焼土多い

【遺物】掘り方から鉄製刀子（3003）・土師器杯（1075）、中層から須恵器甕（1077）、上層・覆土から須恵
器杯（1076）・鉄滓（3004）出土

【内部施設】柱穴・貯蔵穴は不明。竈は両袖を掘り残す形態。

【その他】同前のように68号との新旧関係は調査時所見とは逆にした。上層出土の鉄滓は70号のものに似て
おり、そこで使用されたものが廃棄されたと考えられる。

70号遺構（竪穴住居）（図51・52頁 写真53・54頁）

【位置】360-710G 【形状】隅丸長方形 【規模】3.7×2.8m

【重複】東側で未命名土坑に切られる

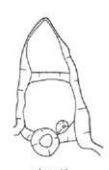
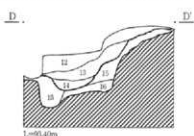
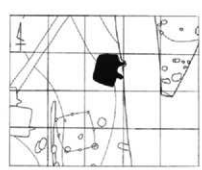
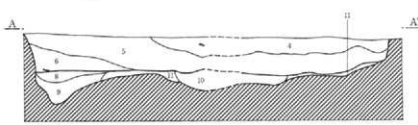
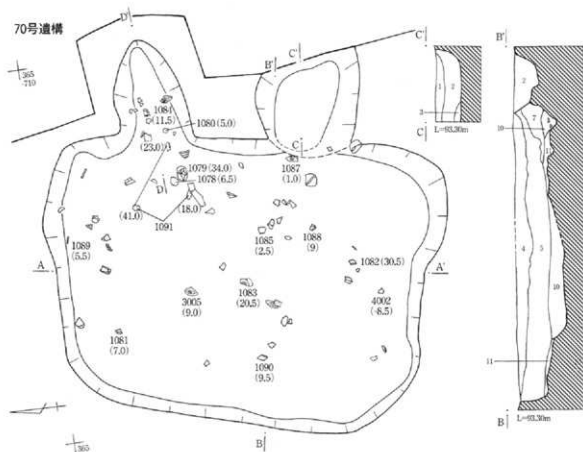
【埋土】1～3不明 4黒褐色粘質土 暗褐色土粒含む 5同前 暗褐色土粒少ない 6同前暗褐色土粒微
量 7同前 焼土粒多い 8同前 焼土粒微量 9同前 灰少量含む 10同前 焼土粒多い 11暗褐色粘
質土 貼り床 12同前 焼土少量 13同前 焼土多量 14赤褐色焼土 15暗褐色粘質土 焼土含む 16掘
り方

【遺物】下層・竈内から猿投灰軸皿（1087,89）・同瓶（1081）・美濃灰軸皿（1090）・土師器碗（1078,84）・須恵
器瓶類（1080）、掘り方から砥石（2005）・炭化材（4002）、中層から猿投灰軸皿（1088）・鉄滓（3005）・土師器
甕（1085）、上層・覆土から黒色土器碗（1083）・須恵器碗（1082）・土師器杯（1079）・同甕（1091,86）出土

【内部施設】柱穴・貯蔵穴は不明。中央から東側にかけて焼土を含有する掘り方土坑がある。

【その他】重複土坑は時期性格不明。灰陶軸器の出土が多い。鉄滓・炭化材が出ており、掘り方土坑は小鍛
冶関連施設などの可能性もある。

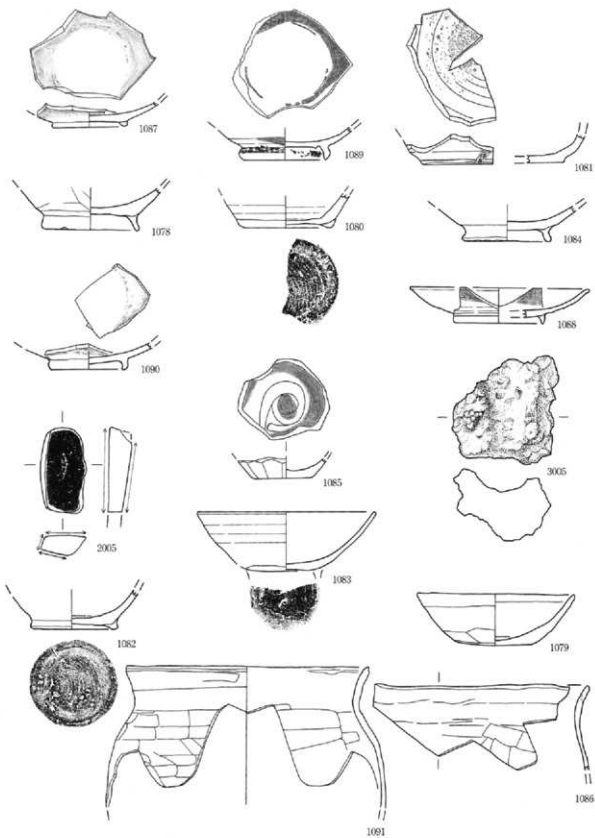
70号遺構



カマド



第2章 検出成果



70号遺構出土遺物

0 1:3 10cm



70号遺構断面 B-B'南から



70号遺構遺物出土状況 西から



70号遺構カマド断面 D-D'南から



70号遺構カマド遺物出土状況 西から



70号遺構カマド全景 西から



70号遺構全景 西から



70号遺構カマド掘り方 西から



70号遺構掘り方全景 西から



1087



1088



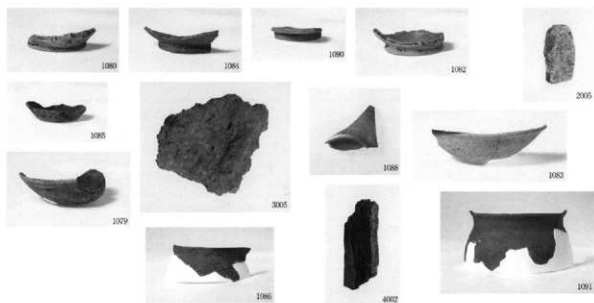
1081



1028

70号遺構出土遺物 (1)

第2章 検出成果



70号遺構出土遺物 (2)



71号遺構断面 F-F'南から



71号遺構遺物出土状況 西から



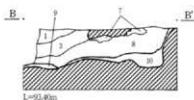
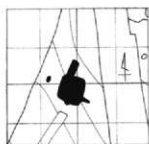
71号遺構カマド遺物出土状況 西から



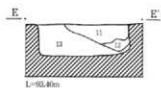
71号遺構カマド全景 西から



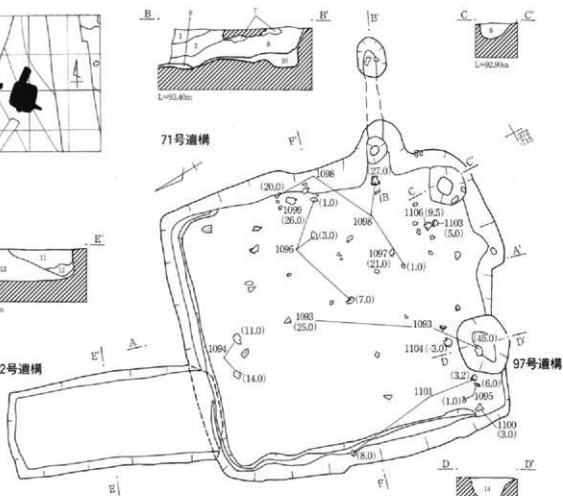
71号遺構カマド掘り方断面 西から



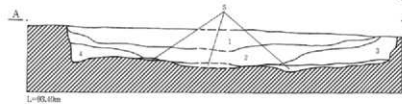
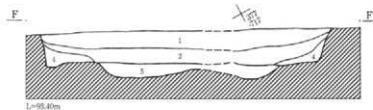
71号遺構



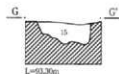
72号遺構



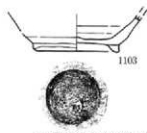
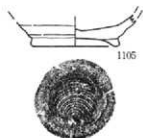
97号遺構



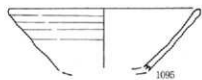
66号遺構



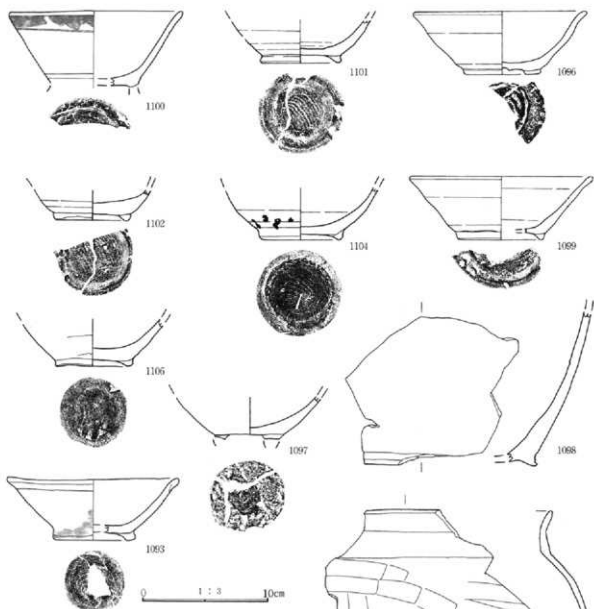
0 1:40 1m



71号遺構出土遺物 (1)



0 1:3 10cm



71号遺構（竪穴住居）（図55・56頁 写真54・57頁）

【位置】372-714G 【形状】方形 【規模】3.0×2.8m

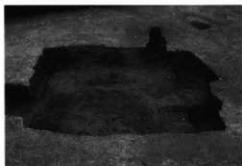
【重複】72・97号より古い

【埋土】1 黒褐色粘質土 焼土粒・白色粒子僅か、暗褐色土粒少量含む 2 同前 暗褐色土粒焼土粒微量含む 3

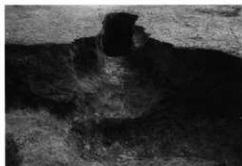
同前 暗褐色土塊少量含む 4同前 暗褐色土粒微量含む 5 同前 暗褐色土粒焼土粒 6 黒褐色粘質土 暗褐色土粒少量含む 7 赤褐色シルト質土 焼土化 8 暗褐色シルト質土 焼土粒塊多く含み締まりなし 9 赤褐色シルト質土 焼土化し上位に5mmの灰層 10暗褐色粘質土 人為的堆積

【遺物】竈・下層から須恵器瓶類(1103,05)・同碗(1095,96,1100,01)、掘り方から須恵器碗(1102,04)、中層から須恵器瓶類？(1106)・同碗(1099)・同飯(1098)・土師器甕(1094)、上層から須恵器碗(1097)出土

【内部施設】竈は壁外に1m以上延びる地山掘り残しのトンネル構造。南東隅に浅い貯蔵穴。北壁と西壁際には周溝を検出。柱穴は不明。 【その他】残存状態は比較的良好。



71号遺構全景 西から



71号遺構カマド掘り方 西から



71号遺構掘り方全景 西から



66号遺構断面 南から



1105



1103



1085



1100



1101



1096



1102



1104



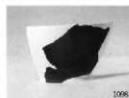
1099



1087



1084



1086



1093



1106

71号遺構出土遺物



72号遺構断面 南から



72号遺構全景 北から

72号遺構（土坑）（図55頁 写真57頁）

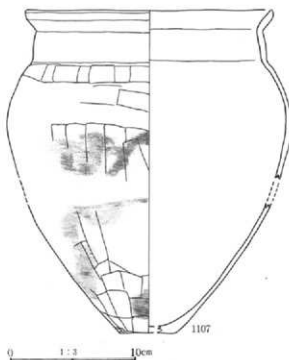
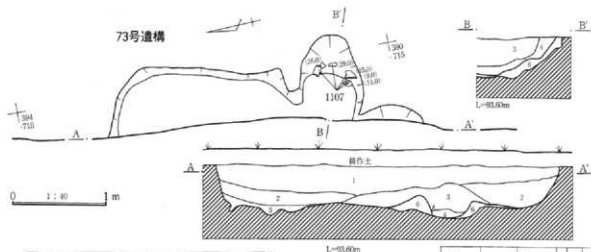
- 【位置】375-715G 【形状】長方形 【規模】2.2×0.8m 【重複】71号より新しい
 【埋土】11黒褐色粘質土 暗褐色土塊混在 12同前 暗褐色土塊少量含む 13同前 暗褐色土粒微量含む
 【遺物】なし 【特徴】人為的埋没 近世以降の可能性

97号遺構（ピット）（図55頁 写真59頁）

- 【位置】370-715G 【形状】楕円形 【規模】3.0×2.8m 【重複】72号より新しい
 【埋土】14黒褐色砂質土 締まりなく暗褐色土粒多く含む 【遺物】上層から須恵器碗（1093）出土
 【特徴】遺物は72号上層の流入だろう

66号遺構（土坑）（図55頁 写真57頁）

- 【位置】375-715G 【形状】楕円形 【規模】約1.4×1.0×0.4m 【重複】なし
 【埋土】15黒褐色粘質土 浅間As-C軽石少量含む 【遺物】なし 【特徴】遺物は72号上層の流入だろう



73号遺構（竪穴住居）（図58頁 写真59頁）

- 【位置】390-715G 【形状】不明
 【規模】3.2×0.7m以上 【重複】なし
 【埋土】1黒褐色粘質土 白色軽石・焼土粒少量含む
 2同前 暗褐色土粒少量含む 3同前 暗褐色土塊多く含む 4同前 焼土多い 5同前 暗褐色土粒多い 6暗褐色粘質土 焼土粒含む
 【遺物】竈内から土師器壺（1107）出土
 【内部施設】竈は地山を掘り残して袖としている。
 【その他】大部分が調査範囲外。



97号遺構下位断面 西から



73号遺構断面 東から



73号遺構全景 南から



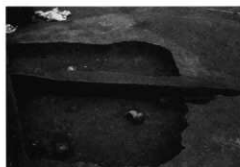
73号遺構カマド遺物出土状況 西から



73号遺構掘り方全景 北から



73号遺構出土遺物



84号遺構断面 B-B' 南から



84号遺構断面 A-A' 東から



84号遺構遺物出土状況 北から



84号遺構カマド遺物出土状況 北から



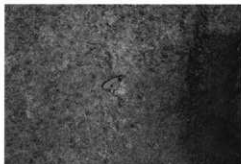
84号遺構カマド遺物出土状況 南から



84号遺構貯蔵穴断面 C-C' 西から



84号遺構全景 北から



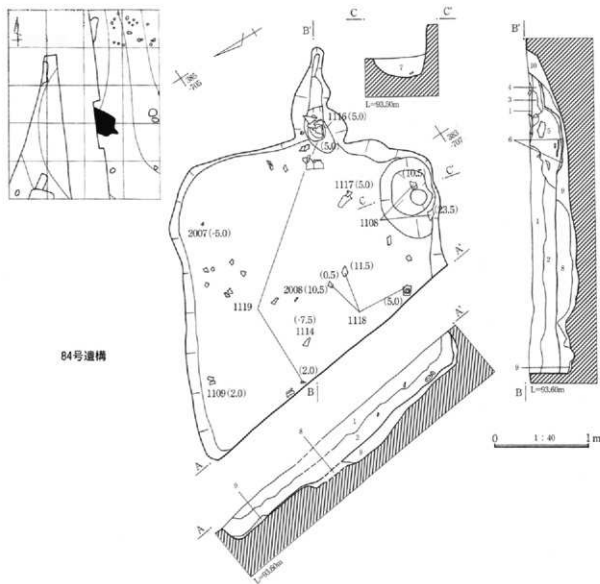
84号遺構掘り方旧石器出土状況 西から



84号遺構掘り方旧石器出土状況 東から



84号遺構掘り方全景 北から



84号遺構

84号遺構（竪穴住居）（図61・62頁 写真59・60・63頁）

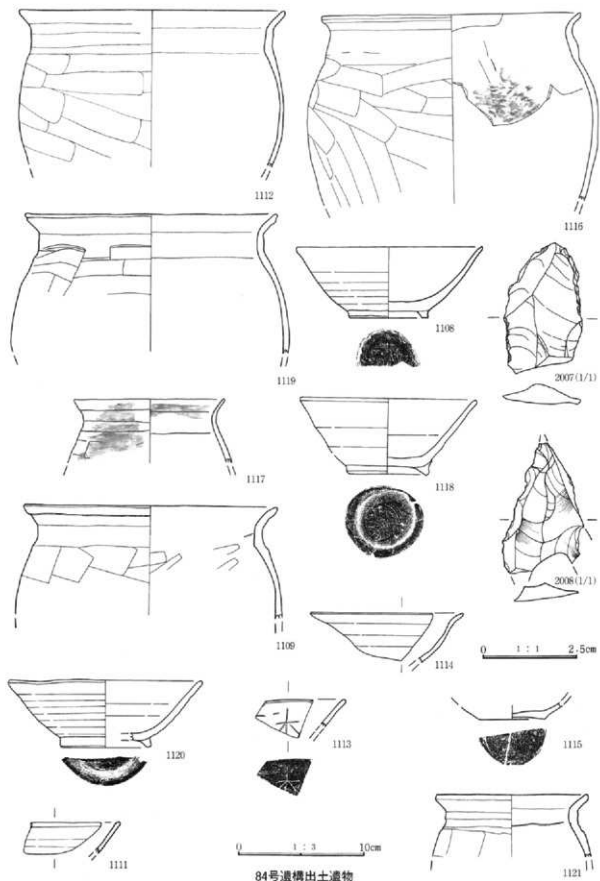
【位置】380-705G 【形状】長方形 【規模】3.0×2.6m 【重複】なし

【埋土】1黒褐色粘質土 白色軽石・焼土粒少量含む 2同前 焼土粒少量含む 3暗褐色粘質土 焼土粒多く含む 4黒褐色粘質土 焼土少量含む 5暗褐色粘質土 焼土多く含む 6同前 炭化物少量・焼土多く含む 7黒褐色粘質土 焼土・灰多く含む 8同前 焼土・黄褐色土粒少量含む 9暗褐色粘質土 焼土少量含む 10黒褐色粘質土 焼土少量含む

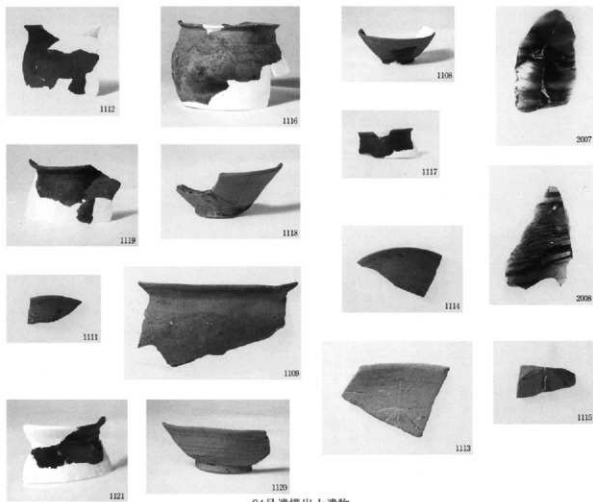
【遺物】竈内から土師器甕（1112,16,19）、貯蔵穴内から須恵器碗（1108）、下層から須恵器碗（1118）・土師器小型甕（1117）・同甕（1109）、掘り方から須恵器碗（1114）・黒曜石旧石器（2007,08）、覆土から須恵器碗類（1120,11,13）・同環（1115）・土師器小型甕（1121）出土 1113には「木」状の線刻がある。

【内部施設】竈は煙道が長く伸びるが、トンネル構造は検出できなかった。燃焼部内には3個以上の土師器甕が見えたが、一部は支脚として使われたかもしれない。南東隅に貯蔵穴。柱穴・周溝は不明。

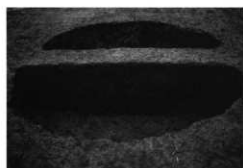
【その他】掘り方で出土した旧石器は他には剥片・チップなどを検出できなかった。流入の可能性がある。



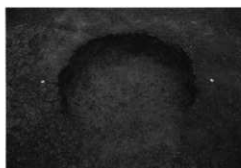
84号遺構出土遺物



84号遺構出土遺物



67号遺構断面 南から



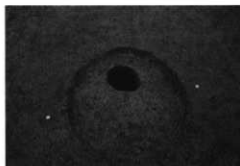
67号遺構全景 南から



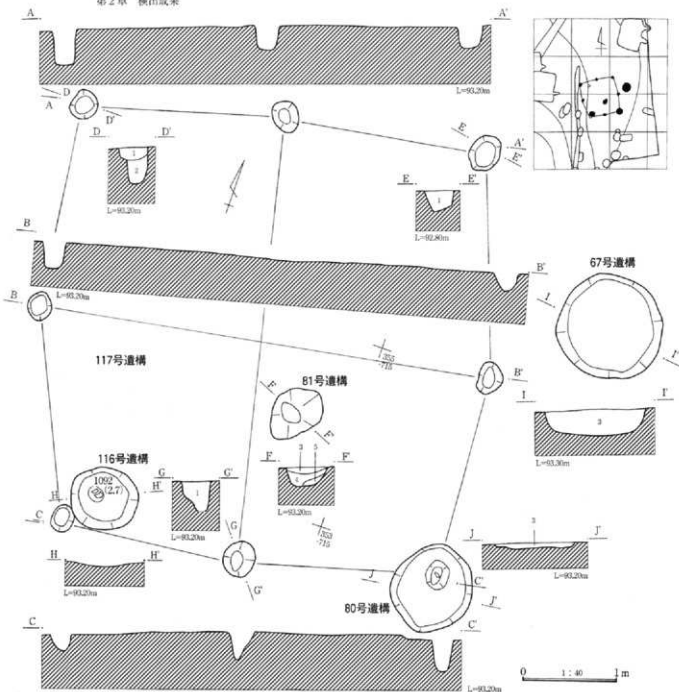
67号遺構出土遺物



80号遺構断面 南から

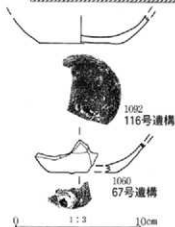


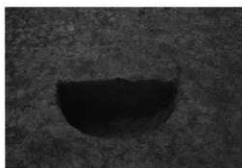
80号遺構断面 南から



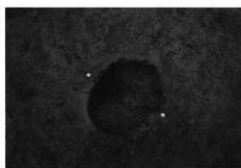
117号遺構（掘立柱建物）（図64頁 写真65頁）

【位置】350-715G 【形状】方形 【規模】4.8×4.7m 【重複】80号より旧か81・116号と重複するが関係不明 【埋土】1 黒褐色粘質土 白色軽石少量含む 2 同前 褐色土粒少量含む 【遺物】なし 【特徴】ほぼ形状の似た8個の柱穴で構成。南西側のものを除き、等間隔に近い位置をとり、各辺がやや膨れた正方形に近い平面形を作る。南東側のものは80号も含めて柱穴と考えられなくもないが、他は同様の形状を確認できない。各辺中央の柱穴を結んだ2本の梁桁が構造の中心をなすと考えられるため、上屋の形状はかなり特殊なものと推定できる。時代は特定しがたいが、周辺の堅穴住居群と重複していないため、古代の可能性がある。





81号遺構断面 南西から



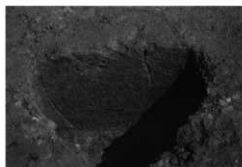
81号遺構全景 南から



116号遺構出土遺物



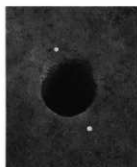
117号遺構断面 D-D' 南から



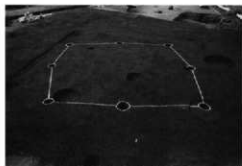
117号遺構断面 E-E' 南から



117号遺構断面 G-G' 西から

117号遺構南辺中央柱穴
南から

117号遺構全景 南から



117号遺構全景 南から



117号遺構全景 東から

81号遺構（土坑）（図64頁 写真65頁）

【位置】350-715G 【形状】楕円形 【規模】0.3×0.2×0.2m 【重複】117号と重複

【埋土】3 黒褐色粘質土 焼土微量含む 4 明黒褐色シルト質土 5 暗褐色シルト質土

【遺物】なし 【特徴】性格不明

116号遺構（土坑）（図64頁 写真65頁）

【位置】350-715G 【形状】円形 【規模】0.6×0.5×0.2m 【重複】117号と重複

【埋土】不明 【遺物】下層より須恵器坏（1092）出土 【特徴】性格不明

80号遺構（土坑）（図64頁 写真63頁）

【位置】350-710G 【形状】円形 【規模】0.9×0.7×0.1m 【重複】117号より新しいか 【埋土】前記3層 【遺物】なし

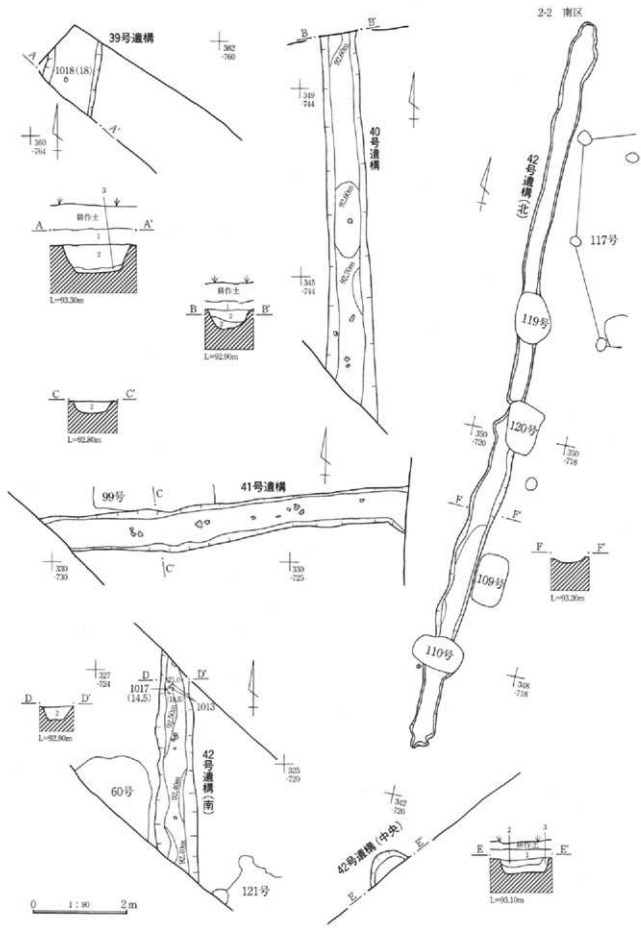
【特徴】本遺構確認時には117号の柱穴は確認していない 性格不明

67号遺構（土坑）（図64頁 写真63頁）

【位置】355-710G 【形状】円形 【規模】0.9×0.9×0.3m 【重複】なし

【埋土】前記3層 【遺物】覆土より須恵器坏（1060）出土 【特徴】性格不明







39号遺構断面 北東から



39号遺構出土遺物



39号遺構全景 北東から



40号遺構断面 南から



40号遺構全景 北から



41号遺構断面 西から



41号遺構全景 東から



41号遺構
出土遺物



1013

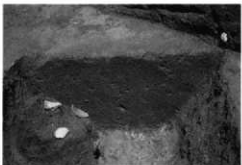


1017



1019

42号遺構出土遺物



42号遺構南側断面 南から



42号遺構南側 南から



42号遺構南側 南から

39～42号遺構（溝群）

南区南側で確認した溝群。基本的に走向と埋土の状態が似ている。いずれも水流痕はない。一部で古代の遺物が出土しており、古代の遺構と想定する。

【埋土】1 暗褐色砂質土 浅間As-B軽石含む 2 黒褐色粘質土 地山暗黄褐色土粒少量・As-C軽石微量含む
3 同前 2より粒子細かい

39号遺構（図66・67頁 写真68頁）

【位置】360-760G 【形状】断面逆台形 走向N3°E 【規模】上幅1.5m底幅0.9m深さ0.6m 検出長1.8m 【重複】なし 【遺物】中層より土師器器形不明口縁片（1018）出土 【特徴】検出範囲が狭いので土坑の可能性も残るが、底の状態は他の溝に近い。

40号遺構（図66・67頁 写真68頁）

【位置】340-740G 【形状】走向N2°W 【規模】上幅0.9m底幅0.6m深さ0.4m 検出長8m 【重複】
竪穴住居56号が近接 【遺物】なし 【特徴】ほぼ南北方向に走る

41号遺構（図66・67頁 写真68頁）

【位置】330-720G 【形状】走向N85°E 【規模】上幅0.8m底幅0.6m深さ0.2m 検出長7m 【重複】
土坑99号と重複 【遺物】覆土より須恵器甕片（1015）出土

【特徴】東側の42号南側と同一の可能性が有る。

42号遺構（図66・67頁 写真68・70頁）

【位置】340-715G・320-720G 【形状】走向北：N3°E 南：N1°E 【規模】北：上幅1.0m底幅0.8m深さ0.3m 検出長19m 南：上幅0.6m底幅0.3m深さ0.2m 検出長5m 【重複】北：土坑109号・110号・119号・120号と重複 掘立117号と近接 南：土坑60号と近接

【遺物】南側で中層より須恵器甕片（1017）、上層・覆土より須恵器碗（1013）・同葉蓋？（1019）出土

【特徴】調査時には対象地外を隔てて同一の溝遺構として南北二つの溝を捉えたが、平面上はずれがあるため、両者を分けて考える。北側は残存状態が極めて悪く、さらに北に延びる可能性はあったが確認できない。対象地外にかかる中央部分は土坑の可能性もあるが、埋土の状態より延長部分と考えた。南側はむしろ北西側の41号と形状が似ている。方形区画を示す同一の溝かもしれない。

【その他】これらの溝は、掘立117号とはほぼ重複するが、竪穴住居とは56号を除いて離れている。

土坑群1

竪穴住居55・65号の周辺に展開する土坑群。

60号遺構（住居？）（図72頁 写真71頁）

【位置】320-720G 【形状】楕円形？ 【規模】1.2以上×1.0以上×0.6m 【重複】なし 【埋土】記録とれないが竪穴住居に似た黒褐色粘質土が主体 【遺物】覆土中より須恵器大甕（1047）・同碗（1046）・同坏（1045）・黒色土器碗（1044）・土師器甕（1043）が出土 【特徴】出土遺物は竪穴住居のものに近似しており、住居の隅部分の可能性が有る。ただし床などは不明。

121号遺構（土坑）（図72頁 写真なし）

【位置】320-715G 【形状】方形 【規模】3.4×1.0以上×0.2m 【重複】65号と重複 【埋土】記録とれず 【遺物】灰軸陶器小片が南東側に散る 【特徴】ピットがプランに沿って並ぶが深さは不均一（深さ10～30cm）で、床面は見られない。周辺の住居と方向も異なるため、性格を特定できない。

第2章 検出成果



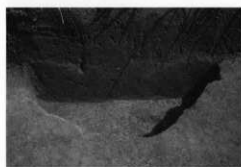
42号遺構北側全景 北から



42号遺構北側全景 南から



42号遺構中央断面 北西から



42号遺構中央全景 北西から



43号遺構断面 南から



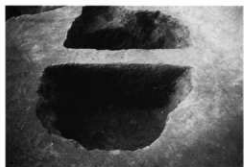
43号遺構出土遺物



43号遺構全景 南から



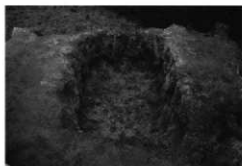
44号遺構全景 南西から



45号遺構断面 南から



45号遺構断面 北から



45号遺構全景 北から



60号遺構全景 北から



1047



1046



1043



1045



1044

60号遺構出土遺物



115号遺構断面 南西から

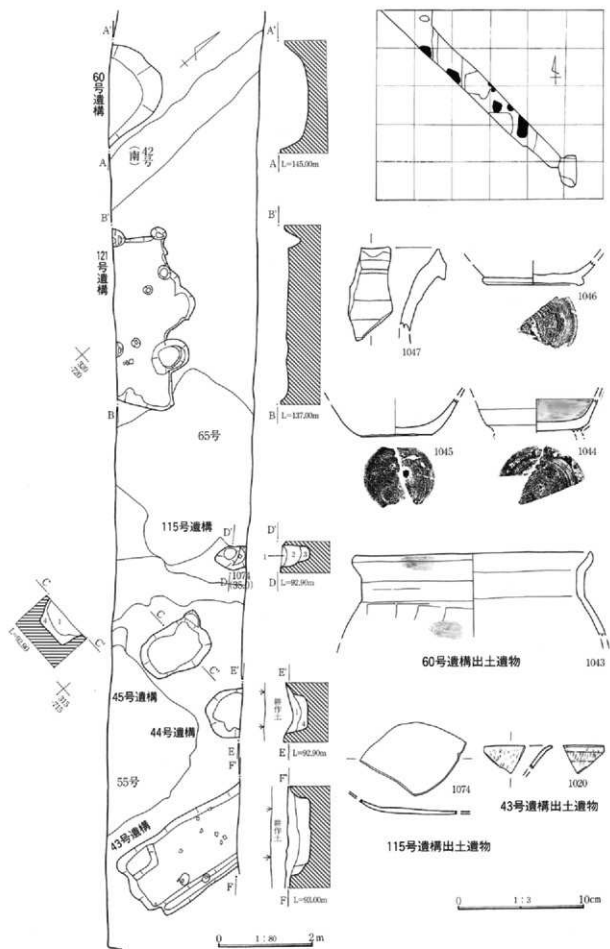


115号遺構全景 南西から



1074

115号遺構出土遺物



115号遺構（掘立？）（図72頁 写真71頁）

【位置】315-710G 【形状】円形 【規模】径0.3×0.6m 【重複】65号と重複 【埋土】1 黒褐色粘質土 浅間As-C軽石少量含む 2 同前 1層より締まりなし 3 暗褐色粘質土 ローム粒多く含む 【遺物】中層より土師器坏（1074）出土 【特徴】単独の検出だが掘立柱建物の柱穴の可能性が高い。

45号遺構（土坑）（図72頁 写真71頁）

【位置】315-710G 【形状】小判形 【規模】1.1×0.7×0.5m 【重複】55号が近接 【埋土】1 前記4 黒褐色粘質土 ローム粒塊少量含む 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

44号遺構（土坑）（図72頁 写真70頁）

【位置】315-710G 【形状】円形 【規模】0.7×0.6以上×0.5m 【重複】55号が近接 【埋土】前記1・4層 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

43号遺構（土坑）（図72頁 写真70頁）

【位置】310-710G 【形状】長方形 【規模】3.0以上×1.1×0.6m 【重複】55号が近接 【埋土】記録とれないが、ローム塊混在の茶褐色砂質土 【遺物】覆土より猿投灰軸輪（1020）が出土 【特徴】近世の短冊形土坑が重複したもの。遺物は55号からの流入か。

土坑群2

溝41号周辺に展開する土坑群。

48号遺構（土坑）（図74頁 写真75頁）

【位置】335-735G 【形状】円形 【規模】1.1×1.0×0.2m 【重複】なし 【埋土】1 黒褐色粘質土 浅間As-C軽石・暗褐色土粒少量含む 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

46号遺構（土坑）（図74頁 写真75頁）

【位置】330-730G 【形状】長方形 【規模】1.5以上×0.5×0.3m 【重複】なし 【埋土】2 黒褐色砂質土 暗褐色土塊少量含む 【遺物】なし 【特徴】近世の短冊形土坑

99号遺構（土坑）（図74頁 写真76頁）

【位置】330-725G 【形状】長方形 【規模】2.4×0.7×0.2m 【重複】41号と重複 【埋土】前記2層 【遺物】なし 【特徴】近世の短冊形土坑

47号遺構（土坑）（図74頁 写真75頁）

【位置】330-725G 【形状】長方形 【規模】1.6×0.5×0.3m 【重複】なし 【埋土】前記1層 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

49号遺構（土坑）（図74頁 写真75頁）

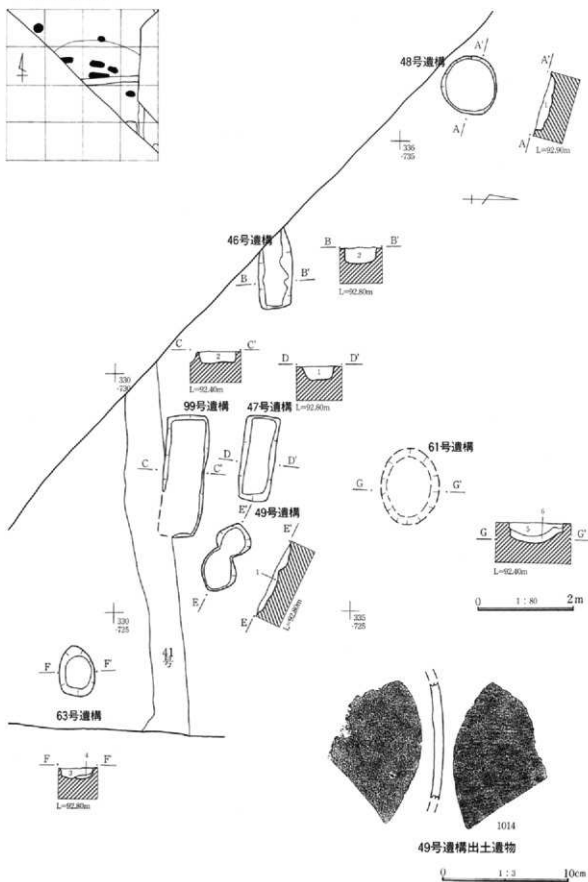
【位置】330-725G 【形状】8字形 【規模】1.4×0.6×0.1m 【重複】なし 【埋土】前記1層 【遺物】覆土より須恵器甕（1014）出土 【特徴】性格不明。2基の重複と想定したが明瞭な差はない。

63号遺構（土坑）（図74頁 写真76頁）

【位置】325-720G 【形状】楕円形 【規模】0.7×0.5×0.2m 【重複】なし 【埋土】3 黒褐色粘質土 浅間As-C軽石・焼土少量含む 4 同前 暗褐色土粒含む 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

61号遺構（土坑）（図74頁 写真75頁）

【位置】335-725G 【形状】概ね楕円形 【規模】約1.2×0.9×1.0m 【重複】なし 【埋土】5 黒色粘質土 粘性強い 6 黄白色シルト質土 【遺物】なし 【特徴】低地質地山に位置。性格時期不明。

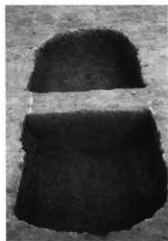




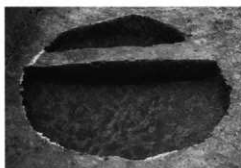
46号遺構断面 西から



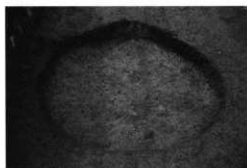
46号遺構全景 東から



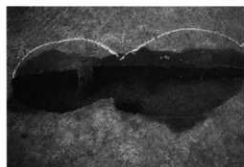
47号遺構断面全景 西から



48号遺構断面 南西から



48号遺構全景 南西から



49号遺構断面 南西から



49号遺構全景 南東から



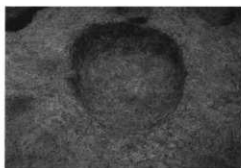
49号遺構出土遺物



61号遺構断面 西から



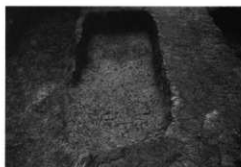
63号遺構断面 西から



63号遺構全景 西から



99号遺構断面 東から



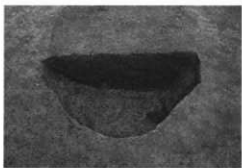
99号遺構全景 東から



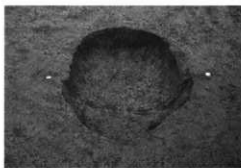
74・75号遺構断面 南西から



74・75号遺構全景 南西から



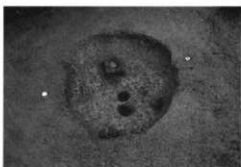
76号遺構断面 南東から



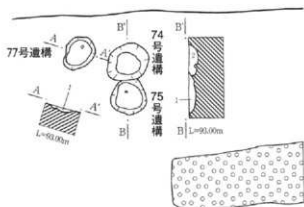
76号遺構全景 南東から



77号遺構断面 南東から



77号遺構全景 南東から



土坑群 3

竪穴住居68・69号の南西側に展開する土坑群。

74号遺構（土坑）（図77頁 写真76頁）

【位置】350-730 G 【形状】楕円形 【規模】 $0.5 \times 0.4 \times 0.1$ m 【重複】75号より旧 【埋土】2 黒褐色粘質土 浅間As-C軽石少量含む 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

75号遺構（土坑）（図77頁 写真76頁）

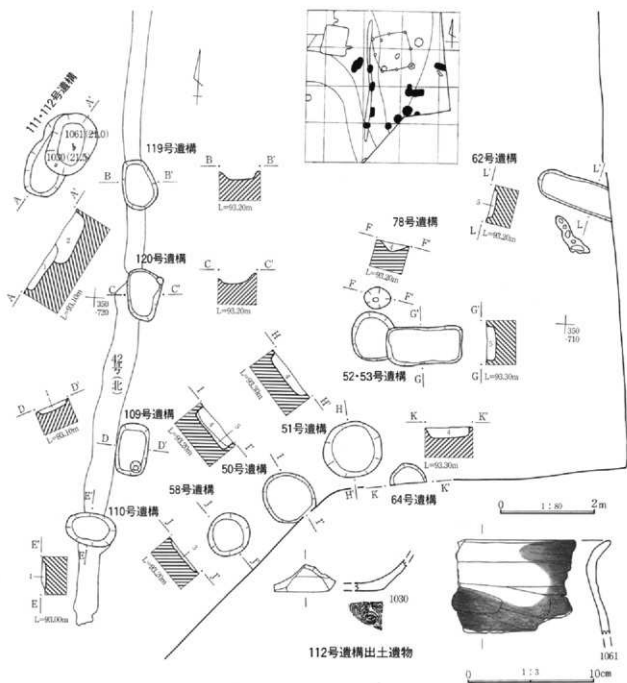
【位置】350-730 G 【形状】楕円形 【規模】 $0.6 \times 0.5 \times 0.2$ m 【重複】74号より新 【埋土】1 黒褐色粘質土 焼土少量含む 【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

77号遺構（土坑）（図77頁 写真76頁）

【位置】350-730 G 【形状】楕円形 【規模】 $0.6 \times 0.5 \times 0.1$ m 【重複】なし 【埋土】前記1層 【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

76号遺構（土坑）（図77頁 写真76頁）

【位置】345-725 G 【形状】楕円形 【規模】 $0.8 \times 0.4 \times 0.2$ m 【重複】なし 【埋土】前記1層 【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。



土坑群4

掘立柱建物117号の南側に展開する土坑群。

111号遺構（土坑）(図78頁 写真81頁)

【位置】350-720G 【形状】小判形 【規模】1.2以上×0.6×0.2m 【重複】112号より新

【埋土】1 黒褐色粘質土 浅間As-C軽石多く焼土少量含む 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

112号遺構（土坑）(図78頁 写真81頁)

【位置】350-720G 【形状】小判形 【規模】0.9×0.5×0.4m 【重複】111号より旧

【埋土】2 黒褐色粘質土 暗褐色土粒多く焼土粒少量含む 【遺物】上層より須恵器坏(1030)・土師器壺(1061)出土 【特徴】性格不明。遺物は堅穴住居68号からの流入だろう。古代か。

119号遺構（土坑）（図78頁 写真なし）

【位置】350-715G 【形状】小判形 【規模】0.9×0.6×0.15m 【重複】溝42号と重複 【埋土】前記1層
 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

120号遺構（土坑）（図78頁 写真なし）

【位置】350-715G 【形状】小判形 【規模】0.9×0.7×0.2m 【重複】溝42号と重複
 【埋土】前記1層 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

109号遺構（土坑）（図78頁 写真81頁）

【位置】345-715G 【形状】小判形 【規模】0.9×0.5×0.1m 【重複】溝42号と重複
 【埋土】前記1層 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

110号遺構（土坑）（図78頁 写真81頁）

【位置】345-715G 【形状】小判形 【規模】0.8×0.5×0.1m 【重複】溝42号と重複
 【埋土】前記1層 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

58号遺構（土坑）（図78頁 写真80頁）

【位置】345-715G 【形状】円形 【規模】0.7×0.7×0.1m 【重複】なし
 【埋土】3 黒褐色粘質土 暗褐色土粒少量含む 【遺物】なし 【特徴】性格時期不明

50号遺構（土坑）（図78頁 写真80頁）

【位置】345-715G 【形状】円形 【規模】0.9×0.9×0.2m 【重複】なし
 【埋土】4 黒褐色粘質土 浅間As-C軽石少量含む 5 同前 地山暗褐色土粒微量含む 【遺物】なし
 【特徴】性格不明。古代か。

51号遺構（土坑）（図78頁 写真80頁）

【位置】345-710G 【形状】円形 【規模】1.0×0.9×0.2m 【重複】なし 【埋土】前記4層
 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

64号遺構（土坑）（図78頁 写真80頁）

【位置】345-710G 【形状】円形 【規模】0.7×0.2m 【重複】なし 【埋土】前記4層
 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

52号遺構（土坑）（図78頁 写真80頁）

【位置】345-710G 【形状】円形 【規模】0.8×0.7×0.15m 【重複】53号と重複
 【埋土】不明 【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

53号遺構（土坑）（図78頁 写真80頁）

【位置】345-710G 【形状】長方形 【規模】1.5×0.7×0.2m 【重複】52号と重複
 【埋土】前記5層 【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

78号遺構（土坑）（図78頁 写真81頁）

【位置】345-710G 【形状】楕円形 【規模】0.1×0.1×0.2m 【重複】なし
 【埋土】前記4層 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

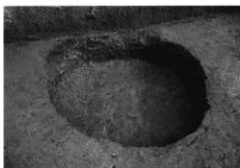
62号遺構（土坑）（図78頁 写真80頁）

【位置】350-705G 【形状】長方形 【規模】1.5以上×0.6×0.1m 【重複】なし
 【埋土】前記5層 【遺物】なし 【特徴】底が平坦だが性格時期不明。

西側の小判形の土坑群は、微量ながら埋土中に焼土を含む共通点がある。



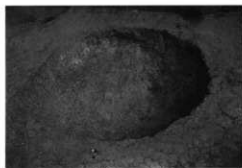
50号遺構断面 南西から



50号遺構全景 北西から



51号遺構断面 西から



51号遺構全景 北西から



52・53号遺構全景 東から



53号遺構断面 西から



58号遺構断面 南西から



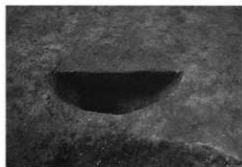
58号遺構全景 北西から



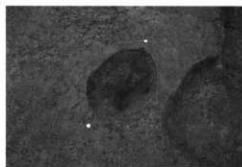
62号遺構断面 西から



64号遺構断面 北から



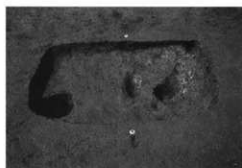
78号遺構断面 南から



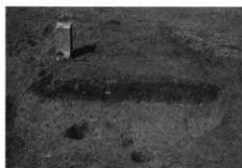
78号遺構全景 西から



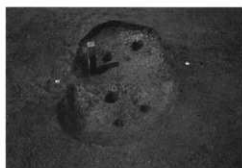
109号遺構断面 南から



109号遺構全景 東から



110号遺構断面 東から



110号遺構全景 東から



111・112号遺構断面 東から



111・112号遺構全景 南東から



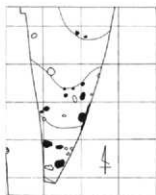
1030



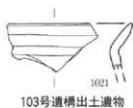
1061

112号遺構出土遺物

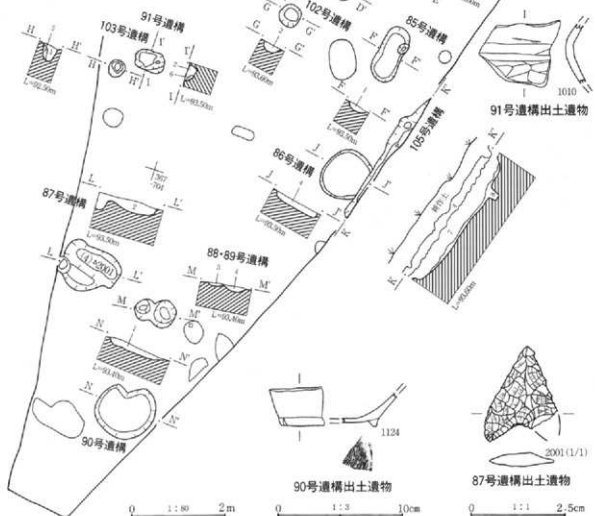
第2章 検出成果



85~91号・94~96号遺構
100~102号・105号遺構



103号遺構出土遺物



土坑群 5

竪穴住居70号の東側に展開する土坑・ピット群。

90号遺構（土坑）(図82頁 写真84頁)

【位置】360-700G 【形状】不定形 【規模】1.1×0.8×0.1m 【重複】なし 【埋土】1黒褐色粘質土 焼土少量含む 【遺物】下位より須恵器碗(1124)出土 【特徴】性格不明。

87号遺構（土坑）(図82頁 写真84頁)

【位置】360-700G 【形状】不定形 【規模】0.9×0.7×0.2m 【重複】ピットが重複 【埋土】2黒褐色粘質土 焼土やや多く・炭粒粒微量含む 【遺物】下層よりチャート製石蔵(2001)出土 【特徴】石蔵は流入の可能性。性格時期不明。

88・89号遺構（ピット）(図82頁 写真84頁)

【位置】360-700G 【形状】円形 【規模】径0.2×0.1m 【重複】なし 【埋土】3黒褐色粘質土 浅間As-C軽石少量・焼土多く含む 4同前 3より軽石多い 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

103号遺構（掘立?）(図82頁 写真86頁)

【位置】365-705G 【形状】円形 【規模】径0.2×0.3m 【重複】なし 【埋土】前記1層 5黒褐色粘質土 締まりあり焼土含まず 【遺物】覆土より土師器甕(1021)出土 【特徴】単独だが掘立柱建物の柱穴か。

91号遺構（ピット）(図82頁 写真84頁)

【位置】365-705G 【形状】楕円形 【規模】0.3×0.2×0.2m 【重複】なし 【埋土】前記2層 6暗褐色粘質土 2層が混在 【遺物】覆土より土師器甕(1010)出土 【特徴】性格不明。

86号遺構（土坑）(図82頁 写真84頁)

【位置】365-695G 【形状】円形 【規模】1.0×0.9×0.1m 【重複】105号と重複 【埋土】前記4層 【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。

105号遺構（住居?）(図82頁 写真86頁)

【位置】365-695G 【形状】長方形? 【規模】3.0×0.1以上×0.3m 【重複】86号と重複 【埋土】前記4層 7黒褐色粘質土 4より焼土粒多い 8暗黄褐色粘質土 砂・黒褐色土含む 【遺物】なし 【特徴】一部しか調査範囲に入っていないためはっきりしないが、70号や84号の壁の走向とも似ているため、古代竪穴住居の一部の可能性はある。

101号遺構（ピット）(図82頁 写真85頁)

【位置】370-700G 【形状】円形 【規模】径0.3×0.4m 【重複】なし 【埋土】前記2層 【遺物】なし 【特徴】掘立柱建物の柱穴の可能性あるが特定できない。古代か。

102号遺構（ピット）(図82頁 写真86頁)

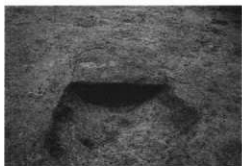
【位置】370-700G 【形状】円形 【規模】径0.3×0.2m 【重複】なし 【埋土】前記2層 【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

100号遺構（ピット）(図82頁 写真85頁)

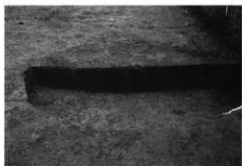
【位置】370-700G 【形状】円形 【規模】径0.3×0.3m 【重複】なし 【埋土】前記1層 【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

94号遺構（ピット）(図82頁 写真85頁)

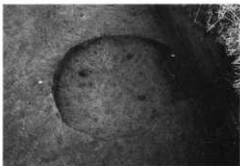
【位置】370-695G 【形状】円形 【規模】径0.4×0.1m 【重複】なし 【埋土】前記1層 9黒褐色粘



85号遺構断面 南から



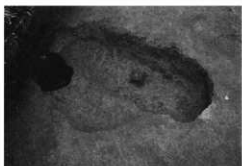
86号遺構断面 南から



86号遺構全景 南から



87号遺構断面 南から



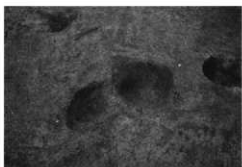
87号遺構全景 南から



87号遺構出土遺物



88・89号遺構断面 南から



88・89号遺構全景 南西から



90号遺構全景 南から



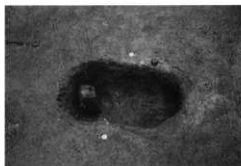
90号遺構出土遺物



91号遺構断面 東から



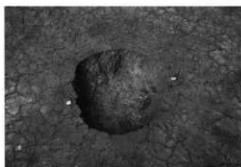
91号遺構出土遺物



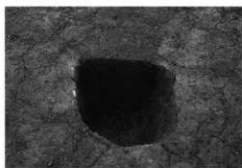
91号遺構全景 南から



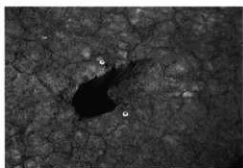
94号遺構断面 南から



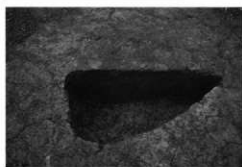
94号遺構全景 南西から



95号遺構断面 西から



95号遺構全景 南西から



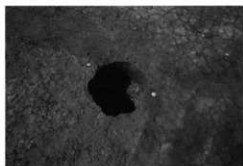
96号遺構断面 南から



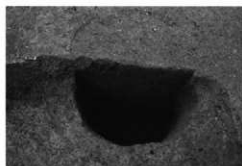
96号遺構全景 南東から



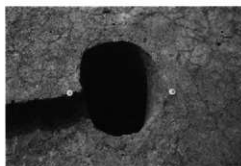
100号遺構断面 南から



100号遺構全景 南東から



101号遺構断面 西から



101号遺構全景 西から



102号遺構断面 北から



102号遺構全景 北西から



103号遺構断面 南から



103号遺構出土遺物



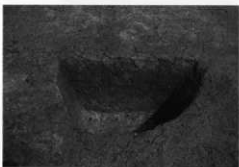
105号遺構断面 西から



98号遺構断面 東から



106号遺構断面 南西から



83号遺構断面 南から



83号遺構全景 南から



104号遺構断面 南東から



104号遺構全景 南東から

質土 1より明色 【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

85号遺構（土坑）（図82頁 写真84頁）

【位置】370-695G 【形状】楕円形 【規模】1.0×0.4×0.1m 【重複】なし 【埋土】前記1層

【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

96号遺構（ピット）（図82頁 写真85頁）

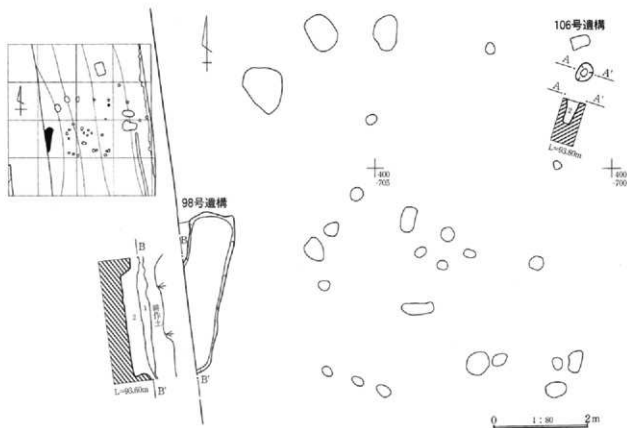
【位置】375-700G 【形状】楕円形 【規模】0.4×0.2×0.1m 【重複】なし 【埋土】前記1層

【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

95号遺構（土坑）（図82頁 写真85頁）

【位置】375-695G 【形状】楕円形 【規模】0.3×0.1×0.2m 【重複】なし 【埋土】前記4・9層

【遺物】なし 【特徴】性格不明。古代か。



土坑・ピット

98号遺構（土坑）（図87頁 写真86頁）

【位置】395-705G 【形状】長方形 【規模】3.3×0.8×0.3m 【重複】なし

【埋土】1 褐色砂質土 浅間As-B軽石多く含む 2 黒褐色粘質土 焼土炭化粒少量含む 【遺物】なし

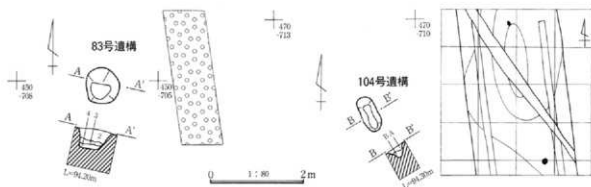
【特徴】底が平坦で特徴ある形状を示すが性格不明。古代か。

106号遺構（ピット）（図87頁 写真86頁）

【位置】400-700G 【形状】円形 【規模】0.4×0.3×0.5m 【重複】なし

【埋土】前記2層 【遺物】なし 【特徴】周辺にも多くのピットがあり、掘立柱建物の柱穴の可能性があるが、構成を特定できなかった。古代か。

第2章 検出成果



83号遺構（土坑）（図88頁 写真86頁）

【位置】445-705G 【形状】円形 【規模】0.7×0.7×0.4m 【重複】なし

【埋土】2 98号と同じ 3 黒褐色シルト質土 締まりあり 4 暗黄褐色粘質土 地山に黒褐色土が混在

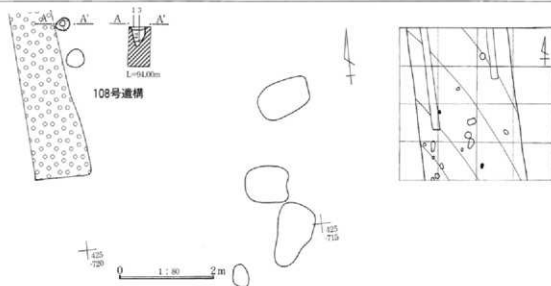
【遺物】なし 【特徴】単独の存在で性格不明。古代か。

104号遺構（土坑）（図88頁 写真86頁）

【位置】465-710G 【形状】楕円形 【規模】0.8×0.3×0.2m 【重複】なし

【埋土】A 黒褐色粘質土 浅間As-C軽石少量含む B 同前 軽石含まない 【遺物】なし

【特徴】単独の存在で性格不明。古代か。



2-2-4 時期不明の遺構

108号遺構（ピット）（図88頁 写真89頁）

【位置】425-705G 【形状】円形

【規模】径0.1×0.4m 【重複】なし

【埋土】1 黒褐色粘質土 焼土粒少量含む 2 同前 焼土少ない 3 暗黄褐色粘質土 黒褐色土粒混じる

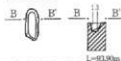
【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

107号遺構（土坑）（図88頁 写真89頁）

【位置】420-700G 【形状】楕円形 【規模】0.5×0.2×0.2m 【重複】なし

【埋土】前記1・3層 【遺物】なし 【特徴】性格時期不明。

107号遺構

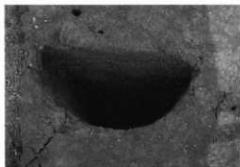




107号遺構断面 南から



107号遺構全景 南から



108号遺構断面 南から



108号遺構全景 南から



92号遺構断面 北から



92号遺構全景 北から



93号遺構全景 南から



93号遺構断面 南から

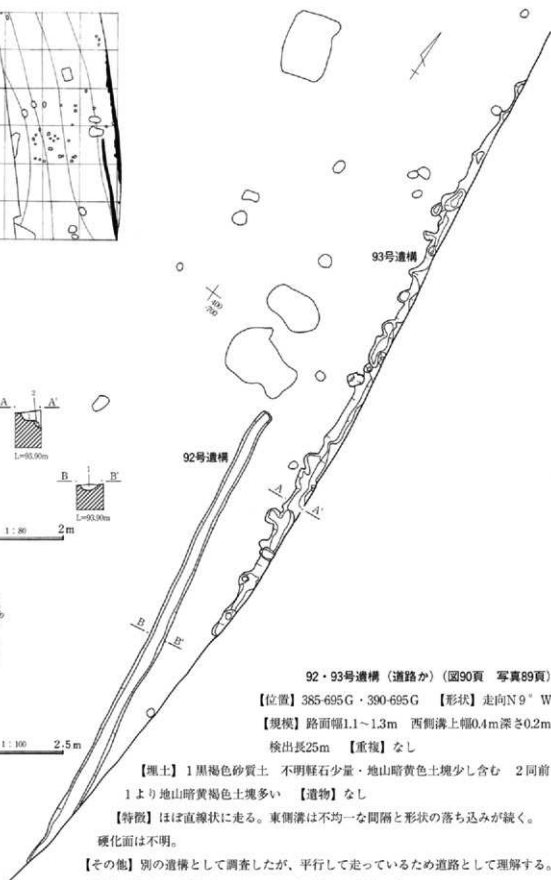
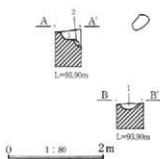
遺構外出土遺物



1122



1123



92・93号遺構（道路か）（図90頁 写真89頁）

【位置】385-695 G・390-695 G 【形状】走向N9° W

【規模】路面幅1.1~1.3m 西側溝上幅0.4m深さ0.2m

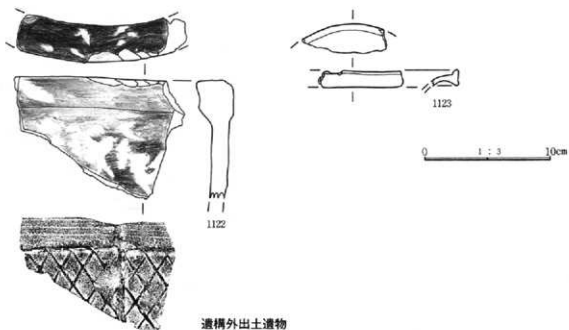
検出長25m 【重複】なし

【埋土】1 黒褐色砂質土 不明軽石少量・地山暗黄色土塊少し含む 2 同前
1より地山暗黄色土塊多い 【遺物】なし

【特徴】ほぼ直線状に走る。東側溝は不均一な間隔と形状の落ち込みが続く。

硬化面は不明。

【その他】別の遺構として調査したが、平行して走っているため道路として理解する。
東側溝は半分しか検出していないが、植生痕の可能性が高い。



遺構外出土遺物

2-2-5 遺構外出土遺物 (図91頁 写真89頁)

全体に遺構外の遺物は極めて少なく、出土位置の記録が取れなかったものもここに示した瓦質土器視炉(1122)・須恵器壺? (1123) 以外はほとんど検出していない。

第3章 まとめ

3-1 あずま道

大字国定と田部井の境界をなす村道は、大字上田の六道に残る江戸中期の道標に記されるようにあずま道として記憶されていた。県内4カ所のこれまでのあずま道路線の発掘調査成果と同様に、この村道の下に中世の幹線道があるかが大きな調査目的となった。

その結果、現村道直下の北側に平行して走る、両側に側溝を持ち路面幅3.2mほどの道路遺構（118号遺構）を確認した。12世紀初頭（1108年）の浅間山噴火からそれほど経過しない段階で、最古路面が構築されており、この道路の起源が中世であることはほぼ確かである。また現村道舗装の下まで6枚の路面改修痕が明らかとなった。そのうち上位3枚は、近世後半以降のものである。

このあずま道の性格について、まとめてみたい。

3-1-1 これまでのあずま道検出例

群馬県内で、これまで考古学的に確認されたあずま道に関連する調査成果は次のとおりである。

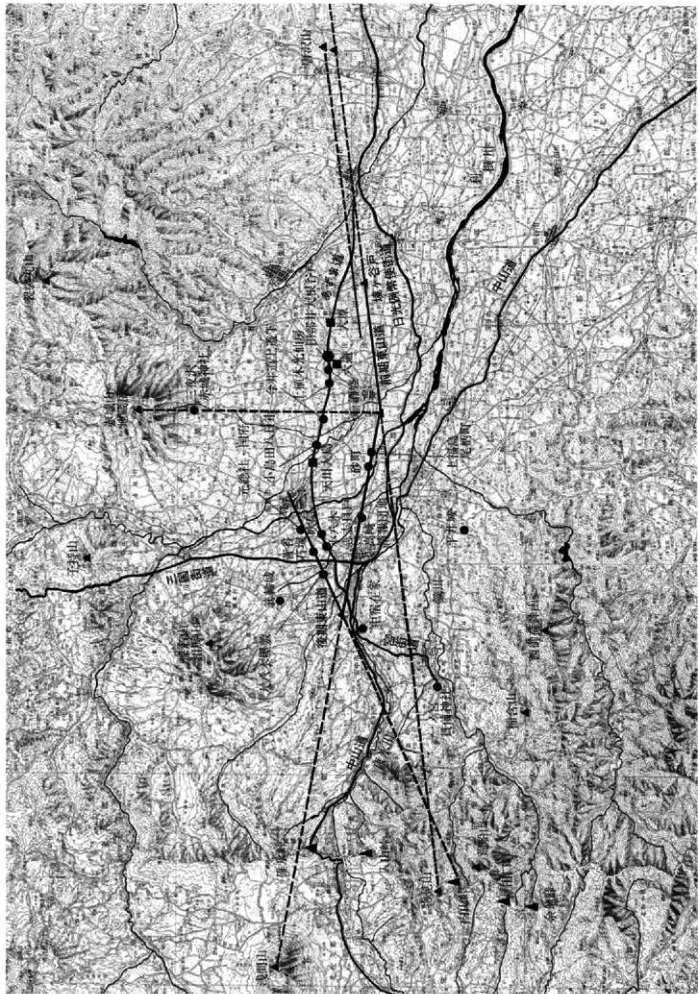
- ・中宿在家遺跡¹⁾（安中市・中宿）：推定現道に隣接して中世居館を検出。堅固な防御施設のない13・14世紀の建物群。近世にはここから上野一ノ宮貫前神社に向かう「宮街道」が中山道から分岐している。貫前神社は上信国境の各峠からの道が合流する場所にあり、「宮街道」はあずま道の後進と考えられる。
- ・大八木屋敷遺跡²⁾（高崎市大八木町）：推定現道に隣接し古代からの継続も考えられる中世居館を検出。
- ・小八木志志貝戸遺跡³⁾（高崎市小八木町）：両側溝を持つ路面（2.5m）を検出。検出路面は4枚で、最下層の路面は浅間As-B軽石を部分的に排除した状態で形成。17世紀後半以降、路面幅は狭まる。ほぼ道路遺構に接して、12～14世紀の居館を2カ所また14～16世紀の墓地を確認。周辺には3カ所の「あずま橋」地名が残る。
- ・吹屋遺跡⁴⁾（高崎市中尾町）：両側溝のみを断面確認。浅間As-B軽石を切って掘り込む。路面幅は約4mを計測。中世居館が近接。
- ・小島田八日市遺跡⁵⁾（前橋市小島田町）：推定現道に接して中世居館を検出。
- ・今井道上道下遺跡⁶⁾（前橋市今井町）：両側溝を持ち浅間As-B軽石層そのものを最古の路面とする路面を検出。片側の側溝は中世居館の境界堀そのものになっている。居館廃絶後、路面は移動。路面幅は最大4.0mで、3.2m部分が多い。
- ・上植木光仙房遺跡⁷⁾（伊勢崎市三和町）：推定現道で近世後期以降の路面を確認。それ以前の路面は200m以上離れる可能性。中世居館が近い。近くに「東」「東道」地名。
- ・酒盛遺跡⁸⁾（佐波郡赤堀町堀下）：推定現道で両側溝を持つ路面を確認。浅間As-B降下以降。近くに「東道」地名。

以上のように、路面もしくは側溝を確認したのは6カ所だが、時期の特定できるものは全て12世紀初頭の浅間As-B軽石降下以後となる。また中世居館が近接する場合が多く、近世以降路線が移動した例もいくつかある。判明している側溝間の路面幅は2.5～4.0mで、硬化面はその半分程度となっている。

3-1-2 金石資料・絵画文献資料⁹⁾

あずま道名を記した金石資料は、次のとおりである。

- 1 前橋市天川大島道標 宝暦3（1753）年「あつ満道」
- 2 東村大字上田六道道標 元禄10（1697）年「あ寿ま大原通」（97頁図イ）
- 3 藪塚本町大字大原字上西道標 天保4（1833）年「阿津ま道」（97頁図エ）



あずま線と東山道（国土地理院地勢図20万分の1「長野」「宇都宮」使用）

第3章 まとめ

また絵画資料には、次のものがある。

- 4 「上野国新田領鹿田村と阿左美村藪塚村野境論之事」絵図 寛文9（1669）年「阿津間道」
- 5 「上野御新田開発計画絵図」 寛文11（1671）年「我妻海道」
- 6 「上野国新田郡笠懸野御新田絵図」 元禄10（1697）年「吾妻道」
- 7 「飯土井村絵図」 天保14（1843）年「吾妻道」

すなわち、金石資料では2の1697年、絵画資料では4の1669年を最古とし、中世に遡るものは確認できない。また5と6ではルートが少し異なっている（97頁図工周辺）。なお直接あずま道名は記されていないが、本道跡東に近接する東国定と田部井には次の資料がある。

- 8 百番供養塔 文政庚午（1819）年「東大原大田足利坂東出流」「是方伊勢崎前橋坂東白岩水沢」
- 9 橋改修二十三夜塔 文化8（1811）年「土橋年々為夏水西彼行人以深為患故鄉人」（97頁図ウ）
- 9は早川にかかる石橋改修記念の碑文である。近世後期におけるあずま道の通行が依然として盛んであったことを示している。文献ではわずかに次が中世に遡る。
- 10 「夫木和歌抄」 14世紀初頭成立 「東路のうまやうまやと数へつあふみの近くなるが嬉しき」
- 11 「念仏往生伝」 13世紀後半成立 「樹市（うえきのいち）」

10は東から近江に向かうと思われる「東路（あつまち）」の存在を示している。ただし枕詞であり、あずま道を直接示すかは不明である。11は上植木光仙房遺跡周辺の植木地域に市があったことを伺わせる。

以上より近世初頭にあずま道が存在したことは確実だが、その中世への遡源は資料的にやや曖昧である。なお、元弘3（1333）年の新田義貞挙兵に際しては、新田荘→笠懸野→八幡荘（高崎）→鎌倉方向の経路をとっており、笠懸野→八幡荘はあずま道を通行した可能性が高い。一方、永正6（1509）年に新田から草津へ向かった連歌師宗長の紀行「東路のつと」では、新田荘→大胡→青柳・荒蒔→浜河の経路を通しており、あずま道は使われていない。すでに長距離幹線としての役割がなくなっていたのだろう。

3-1-3 小結

上記2と3を結ぶ道は、本道跡の118号遺構上の村道以外には考えられない。そのため、この村道直下の118号遺構の少なくとも上位3枚の路面は、97頁図イとエを結ぶ路線の一部の可能性は極めて高い。しかし地図で明らかのように、イと本道跡の間では、独結田との交差地点(A)で走向が変化している。自然に直進するなら古代大堀に沿って進み、より北で方向を変えたと酒盛遺跡に向かう。より古い時点の路線、118号遺構の少なくとも最古路面と第二路面は、そのように走っていたと考えたい。なお、イの西1.5kmの上植木光仙房遺跡立合調査（2002年8月）で確認した路面は、近世後期を大きく遡らなかつた。

東方向では、東国定のB地点で走向が変わる。その原因は不明だが、さらに東の大原周辺では、上述の路線変化が確認できる。これは寛文12（1672）年の岡登用水掘削の笠懸野開発による変化である。

この東西での路線変化が同時に起きた証拠はないが、近世初期にそれまでの路線からかなりの移動が生じたことは確かである。そして直線から屈曲走向に変わっている大原の例で顕著なように、長距離間の幹線としての性格はその過程で基本的に喪失したと言える。

本道跡でのあずま道118号遺構は、古代大堀31号遺構の埋まりきらない部分に沿って構築されたことは間違いないだろう。それだけに路線変更しにくい要素があったことになり、幹線としての機能喪失後も本来の路線をほぼ踏襲する形で残っていたと考えることができる。

なお藪塚木町山之神周辺には、3km近く直線で走るあずま道が残っている（オ～カ）。この部分の走向（N68°W）が、古代大堀西側の走向（N64°W）と近似している点は注意を要する。



相川以東のあずま通(国土地理院地形図25万分の1)「大湖」「伊勢崎」「副住」「上野境」使用

3-2 古代大堀と女堀・あずま道

3-2-1 検出した古代大堀の特長

「あずま道」の北側に5m離れ平行して検出した古代大堀31号遺構の特徴は、次の通りである。

- 1 埋土下位に砂粒の堆積はなく、底の掘り方も鋭角のため、恒常的な水流は考えられない。深さは15mで40cmの高低差（海拔93.7～94.1m）があるが、東が自然の低地であるためだろう。
- 2 埋土や出土遺物から、最初の掘削は8世紀頃であり、掘削土を北側に盛ったものが崩れたため10世紀前半以前に掘りなおしを行った痕跡が認められる。
- 3 走向や断面形はかなり企画性があり、掘削に際してかなり周到な計画がなされたと考えられる。

3-2-2 三和工業団地遺跡検出の堀と想定延長線

調査範囲内（長45m）では、ほぼ直線状に走っている。これは明治初年の地図に見えるあずま道の走向と基本的に同一である。そしてその西延長線上1.3kmの地点で、三和工業団地遺跡で検出されたほぼ同一形状の8世紀に掘削された堀の走向に一致している。また東方向に向かうあずま道直線路は、早川を越えた東国定の南まで延びており、全体としては少なくとも2.4kmの長さの直線をなしていたと考えられる（次頁図）。

三和工業団地遺跡⁹⁰で検出の堀は、断面台形（上幅4.0～5.5m、底幅1.3～2.0m、深さ1.6～2.0m、底海拔88.5～89.4m）で北側に土塁痕がある。掘り返し痕はなく、断面は31号遺構前期のものとはほぼ同一である。水流痕がなく、8世紀の土器が少量検出されたこともあって、31号遺構の延長であることは間違いない。

ここで堀は本遺跡と同一方向に東から250m走った後、掘立柱建物集申部分で突然走向を西北西に変えて270m以上延びる。この走向転換点の内側では平行四辺形状（約105×70m）の築地区画が確認されている。この区画は走向変換点の西側のみであり北辺は堀と平行しているため、堀の掘削後に造られた可能性が高い。

これらの遺構の性格は不明とされるが、堀がここで方向変化することと掘立柱建物群・築地区画の存在は、変化理由に深い関係があることが考えられる。変換点を基準にすれば、東に2.4km、西に270m以上の長さで延びており、確認できるだけで約2.7kmの長さになる。さらに東方向で早川を超えることが正しければ、水路でない以上、西でも粕川を横切って延びることもありうるだろう。ちなみに西方向（N64°W）の延長には榛名山相馬岳と二ツ岳の中間付近があり、東方向（N78°E）は足利市北部の山地に向かっている。

3-2-3 他地域の類似

このような遺構について、管見では類例が極めて乏しい。いまここで提示できるのは下記2例だけである。

・長曾根大溝（大阪府堺市）¹¹¹

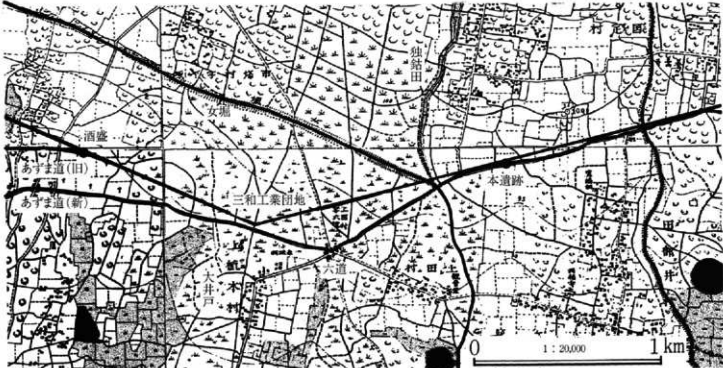
5世紀中葉～後半に掘削され、8世紀前半まで使用された。断面台形（上幅約4m、底幅約2m、深さ1m）真北方向に約500m以上延びる。底には一部で砂が確認されるものの、多くは礫で硬く、顕著な水流痕はない。兩岸に土手が築かれていた可能性が高い。また遺物の出土は極めて少ない。

調査所見では「短期間、水を流入させ、大溝に水をため使用後は、排水、その後、空っぽで外部から雨水が流入しない様に堤状遺構を築造して」おり、「水深50cmまで水をはれば、平底の船なら人を乗せて移動出来る」ため「極めて祭祀的政治的色彩の濃い行為にのみ」に用いられたと想定されている。

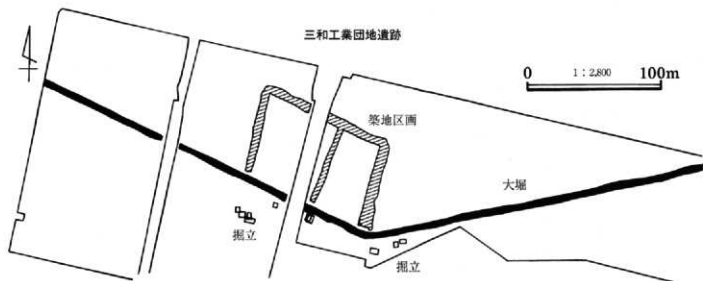
築造目的については、百舌古墳群の被葬者集団である5世紀の国家権力が丹比道などの道路整備・難波津の港湾整備と合わせて、「東アジア外交」目的で「国家事業のシステム」として築造したとしている。

・牧の境界 中野谷地区遺跡群¹²⁰（安中市）、半田中原・南原遺跡¹³⁰（洗川市）

前者は、100ha以上の中に少なくとも5カ所の古代牧推定遺跡が点在する。そのうち中原遺跡は、溝に



第一軍管区迅速測図(明治初年)に見える各遺構



1947年の航空写真 大堀東側と独鈷田などが明瞭に残る

よって台形状区画（南北約410m東西約260～300m）を囲っている。この溝は逆台形断面（上幅2.8～3.1m底幅0.9～1.2m深さ1.2～1.3m）で、一部でピット列が確認され、土橋状部分も存在する。9世紀前半の土器類が少量出ている他に、本遺跡31号遺構出土のものと似た袋状鉄斧が出土している。この溝は一部低地を横切って構築されているが、基本的に上記範囲を囲っている。そのような遺跡の集合体全体が8・9世紀の牧と推定されている。

後者では、台形状区画（南250m以上東約180m北160m以上）を囲う断面逆八字形の溝（上幅1.6m深さ0.8m復元上幅3m）が検出されている。推定10haの区画内には遺構はなく、溝内からの遺物は鉄鎌1点のみだった。弘仁9（818）年の地震跡より新しいため、延喜式内の有馬高牧の跡と考えられている。

本遺跡31号遺構を比較すれば、断面形状はいずれよりもやや大きい。また水を貯める機能があったかについては、台地部に構築され川を横切っているため考えにくい。さらに区画を囲む状態は見られない。

3-2-4 大堀の性格想定

本遺跡調査地（次頁図A）では、大堀周辺100m以内に同時期の遺構は存在していない。200m離れた南区の集落でも、8世紀の遺物はごく僅か存在しているが、本遺跡集落自体の必要性で築かれたものでないことは確かである。また掘り直し後の遺物は堅穴住居出土のものと基本的に同じであるため、大堀で出土した少量の遺物は、掘削あるいは修復作業の労働力として集落居住者が関わった可能性を示している。

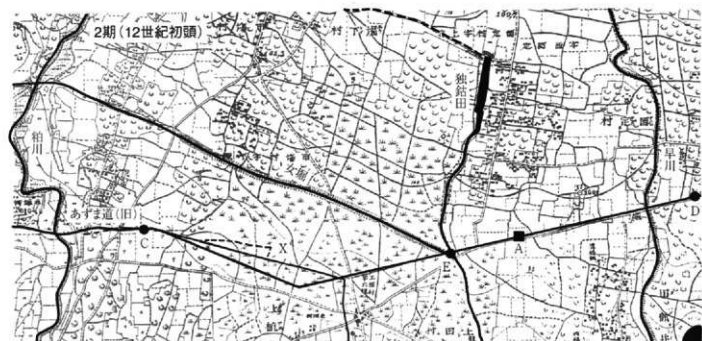
そのような本遺跡自体から得られる情報以外に加えて、上記の各要素を以下に検討してみたい。

- 1 大井戸・天ヶ池間湧水地中間に位置する三和工業団地遺跡での堀屈曲点（次頁図B）の掘立建物群と築地区画は、8世紀創建の何らかの官衛施設だが、長大な堀の走向状況からは寺院などは考えにくい。
- 2 少なくとも全長2.7km以上の距離を2方向直線で築くには、膨大な労働力と共に明確な設計測量技術さらに目的意識が必要である。西方向の基準は榛名山相馬岳周辺を使った可能性がある。
- 3 用水路でないことは明らかであり、また防衛施設としての役割も規模からは想定できない。
- 4 記録にない牧の境界の場合、区画面積を相当広く考えざるをえなくなるため、難がある。
- 5 周辺の遺跡は北側に古代遺跡が少なく、何らかの行政的な境界の可能性は考えうる。
- 6 角度は少し異なるが、南の8世紀東山道も伊勢崎市街地南部で急に走向を変えている。本大堀の走向変化と同一の理由の可能性も想定できる。ただし現状では本大堀そのものを道路とはみなしがたい。
- 7 いずれの場合でも法令制権力以外に造営者は想定できない。

3-2-5 女堀・あづま道との関係

大堀は12世紀初頭には約1m埋没していたが、まだ50cm以上の低地として痕跡が残っていた。そこから本遺跡周辺での各遺構との関係は次頁図のように変化が確認でき、また以下の点が指摘できる。

- 1 細長い低地独姑田との接点（E）が女堀の終着点ではなく、本大堀跡を経て早川まで通じさせようとした可能性が考えられる。独姑田は地形的には不自然で、別の人工の堀であるかもしれない。
- 2 当初のあづま道（C～E～D）は大堀に平行しているため、12世紀初頭まで成立が遅る可能性が高い。あづま道は、本大堀平行の直線路から、近世前期までに六道（F）を经る屈曲路への変化が考えられる。六道近接の天ヶ池湧水の利用が理由かもしれない。
- 3 従来から注目されていた伊勢崎市北東部（旧殖蓮村）と赤塚町南東部の直線状境界（X）は明治初年の迅速測図には痕跡がなく、酒盛遺跡のある西端を除いて大部分があづま道の路線ではなかった。いずれにしても、女堀とあづま道という12世紀の浅間山噴火災害からの二つの復興事業が、8世紀になされた大土木工事の影響を大きく受けていたことは間違いない（大堀周辺の地形区分は118頁図参照）。



3-3 古代集落

南区で検出した竪穴住居11軒などの遺物について、廃絶時期以前の可能性の高い覆土下層・竈・掘り方出土のもののみを検討すると、次頁図に記したように大きく4段階に分けて考えることができる。

- I期 (指標69号遺構) : 土師器盤状坏 該当他遺構 なし
 II期 (指標65号遺構) : 須恵器碗・坏 (薄手)、土師器台付甕 (薄手)
 該当他遺構 54・56・68・73・84号遺構
 III期 (指標57号遺構) : 須恵器碗 (厚手)、土師器甕 (厚手)、灰袖陶器 (瓶)
 該当他遺構 55・71・(60)号遺構
 IV期 (指標70号遺構) : 土師器碗、灰袖陶器皿 該当他遺構 なし

以上の中で層位的に新旧関係が判明しているのは、I期の69号とII期の68号の関係だけである。他の時期間の前後関係は本遺跡では層位的には確認できないが、上野地方の他遺跡例から想定した。本遺跡の場合、遺物の残存状態が良くないため、提示した土器類はかなり偏っていると思われる。すなわち、II期には土師器の削り成形の坏、III期には高台成形の丁寧な灰袖陶器皿、そしてIV期には須恵器羽釜が存在しているはずである。またI期以前のものとして、丸底の土師器坏が土坑44号遺構周辺で出土している。

本遺跡の出土状態では明確な時期認定を行う材料に乏しいため、ここでは新たな年代観の提示については保留したい。ただし、これまでの他遺跡の例から、概略次のように想定できる。

- I期 : 9世紀前半頃
 II期 : 9世紀後半頃
 III期 : 9世紀末～10世紀前半頃
 IV期 : 10世紀中葉頃

なお北区古代大堀の最初の掘削はI期以前であり、また掘り直しはIII期に相当する。また遺物の大半を占める須恵器碗坏類は、ほとんど胎土に夾雑物が多く焼成が軟質の粗製品である。

以上の分類を前提に集落の特徴を概観すると、検出竪穴住居の中心をしめるのはII期とIII期のものである。両者の分布域はそれほど大きな差は見られないが、III期がより南側の低地部に移動した状況が認められる。また特異な掘立柱建物の117号遺構については直接時期判定をする材料に欠けるが、内部に見られる土坑116号遺構の遺物がこの建物と関係あるとすれば、II期に属することになる。

いずれにしても集落のあり方は粗放的で、古代大堀の掘削・修復作業を重点的にまかなえるほどの人口集結中があるとは感じられない。なお西に約2km離れた舞台遺跡の須恵器窯跡群はI期と考えられ、そこで焼成された須恵器は本遺跡では全く出土していない。

参考文献

- 1) 群理工1997『中宿在家遺跡・上敷岡一原塚遺跡』 2) 群理工1995『大八木屋敷遺跡』 3) 群理工2001『小八木志志貝戸遺跡群2』 4) 群理工1982『元鳥名B・吹屋遺跡』 5) 群理工1994『小島田八日市遺跡』 6) 群理工1995『今井道上・道下遺跡』 7) 群理工1988『上植木光仙房遺跡』 8) 赤堀町教育委員会が2001年11月に調査 9) 飯塚本町1991『飯塚本町誌上巻』、新田町教育委員会2001『新田町の文化財』、東村教育委員会1986『佐波郡東村の石造文化財(北部編)』による 10) シン・コンサルの平田貴正氏の御教示による 11) 堺市教育委員会2000『長曾根遺跡発掘調査概要報告』堺市文化財調査概要報告第89冊 12) 安中市教育委員会1994『中野谷地区遺跡群』 13) 済川市教育委員会1994『平田中原・南原遺跡』

	須惠器碗・皿	須惠器瓶・甕	土師器碗・杯	土師器甕	灰釉陶器皿・瓶
IV 期	<p>1009, 1039, 1040, 1041, 1078, 1080, 1081, 1089, 1090, 1097</p>				
III 期	<p>1009, 1039, 1040, 1041</p>				
II 期	<p>1060, 1061, 1066, 1067</p>	<p>1048, 1049</p>			
I 期					<p>1034, 1035, 1036, 1037, 1038, 1058, 1075</p>

壁穴住居等出土の土器・陶器

3-4 古代道路と堀状遺構の関係について

— 一田部井大根谷戸遺跡検出の古代大堀遺構に関して —

古代交通研究会会長 木下 良

1 はじめに

佐渡郡東村大字国定字西前地の田部井大根谷戸遺跡で検出された古代大堀遺構が、付近を通ると考えられる『延喜式』に見える東山道駅路と何らかの関係が考慮されるものの、具体的にどのような性格と機能を持っていたのかということは俄には判断できないので、他地域における古代道路と堀状遺構との関係を若干検討してみることにしたい。

先ず上野国の古代東山道駅路について概観すれば、『延喜式』兵部省式「諸国駅伝馬」条に坂本・野後・群馬・佐位・新田の駅名が見えるが、群馬駅が既橋を古名とする前橋市に想定されるとして、前橋市元惣社地区に想定される上野国府を經由して、赤城神社付近を通過して佐位駅を三和町上植木付近に比定し、新田駅所在の新田町に至る、上州平野を北方に大きく廻る路線が想定されてきた。

金坂清則¹⁾は旧版地形図や空中写真によって、高崎市街西方から国府想定地の南側に達する直線の明瞭な道路痕跡が認められることを指摘したが、その後この路線は数次の発掘調査²⁾によって9世紀以降の幅6m前後の道路遺構が検出されたので、『延喜式』駅路に当たることは確実となったが、これに続く利根川以東の路線については明瞭な道路痕跡は認め難く、また確実な駅路遺構も発掘されていない。

一方、以上の『延喜式』駅路に沿って東道と呼ばれる古道があり、これを古駅路に比定する説も行われていたが、その路線は直線的路線をとる古代駅路に比して屈曲が多く、これに沿って義経伝説が多いことなどから古代末期ないし中世の道路に当たる考えが行なわれるようになり³⁾、その遺構も高崎市小八木町志志貝戸遺跡⁴⁾などで検出され、浅い両側溝間の心々幅1.8mから鎌倉時代には3.2mに拡げられた道路の実態が確認された。『延喜式』駅路と東道はほぼ同じ地域を通ることから、東道は東山道駅路が廃滅した後その機能を踏襲するものとして使用されたのであろう。

駅路は中央集権的な律令国家体制下に、既存の集落とは無関係に目的地に最短距離で到達するように直線的路線をとって計画的に敷設され、駅家はまた駅路の30里（約16km）間隔を基準にして計画的に配置されたものであった。駅路は平野部では両側溝を備えてその心々幅は奈良時代には9m・13mもあり、平安時代には約6mに狭められることが多いが、なお後世には見られない大道であった。しかし、10世紀頃からは律令制の衰退に伴って駅家と道路の維持が困難になると、諸種のサービスを得やすい一般の集落を繋ぐ道路が利用されるようになって、これが東道とよばれるようになったものであろう。

従って、このように時代と性格を異にする東山道駅路と東道の両道が交差して通る上州平野北部では、両者の継続関係や関係位置などに留意する必要がある。

なお、8世紀代の道路は境町矢ノ原遺跡⁵⁾で検出されて以来、境町から新田町域にかけての数ヶ所で両側溝間の心々幅約13mの道路遺構が確認され⁶⁾、さらに高崎市⁷⁾から玉村町⁸⁾で検出された幅約9mの道路遺構がこれに接続すると考えられることから、奈良時代の東山道駅路は上州平野南部を高崎からやや南寄り東方に玉村を経て、現在の広瀬川の流路をとったと考えられる旧利根川に達し、そこで方向をやや北寄りに変えて伊勢崎から東村・境町界・境町域を通過して新田町に達していた。

この道路が何時敷設されたかは確認できないが、長元元年（1028）頃のもものとされる「上野国交替実録

帳⁽⁹⁾によれば、当時既に存在しなかったが本来国府に保存されるべき戸籍550巻の中に、「庚午年玖拾(90)巻」が挙げられており、これは天智天皇9年(670)の庚午年に作製された庚午年籍のことであるが、その内容として「管那綱捨陸(86) 野家戸肆(4)」⁽¹⁰⁾となっており、当時4駅が存在したことが判る。また、埼玉県所沢市東の上遺跡⁽¹¹⁾で検出された東山道武蔵路は、備溝に埋設された土器から7世紀第3四半期の築造になると考えられているので、当然これに連なる上野国でも当時駅路が通じていた筈である。

上野国府は8世紀に入ってから駅路から離れた位置に設置されたので、駅路から国府への連絡路が造られ、おそらく横倉興一⁽¹²⁾が日高条里を東西に二分すると考えている道路がこれに当たるものであろう。また、前記した高崎・前橋間を直線に通る「延喜式」駅路は、条里地割の東西2坪が作る長方形の対角線を通るとされているので、これも条里地割を基にして敷設されたことになる。

東山道駅路は国府設置以前に敷設されていたが、国府が駅路を離れて設置されたので、平安時代に入って全国的な駅伝路改修の機会に国府を通るように変更されたものであろう。なお、全国的に見て国府は駅路に沿って設置されることが一般であるが、摂津・尾張・武蔵・若狹・丹波・備前・備中・淡路・阿波などの諸国府のように、「延喜式」駅路からは離れて設置された所もある。

ところで、今回検出された田部井大根谷戸遺跡は奈良時代に掘られた大堀で、先に三和工業団地遺跡で検出された同様の大堀に繋がると考えられており、その間にも地割的に痕跡が残っているので、少なくとも2.7km以上の長大な遺構であったことになる。この付近は「延喜式」東山道が通過した筈であり、金坂⁽¹³⁾は東道を東山道駅路を踏襲したものと見て、佐位駅をこれに沿う伊勢崎市三和町上榎木に比定し、峰岸純夫⁽¹⁴⁾もこれに従い、また須田茂⁽¹⁵⁾も三和町付近としている。また東道はこの遺跡が天仁元年(1108)の浅間山噴火の軽石層に埋没して後に、この掘跡に沿って通っていた。一方、上州平野北部に残る長大な中世の大堀である女堀が、ほぼ古代東山道または東道に沿っていることが指摘されてきたが、これがこの古代大堀の縁で繋がっていると考えられるので、古代から中世にかけての道路と大堀とが複雑に絡みあっていることになる。

2 古代道路自体が埴状になっている例

計画的に築造されて直線的に通る古代道路が低い丘陵や台地を切り通す場合に空堀状になる例は多いが、平地においても掘下げて埴状になる例がある。

佐賀平野を約16km一直線に通る古代道路は、1972年に藤岡謙二郎を代表として科学研究費の助成を受けて実施した全国駅路調査に際して、肥前・肥後両国を担当した筆者⁽¹⁶⁾が空中写真に直線の痕跡を認めて現地踏査した結果、数ヶ所の切り通し地形を認めたので古代道路の遺構として推測したものであるが、その後吉野ヶ里遺跡他数ヶ所の発掘調査⁽¹⁷⁾によって奈良時代の道路跡であることが確認された。

吉野ヶ里の西方一帯は低平な水田地帯であるが、吉野ヶ里の丘陵から西方約300m程を隔てて馬郡の集落があり、その北縁に水田から約1.1m落ち込んだ幅10~15mの帯状の窪地が在って約100m続き(図1・写真1)、1972年当時一部が蓮田になっていた。平野部を特に掘り込んだこの遺構を道路跡と見ることには若干の躊躇を感じたが、前後は完全に想定路線に合うので一応これを古代道路の痕跡と見た。この遺構は中園遺跡⁽¹⁸⁾として1985・6年に発掘調査された結果、両側溝を有する幅6.8~8.8mの道路遺構が確認され、道路面は基盤の砂礫層の上に白黄色の砂利混じりの硬化面を形成していたという。

さらに、古代道路の路線がその西方約3kmの佐賀市久保泉町を通る部分は、130m程の区間が幅10m前後の水を湛えた水溜となっている(図2・写真2)。その深さは不明であるが、水底は两岸から2m程は落ち込んでいたものと考えられる。この部分は発掘調査を実施していないので、道路自体が埴状になっていたの

か、道路部分を掘り込んで水溜にしたのかは不明であるが、いずれにしても元々窪地になっていたものであろう。

肥後国江田駅は熊本県玉名郡菊水町江田の台地上に想定されるが、台地上を横切る形で幅6～8m、深さ1～1.5mの堀状の窪地が約150m続いている(写真3)。次駅高原駅は貞観元年(859)に合志郡から山本郡を分けた際に、その由来を記した立石が立てられた所との伝承が残る熊本市改寄の立石地区の台地上に想定され、現在も阿蘇溶岩の玄武岩の柱状の石が立っているが碑文は無い。次駅斐美駅が想定される熊本市市洞町から直線の道路痕跡が続いて当地に達し、一帯の地は奈良・平安期の土器片を出土するので、筆者は駅跡として適当と考えた。前記した道路跡は台地を掘り込んだ底幅約6mの堀状窪地として南北に通っている(写真4)⁽¹⁹⁾。

関東地方では、常陸国東海道の遺構として諸所に「五万堀」と称する窪地があることが知られている⁽²⁰⁾。その中の一つの友部町のそれは「五万堀古道」として発掘調査され、両側溝を有する幅10m前後の8世紀初頭から9世紀代まで機能した道路遺構であることが確認された⁽²¹⁾。この道路は台地上を通るが、オープンカット工法による深さ1m以上の切り通し状になっている。小字地名として五万堀の名称が残る地点は、道路が台地の小段丘陵を切って通る部分の切り通し部になっているが、台地上でも溝状に通っていたことになる。

美野里町大字羽鳥・羽刈・江戸の台地上にそれぞれ五万堀の小字地名が同一直線上に存在しており、いずれも堀状の窪地となっていたというのが明瞭で消滅した。なお、五万堀のいわれは源義家が5万の軍勢を率いて通った奥州街道の跡であると言い伝えられていたが、より古い時期の官道の跡であったことになる。

このように、平地を通る道路が特に掘り込まれて堀状になっている理由は不明である。軍用道路が軍隊の行動を秘匿するために、台地上では道路部分を掘り込んで長い切り通し状になったり、また道路の両側に土手を設ける例が鎌倉街道などでは見受けられるということである。古代官道も軍用道路としての性格があることは、筆者⁽²²⁾も指摘したことがあるが、平地を部分的に掘り込んだのでは行動秘匿の意味は認め難いように思われる。

3 古代道路の側溝が水路になる例

古代道路の側溝が水路になった例としては、群馬県内でも境町矢ノ原遺跡⁽²³⁾が知られている。この溝は上幅約3m、底幅約1.5m、深さ約2mで水流の形跡があり、またこれを塞ぎ止めた堰の遺構も認められ、西方約1kmの牛堀と呼ばれる土樋遺構に直接的に連なるので、当初は8世紀代に遡る灌漑用水路として注目されたものである。しかし、僅かではあるが地形の起伏を無視して直線的に通ることは、本来の灌漑水路としては疑問に思われ、また南側に約13mを隔ててこれに平行する、上幅約1.5m、深さは0.25～0.42mの水流の形跡がない溝があることから、この大小の溝は道路側溝ではなかったかと考えられるようになった。

まもなく、東方の新田町大東遺跡⁽²⁴⁾で平行する2本の明瞭な線が空中写真のソイルマークとして認められ、試掘の結果それぞれの溝が心々距離13mで確認され、まさしく矢ノ原遺跡の延長線上に乗ることから、これらが上野国の初期東山道に当たることが判明した。なお、矢ノ原遺跡では道路廃絶後に灌漑水路となった北側の溝に堰が設けられ、そこからの分水路が旧道路面を横切って南方の水田に引かれていた。また、南側の側溝内には8世紀代第3四半期頃とみられる48点の須恵器片を埋設した祭祀遺跡⁽²⁵⁾が営まれていたので、ほぼ同じ頃に駅跡としては廃止され、その北側側溝が灌漑用水路として利用されるようになったものと思われる。

この道路は直線路線をとって新田町域に続くが、新田町域ではこの水路の延長は認められない。しかし、新田町下原宿遺跡⁽²⁶⁾で検出された道路の南側側溝延長線は、現在の水路新田堀の路線に一致するので、新

田堀に沿った部分での道路遺構は確認されていないが、ここでは駅路の南側側溝が後に水路として利用されるようになったと考えられる。

奈良盆地の代表的計画道路として知られる下ッ道は、藤原京右京の基準線となり、また平城京の中軸線となって朱雀大路の基になったが、奈良盆地の東西方向への条里基準線となっており、1町約109mの条里方格地割りに対して約45mの余剰帯を作っている。また、橿原市八木で下ッ道と直角に交差する横大路も同様に約45mの余剰帯を示しており、南北方向への条里基準線となっていた。

下ッ道の西側に沿って平城京内8条から約2kmの区間は佐保川が直線的に南流しており、また南方では田原本町八尾から橿原市八木町の北側までの約4kmの区間は、下ッ道の路線を踏襲した近世の中街道に沿って寺川が北流している。一方、寺川の上流は耳成山の北側を遡って米川となるが、ここでは横大路に沿って西流している。

下ッ道は平城京内の朱雀大路の調査の際に、両側溝間の心々幅約23mが測定されたので、全体的に同様の道幅を示すとすれば条里余剰帯は約45mであるから、両側に約10mの路側溝があったことになる。以上の川はこの部分を河川敷にしていたと思われ、あるいは道路側溝が拡大されて河川流路として利用されたとも考えられる。

両河川の流路以外の地域においても、大和郡山市稗田遺跡⁽²⁷⁾では下ッ道の路面幅は約16mであったが、西側溝の幅約3mに対して東側側溝は幅約11mもあった。また、これらを斜めに横切る幅約10mの人工河川があって、下ッ道に長さ20m、幅9mの橋⁽²⁸⁾が架けられていた。橋は2時期にわたるが、第1期の橋脚の抜き取り穴から靈龜元年(715)の年号を記した木簡が出土している。ここで注目されることは、この人工河川より東側溝の方が底が深いので、川よりも溝の方に多量の水量を必要としたことになり、おそらく東側溝は運河としての機能を有したのであらうと考えられることである。また、稗田遺跡の北側に在る稗田集落は中世起源の環濠集落として知られるが、その西側の濠は正しく下ッ道の西縁に当たるので、その側溝が基になったものと思われる。

既に、上記の下ッ道に沿う寺川については秋山日出雄⁽²⁹⁾が運河の機能を有したのであらうことを指摘して、斉明紀2年(656)条に見える「狂心渠」に比定できるのではないかとしているが、現在では「狂心渠」は飛鳥地方にその所在が考慮されている。

なお、佐保川の下流は約1.5kmの区間で飛鳥と斑鳩とを繋ぐ古道とされる筋違道に沿って流れている。筋違道は東西南北に通る奈良盆地の条里地割りに斜向する直線道路で、東西南北方向に通る直線道路に先行して存在した直線の計画道路と考えられ、聖徳太子が往復したというので太子道とも呼ばれる。その他、畿内では足利徳亮⁽³⁰⁾が推定した山城盆地南部の木津川流域を通過する奈良時代の山陰道は、木津川と淀川との合流点付近では木津川左岸を堤防状に通っていたことになる。

南海道讃岐国では想定駅路に沿って条里余剰帯が認められる所が多く、駅路は条里施行の基準線となることがよく判るが、駅路は高松市域で2カ所に互って発掘され⁽³¹⁾、9m・12mの道幅を有することが判明した。

高松平野東部を流れる新川の支流吉田川は地形に沿ってほぼ南流するが、木田郡三木町砂入で約120度曲がって駅路に沿って西方に向かい、約1.3kmの高松市十三西町でまた105度曲がって北に流れる。この間は駅路の南縁に沿って全く直線の流路をとっている。

また、前記した佐賀平野を約17km一直線に通る古代道路に沿って、三田川町切通から中原町西寒水にかけて古代道路の路線をほぼ踏襲している長崎街道の北側に河川流路があり、また神崎町川寄では古代道路

の路線を踏襲する現在道路が横大路と呼ばれているが、その南側に沿って幅4～5mで深さ2～3mの小川が流れている(図3・写真5)。これらは古代道路に沿って自然の河川流路を人工的に変更したものと考えられる。

このように、直線的計画道路に沿って人工河川が作られたり、自然河川の流路を変更して流したりすることが行なわれた。これらのことは、隋の場合帝が掘削した大運河に沿って長さ100歩(約150m)の御道を作った⁽³²⁾ことに類似して、古代道路と水路との密接な関係を窺わせるものであるが、隋の運河と道路についての実情が遺隋使によってもたらされたのではなかろうか。

4 古代・中世道路に並行する堀状遺構

女堀⁽³³⁾と呼ばれる長大な堀状遺構は、前橋市上京町地先から佐波郡東村固定地先まで、赤城山麓を延々12kmに亘って通る、幅12～20mの用水路と考えられていたが、発掘調査の結果では水流の形跡がなく、平安時代末期ないし鎌倉時代初期に利根川の水を佐位郡地方に引く計画で全路線に亘って一斉に着工したが、完成・通水を見ることなく工事は中止され、そのまま放置されたものと見られている。

少し疑問に思えることは、一般に古代・中世の灌漑用水路は幅2m以内のものが多いことから考えると、女堀の幅はあまりにも広いことで、その工事量も数倍することになるからである。あくまでも推測に過ぎないが、あるいは運河としての機能をも考えるものではなかったらうか。

女堀が東道と並行しており、東道が女堀の掘削工事に際しての人員や資材の運搬などに好都合であったことは指摘されているが、両者の路線に何らかの関係があったかどうかは不明である。もし、以上のように運河計画としても考えられていたとすれば、両者間に有機的な関係を見ることができると考えられる。

女堀と呼ばれる水路遺構は関東地方の各地に在り、埼玉県川越市霞ヶ関にある女堀は峰岸純夫⁽³⁴⁾が指摘するように入間川と小呼川とを南北に連絡するように続いているが、近年宅地造成のために消滅した。事前に行なわれた発掘調査⁽³⁵⁾によって、上幅8～9m、底幅1～2m、深さ2.5m程度の堀跡が長さ420mにわたって検出された。ところが、この堀に沿う東側の土塁の下層から、女堀と約10～12m隔てて並行する小溝が発掘されている。この女堀の位置と方向は入間川南方の所沢市堀兼を通る、鎌倉街道に踏襲される推定東山道武蔵路のほぼ延長線上にあたるので、木本雅康⁽³⁶⁾はこの小溝を古代道路の側溝の跡と考えた。とすれば、女堀は古代道路の西側溝の跡を利用・拡張して掘られたことになる。その後、この女堀の南端西側に近い若宮八幡遺跡で「驛長」の墨書土器が出土したので、付近に駅家が在ったことになり、木本の想定はほぼ裏付けられたと言うことができる。この女堀は、古代道路の遺構に沿って掘削されたことになる。

5 駅の周郭を形成すると見られる堀状遺構

直線的に連なる本遺跡とは関係が薄いと見られるが、駅想定地付近に周郭状の堀状遺構を見ることがある。

佐賀平野の直線道路が通る大和町東古賀には、醍醐天皇を祀る延喜大王社と呼ばれる神社があるが、古代道路を塞ぐような位置にあるのは注目される。神社と道路遺構の北側に空堀状遺構で囲まれる一郭があり、筆者はこれを佐嘉駅跡に想定した。

また、前記したように筆者が肥後国高原駅に想定した熊本市改奇の立石地区も、東西約200m、南北約300mの長方形の区画を廻って幅5～6mの空堀がある。

なお、上野国群馬駅は前橋市街中心部とするのが通説であるが、前橋市元総社町に想定される上野国府の南面に、前記した8世紀代の駅路と国府との連絡路になると考えられる日高糸里の基準線を作る南北道路と「延喜式」駅路とが交差する地点の国府寄りに、前記2地と同様に空堀状の窪地で囲まれる一郭があり、

筆者(37)は主要道路の交点でもあり国府との関係位置から考えても、此処が群馬駅跡ではないかと考えている。

6 おわりに

以上のように、古代道路と水路ないし堀状遺構は密接な関係が見られるが、時には道路遺構と水路遺構とを見紛うこともある。筆者は安中市で見られた帯状地条の連続を道路遺構と見て東山道駅跡に想定した(38)が発掘調査の結果では中世の堀状遺構であることが判明した。

このような情況の元では、田部井大根谷戸遺跡の大堀の性格を考定するのはしごく困難である。しかし、これに沿って古代駅路の機能を継承したと見られる「あずま道」の遺構も検出され、また本道跡の大堀に連続すると見られる同様の大堀が検出された三和工業団地遺跡では、時代は下るが中世の掘立柱建物群の中に、小仕切りをもった馬房を思わせる建物があることを考え合わせると、やはりこの大堀は道路関係の遺構と見るのが適当ではなかろうか。

側溝を有しないことが疑問であるが、台地上のオープンカットの道路遺構の例もあるので、一応道路と見る可能性もあるように思う。いずれにしても今後の類例の調査に期待し、関係遺物の出土を待たなければならないだろう。

なお記録に無い牧の境界である可能性もあるが、牧の実情については筆者は詳しくないのでここでは言及を保留したい。しかし、古代の信濃国望月牧や長倉牧、また下総各地に残る近世牧でも牧の境界は土手状のことが多いようである。

文献および註

- 金坂清樹「上野国府とその付近の東山道、および群馬・佐位駅家について」『歴史地理学紀要』16、歴史地理学会、1974年、および「上野国」藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』Ⅱ、大明堂、1978年。
- 群馬県教育委員会「指定東山道—群馬町中泉・福島・吾谷地区を中心とする遺構確認調査報告書—」群馬県群馬町、1987年、他。
- 坂井隆「東山道—あずま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴—上野の陸上交通史序論—」『研究紀要』6、群馬県埋蔵文化財調査事業団、1989年。
- 坂井隆「あづま道と東山道」『小八木志志貝戸遺跡群2』、群馬県埋蔵文化財調査事業団、2001年。
- 坂井久純「上野国の古代道路」『古代文化』47-4、1995年、古代学協会、他。
- 坂井久純・小宮俊久「古代上野国における道路遺構について」『古代交通研究』1、古代交通研究会、1992年。
- 長井正秋「高崎情報団地遺跡の古代道路遺構」『古代交通研究』4、古代交通研究会、1995年。
- 中里正憲「群馬県砂町遺跡の古代道路遺構」『古代交通研究』9、古代交通研究会、1999年。
- 『平安通文』第9巻、4609。
- 7世紀代には集落の単位は「郷」ではなく「五十戸」であった筈で、また「隣家」もおそらくは伊場遺跡の木簡に見られる「隣評」であったと思われるので、庚午年籍の内容を疑問とする見解もあるが、『日本書紀』の7世紀の記事に本来「評」であるべきを「郷」と書いているように、公文書などでは古い語に對して大伴律令制定後の8世紀以来の語を当てるのが一般なので、ここでも同様に考えるべきであろう。
- 飯田光晴「埼玉原所沢市東の上遺跡」『日本考古学年報』日本考古学会、1989年。
- 横倉典一「上野国府周辺における桑里遺構の問題点」『桑里研究』2、桑里研究會、1986年。
- 前掲註1)。
- 峰岸純夫「東山道と佐位駅」『伊勢崎市史』通史編1・原始古代中世、1987年。
- 須田茂「東山道と上野国の駅家」『群馬県史』通史編2・原始古代2・群馬県、1991年。
- 木下良「空中写真に認められる想定駅路」『びざん』64、美術文化史研究会、1976年、「肥前国」藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』Ⅱ、大明堂、1979年。
- 佐賀県教育委員会「筑後集落吉野ヶ里遺跡概観」吉川弘文館、1990年、「吉野ヶ里」吉川弘文館、1994年、「古代官道—西海道肥前路」1995年。
- 緒方裕次郎・八尋実『的小道遺跡12区—中国遺跡』神埼町文化財調査報告書・14、1986年。
- 木下点「肥後国」藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』Ⅱ、大明堂、1979年。
- 木下良「常陸国古代駅路に関する一考察—直線的計画古道跡の検出を主として—」『國學院雑誌』85-1、國學院大學、1984年、「東海道—海・川を渡って—」木下良編『古代を考える—古代道路』吉川弘文館、1996年。

第3章 まとめ

- 20 茨城県教育財団文化財調査報告第162集「総合流通センター整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」「五万福古道」茨城県・財団法人茨城県教育財団、2000年。
- 22 木下良「古代官道の軍用的性格—通過地形の考察から—」『社会科学』47、同志社大学人文科学研究所、1991年。
- 23 前掲註5)。
- 24 前掲註6)。
- 25 坂本久純「群馬県境野矢ノ原遺跡の灌漑用水における祭祀道路」『情報 祭祀考古』9、祭祀考古学会、1997年。
- 26 前掲註7)。
- 27 中井一夫「神田遺跡」『東京考古学研究所編「大和の考古学50年」』学生社、1988年。
- 28 小山田了三『儀』法政大学出版局、1991年。
- 29 秋山日出雄「条里制地割の施行起源」『東京考古学研究所編「日本古文化論攷」』吉川弘文館、1970年。
- 30 足利健亮「山背の計画古道」『日本古代地理研究』大明堂、1985年。
- 31 高松市教育委員会・弘福寺領遺跡国山田郡田園調査委員会「古代南海道の発掘調査結果について」1997年。
- 32 中国公路交通史編審委員会編・土木学会土木史研究委員会日中古代道路研究会訳「中国古代道路史概説③」『道路』1991-7、道路協会、1991年。
- 33 昭和54年度女塚遺跡詳細分布調査実績報告書「女塚」群馬県教育委員会、1980年。
- 34 峰岸純夫「用水遺構「女塚」」『中世の東国—地域と権力—』東京大学出版会、1989年、54・55頁。
- 35 「女塚Ⅱ・東女塚原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団、1987年。
- 36 木本雅康「宝亀2年以前の東山道武蔵路について」『古代交通研究』1、古代交通研究会、1992年、「東山道—山坂を越えて—」木下良編『古代を考える 古代道路』吉川弘文館、1996年、111・112頁。
- 37 木下良「上野・下野両国と武蔵国における古代東山道駅伝路の再検討」『樹木史学』4、1994年。
- 38 木下良「群馬県安中市に残る道路遺跡（東山道上野国野後駅付近）」木下良編『古代を考える 古代道路』吉川弘文館、1996年。

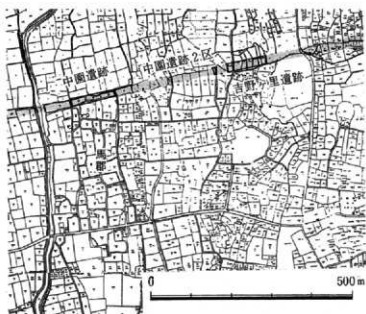


図1 中園遺跡と吉野ヶ里遺跡
〔「古代官道・西海道肥前路」掲載図を
調整加筆〕

写真1
中園遺跡の風景 (1973)



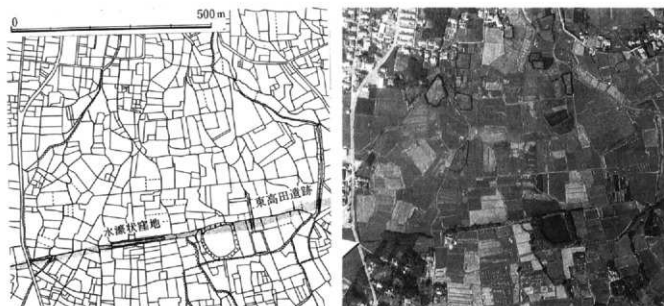


図2 道路遺構が検出された東高田遺跡と水濠状窪地
〔『古代官道・西海道肥前路』掲載図を調整加筆〕



写真2 古代道路線の水濠状窪地



写真3 肥後国江田駅想定地付近の推定道路遺構



写真4 肥後国高草駅想定地を通る推定道路遺構

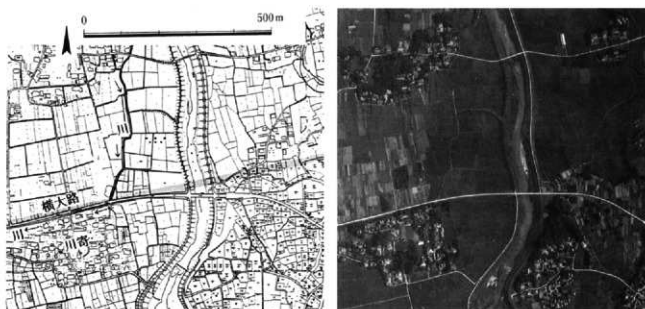


図3 川寄集落と横大路（『古代官道・西海道肥前路』掲載図を調整加筆、
空中写真は国土地理院撮影 KU-62-6 C3-26の部分を使用）



写真5 川寄集落付近の横大路に沿う河川流路

3-5 成果概要

田部井大根谷戸遺跡の発掘調査は、JR両毛線国定駅南口開発とそれに関わる県道改築を原因として、2001年7月1日から9月30日まで行った。その結果判明したことの概要は、次のとおりである。

1 主な検出遺構

北区

中世 道路遺構「あずま道」跡

古代 大堀

南区

古代 竪穴住居集落（竪穴住居11軒以上・掘立柱建物1棟以上）

古代竪穴住居集落は9世紀後半～10世紀前半を中心とするもので、南区でも南側部分にまとまっている。ただし集中度はそれほど大きくない。そこに含まれる掘立柱建物1棟は正方形形状で、やや特殊な上屋構造のものであった。

北区の両遺構については下記3に記す。

2 主な出土遺物

出土遺物の絶対量は多くない。竪穴住居集落の中心遺物である須恵器碗坏類は、胎土・焼成共に粗製のもので大部分を占める。特殊なものでは、鉄滓が少量、そして小さな被焼成粘土塊がいくつかあった。前者は集落での小鍛冶生産を想定させるものであるが、後者については性格不明である。

大堀からは、残存状態の良い袋状鉄斧が出土している。

竪穴住居の掘り方から、2点の黒曜石製旧石器（彫刻刀型石器と剥片）を検出した。調査区域外からの流入の可能性が高い。

3 特徴的な成果

12世紀初頭の浅間山大噴火災害からの復興を目的に、上野国を東西に横断する幹線道あずま道が造られた。今回の調査で検出した河割溝を持つ路面は、その最も東での発見例となる。より重要なことは、本遺跡周辺のあずま道は、4百年ほど以前に造られていた古代大堀の跡に沿って造成されたことである。これまで考古学的に検出されたあずま道は全て古代と直接の関係を持っていなかったため、本遺跡の例は初めてのケースとなる。

古代大堀は、直線が2.7km以上延びる水痕痕のない遺構である。膨大な労働力を使用して8世紀に計画的に造営されており、少なくとも10世紀前半まで機能が維持されていた。西の三和工業団地遺跡にはこの大堀と直接関わる8世紀の施設が発見されている。同遺跡での大堀の方向変換は、南西に5.8km離れた東山道の路線変化のあり方と類似している。

この大堀の性格は特定しがたいが、現段階では律令国家権力が関わった何らかの行政的境界もしくは道路関係の遺構と見なすのが妥当である。12世紀初頭までこの大堀の痕跡は残っており、それが当時の浅間山噴火災害からの二大復興事業であるあずま道と女堀の設計に大きな影響を及ぼしたことも十分注意すべきだろう。

Summary

The archaeological excavation of the Tamegai-daikongaido site, where is located at Sawa Azuma Village, was researched from July 1st to September 30th 2001 cause of the project of South Enterece Development of Kunisada JR Station and Prefectur Road Rebuild. The outline result of the research is showed as following:

1 Main Found Monuments

The Northern part

The Middle Age: ruin of old main road "Azuma-michi"

The Ancient Age: the large moat

The Southern part

The Ancient Age: village of holed type dwellings (11 more dwellings and 1 more buildings)

The village of the Ancient Age, that thought from the later 9th to the early 10th century, was concentrated south end of this part, however, not too crowded. The regular square formed building was thought having a sepecial roof structure.

2 monuments at the Northern part are showed on bellow.

2 Main Found Artifacts

Here are not many artifacts in quantities. The large part of bowls of Sueki potteris that are main findings from the Ancient Age village, ware produced as crude article in clay and firing. As sepecial artifacts, found a few iron slag and some fired small lumps of clay. The former shows an existence of simithery industry in the village.

From the large moat found an iron axe of socket type with good conditions.

It is interesting that two obsidian paleolithics of graver and flake are found from under floor of dwelling. Those stone artifacts were also an inflow from outside of the research area.

3 Characteristic Results

On the purpose of restoration from the eruption disaster of Asama volcano on 1108AD, was constructed the main road "Azuma-michi" that crossed from east to west on the ancient Kozuke ditrict. The find of the road surface with two gutters in this reserch became to the finding of east end case of the road. It is more important things that the part of the road surrounding this site was constructed along the large moat that had been dug before 4 hundreds years. Until this time the archaeological finds of the "Azuma-michi" road had not directly related with the Ancient Age, therefore the find of this site is became as the first case.

The large moat of the Ancient Age is a marvelous monument that reached more 2.7 km in straight without water stream traces. This moat that was constructed by enormous labor powers on the 8th century, had been continued its function at least to the early 10th century. In the Sanwa Industrial Complex site, which located west part along this moat, found several ruins of some establishments that directly related. It is similiary the direction turning of between the large moat in the site and the main road "Tohsando" on same times, located at 5.8 km far southwest.

The characteristic of this large moat has been questioned, but it is also right that thinking as some monument of administrative border or main road, which related with the "ritsuryo" national powers. Until the early of 12th century, the ruin of this large moat still had been remained, therefore it must be careful that it had exert influence on the construction planning of "Azuma-michi" road and "Onnabori" water-course, which were the two major project for the restoration of Asama eruption disaster on that time.

第4章 資 料

4-1 地形と長大遺構検討資料

4-1-1 大堀ラインの設計 (口絵5・6CG)

本遺跡で発見した古代大堀31号遺構は直線で2.7km以上延びており、また西の三和工業団地遺跡では明らかな方向転換が認められる。このような長大な距離の直線的な土木工事には、正確な設計と測量が必要であることは多言を要しない。

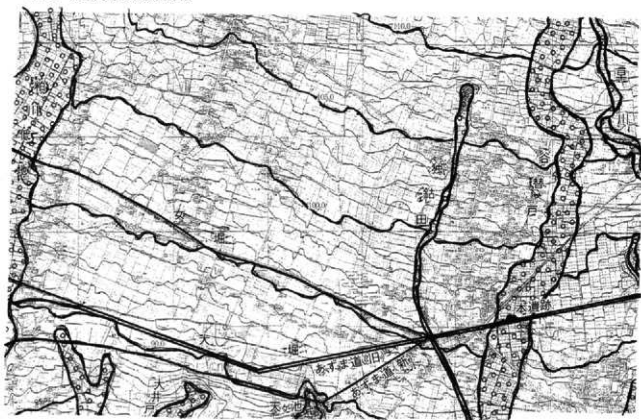
条里制も含めて、広範囲な土地に無機的な幾何学線を描くには、必ず基準点が必要である。しかもそれは遠距離にあって肉眼で識別できるものでなければならない。そのような基準点の要素に合致するのは、星や太陽・月といった天空の要素と共に、山があることは間違いないだろう。

ここでは、そのような基準点としての山を考えるべく、古代大堀そして南側にある8世紀の東山道についてCGにより、延長線を描いてみた。三和工業団地遺跡から大堀の西方向(N64°W)延長には榛名山相馬岳と二ッ岳の中間付近があたる。一方、現在の伊勢崎市役所周辺と考えられる方向変換点からの東山道の西方向(N80°W)は、浅間山頂に向かっている。

この両者の角度は実際には異なるが、見かけ上は似ていることが分かる。これは共に変換点から西北西方向の目立つ山頂を目指したことによるのだろう。

一方、大堀の東方向(N78°E)は八王子丘陵を越えて足利市北部の山地に向かっている。同様に東山道の東方向(N83°E)も、金山北部を越えてほぼ同じ方向に向かって見える。東山道の延長線には栃木市の大平山のような信仰の山も地図上はあたるが、ほとんど目立たない。変換点から東方向を見ても共に基準になるような山は確認できないことになる。この東方向の基準は、むしろ東側ではなく西の山なのではないか。両者の西への延長線は、上信国境の内山峠北側の物見山で交わる。つまり、八王子丘陵北部や金山北部から共に物見山を目指した可能性も考えられる。

4-1-2 大堀周辺の地形区分図



4-2 遺構索引 付非掲載遺物重量

番付	種類	区	アゾウド	時代	本文	図	写真	出土位置	古高	古土	出土位置	番付	種類	区	アゾウド	時代	本文	図	写真	出土位置	古高	古土	出土位置	
1	土器	北区	615-230	縄文	12	15	16					91	ビッド	南区	365-205	古代	83	82	84					
2	土器	北区	605-230	不明	12	15	16				13	92	瓦葺	南区	365-095	古墳	90	89	89				7	
3	土器	北区	610-235	古代	12	15	16					93	瓦葺	南区	360-095	古墳	90	89	89					
4	土器	北区	605-240	古代	17	15	16					94	ビッド	南区	370-690	不明	83	82	85					
5	土器	北区	605-243	古代	12	15	16					95	ビッド	南区	375-685	古代	87	82	85					
6	土器	北区	605-233	古代	12	15	17					96	ビッド	南区	375-230	不明	87	82	85					
7	土器	北区	545-230	不明	30	30	29					97	ビッド	南区	370-215	不明	88	85	89					
8	土器	北区	585-230	不明	30	30	29					98	土瓶	南区	385-205	古代	87	87	86					
9	土器	北区	580-235	不明	30	30	29					99	土瓶	南区	330-235	古墳	73	74	76			7	37	
10	土器	北区	585-233	不明	30	30	29					100	ビッド	南区	370-200	不明	83	82	85					
11	土器	北区	580-230	不明	30	30	31					101	ビッド	南区	370-200	古代	83	82	85					
12	土器	北区	580-233	不明	30	30	31					102	ビッド	南区	370-200	不明	83	82	86					
13	土器	北区	575-235	不明	30	30	31					103	瓦葺	南区	365-205	古代	83	82	86				9	
14	土器	北区	775-230	不明	30	30	31					104	土瓶	南区	465-210	古代	88	88	86				10	
15	土器	北区	605-233	古代	12	15	17					105	瓦葺	南区	365-095	古代	83	82	86					
16	土器	北区	610-233	古代	12	15	17					106	瓦葺	南区	400-200	古代	87	87	86					
17	土器	北区	610-233	古代	12	15	17					107	ビッド	南区	420-200	不明	88	88	89					
18	土器	北区	610-235	古代	12	15	17					108	ビッド	南区	425-205	不明	88	88	89					
19	土器	北区	610-233	古代	12	15	17					109	土瓶	南区	345-215	古代	78	78	81					
20	土器	北区	610-230	古代	12	15	17					110	土瓶	南区	345-215	古代	79	79	81					
21	土器	北区	610-230	古代	12	15	17					111	土瓶	南区	350-220	古代	78	78	81				4	
22	土器	北区	590-230	中世	26	27	28			80		112	土瓶	南区	320-220	古代	78	78	81				130	
23	土器	北区	565-220	中世	26	27	28					113	瓦葺	南区	315-210	古代	73	72	71				3	
24	土器	北区	610-232	古代	12	15	17					114	土瓶	南区	350-215	古代	66	64	65					
25	土器	北区	610-233	古代	12	15	17					117	瓦葺	南区	330-215	古代	64	64	65					
26	土器	北区	610-233	古代	12	15	17					118	瓦葺	北区	550-220	中世	15	19	23				1	
27	土器	北区	570-230	中世	26	27	28					119	土瓶	南区	330-215	古代	79	79	81					
28	土器	北区	560-240	中世	26	27	28					120	土瓶	南区	350-215	古代	79	79	81					
29	土器	北区	570-230	縄文	12	13	14					121	土瓶	南区	350-215	古代	69	72	75					
30	土器	北区	575-230	縄文	17	13	14																	
31	土器	北区	560-235	古代	18	19	21																	
32	土器	北区	575-250	縄文	12	13	14																	
33	土器	北区	575-255	古代	12	13	14	138				254												
34	土器	北区	570-230	縄文	12	13	14																	
35	土器	北区	570-230	縄文	12	13	14																	
36	土器	北区	570-260	縄文	12	13	14																	
37	土器	北区	565-260	縄文	12	13	14																	
38	土器	北区	560-230	縄文	12	13	14					15												
39	土器	南区	280-230	古代	69	66	68																	
40	土器	南区	310-210	古代	69	66	68	1				66												
41	土器	南区	330-220	古代	69	66	68				20	113												
42	土器	南区	310-211	古代	69	66	68				41	283												
43	土器	南区	310-211	古墳	73	72	70			13	81	74												
44	土器	南区	315-210	古墳	73	72	71																	
45	土器	南区	315-210	古代	73	72	71			1	53													
46	土器	南区	330-220	古墳	73	74	75				5													
47	土器	南区	330-222	古代	73	74	75																	
48	土器	南区	330-222	古代	73	74	75				80													
49	土器	南区	330-222	古代	73	74	75																	
50	土器	南区	345-211	古代	79	78	80																	
51	土器	南区	345-211	古代	79	78	80																	
52	土器	南区	345-210	不明	79	78	80																	
53	土器	南区	345-211	不明	79	78	80																	
54	土器	南区	305-200	古代	37	37	36																	
55	土器	南区	310-210	古代	37	39	38			1	247	954												
56	土器	南区	345-211	古代	39	41	38			48	794	500												
57	土器	南区	340-210	古代	41	42	40				29													
58	土器	南区	345-211	不明	79	78	80																	
59	土器	南区	320-220	古代	69	72	71			2	58	330												
60	土器	南区	335-225	不明	73	74	75				3													
61	土器	南区	340-230	不明	79	78	80				8													
62	土器	南区	335-220	不明	73	74	76				30													
63	土器	南区	335-220	不明	73	74	76																	
64	土器	南区	345-210	古代	79	78	80																	
65	土器	南区	315-215	古代	43	43	44				80	1,390												
66	土器	南区	375-211	古代	58	55	57																	
67	土器	南区	355-215	古代	66	64	63				30													
68	土器	南区	355-220	古代	69	67	69			8	230	1,234												
69	土器	南区	355-225	古代	69	67	66				634													
70	土器	南区	360-210	西代	60	51	53	13		121	1,001													
71	土器	南区	370-210	古代	66	55	54			5	425	1,179												49
72	土器	南区	375-211	古墳	68	58	57																	
73	土器	南区	390-215	古代	58	58	59				72													
74	土器	南区	350-220	古代	77	77	76				7													
75	土器	南区	350-220	不明	77	77	76				18													
76	土器	南区	345-220	不明	77	77	76																	
77	土器	南区	350-220	不明	77	77	76				17													
78	土器	南区	345-210	古代	79	78	81																	
79	土器	南区	350-210	古代	66	64	63				15													
80	土器	南区	350-210	古代	66	64	63				8													
81	土器	南区	450-220	古墳	65	63	66																	
82	土器	南区	445-220	古墳	68	68	86				1													
83	土器	南区	445-220	古墳	68	68	86																	
84	土器	南区	380-220	古墳	61	61	59				39	1,940												
85	土器	南区	370-685	不明	87	83	84	</																

4.3 遺物索引

番号	種別	部材	記号	特徴	法量	図	写真	掲載
1009	肥前銅付	筒型銅	底部	内草文、外草花文文意、地成不良	直径7.0			13 14 033
1008	肥前銅毛目	鉢	小片					13 14 033
1012	瀬戸美濃赤台	碗	口縁	型残あり				19 24 118
1007	瀬戸美濃二彩	碗	口縁	尾目				13 14 033
1011	瀬戸美濃朝日	鉢	ほぼ定存	扇型焼成	口径13.4底径6.0高3.6			19 24 118
1122	瓦葺土器	磁器	口縁	還元、地締め、硬質、微砂粒、上面磨耗				39 49 082
1004	小中口鉢	皿	3/5	微灰粉粒、スノグ付	口径(13.2)底径(7.4)高3.2			27 29 028
1007	扇状灰釉	皿	底部	硬質、高台磨り付	直径5.0			53 53 076
1008	扇状灰釉	皿	1.5以下	白色鉱物粒、高台三角形	口径(14.0)底径7.0高2.8			52 54 070
1009	扇状灰釉	皿*	底部	釉薄い、高台半月形、裏面磨、外縁磨成焼成	直径6.3			52 53 070
1025	扇状灰釉	煎茶碗	口縁		口径19.0			42 40 027
1001	扇状灰釉	碗	底部1/2	微砂粒やや多、内穴浅く、外縁たれ、高台なし	直径11.0			52 53 070
1020	扇状灰釉	碗	口縁	釉少ない	72 70 043			
1090	美濃灰釉	皿	底部1/4	釉薄い、見込へたり、高台半月形	直径6.3			52 54 070
1023	扇状灰釉	大壺	側部	還元良好、砂粒多	39 38 055			
1041	扇状灰釉	大壺	側部	還元、硬質、平行叩き直	43 44 057			
1047	扇状灰釉	大壺	口縁	還元、良好、砂粒含む	72 71 060			
1014	扇状灰釉	壺	側部	叩き当て直なし	74 75 049			
1015	扇状灰釉	壺	側部	叩き当て直なし	66 66 041			
1017	扇状灰釉	壺	側部	微砂粒、叩き当て直なし	66 66 041			
1020	扇状灰釉	壺	口縁	還元、微砂粒	48 49 068			
1027	扇状灰釉	壺	側部	還元、微砂粒	48 49 068			
1077	扇状灰釉	壺	側部	還元、微砂粒、微砂中やや多、叩き当て直なし	48 49 068			
1098	扇状灰釉	底	底部1/4	還元、砂粒多、器壁厚	56 57 071			
1019	扇状灰釉	底	底部	還元、気泡多	66 68 042			
1123	扇状灰釉	底?	口縁	還元、やや軟質、微砂、前面磨耗	91 89 180			
1080	扇状灰釉	底型	底部	中性、やや軟質、微砂やや多、底面調整	直径7.0			53 54 070
1105	扇状灰釉	底型	底部	還元、やや硬質、微砂多、右回転無調整 厚手	直径7.0			55 57 071
1024	扇状灰釉	底型?	底部	還元、やや軟質、微砂多	直径8.3			37 36 054
1048	扇状灰釉	底型?	底部	還元、内黒色、やや軟質、右回転無調整	直径7.2			45 44 065
1103	扇状灰釉	底型?	底部	還元、軟質、微砂粒、薄多、底面調整	直径8.8			55 57 071
1106	扇状灰釉	底型?	底部	還元、やや軟質、微砂多、磨質、底ナテ	直径6.1			56 57 071
1040	扇状灰釉	底型	1/5	還元、やや軟質、やや赤み	直径10.2底径6.3高3.8			42 40 027
1013	扇状灰釉	底	底部	中性、軟質	直径12.2			66 68 042
1025	扇状灰釉	底	底部	軟質、高台磨耗、見込スス	直径11.1			39 38 055
1036	扇状灰釉	底	3/5	中性、軟質、砂粒長石灰灰治多、粗製	口径(14.2)底径6.5高4.9			43 44 057
1029	扇状灰釉	底	口縁	中性、軟質、鉄分多	43 44 057			
1046	扇状灰釉	底	底部	還元、やや軟質、微砂粒	直径7.0			72 71 060
1050	扇状灰釉	底	口縁	還元、焼成良好、右回転無調整	45 44 065			
1052	扇状灰釉	底	4/5	還元、砂粒多、気泡あり、焼成良好	口径(14.0)底径6.4高4.9			45 44 065
1064	扇状灰釉	底	口縁	中性、微砂	48 49 068			
1065	扇状灰釉	底	1/5	還元、軟質、砂粒多、回転無調整、高台磨耗	口径(14.5)高4.6			48 49 068
1067	扇状灰釉	底	口縁	還元、良好、鉄分、赤み少	48 49 068			
1069	扇状灰釉	底	底部	中性、やや軟質、微砂、右回転無調整	直径5.2			48 49 068
1073	扇状灰釉	底	4/5	中性、砂粒多、焼成良好、右回転無調整、地成焼成	口径(13.8)底径4.4高4.8			48 49 068
1082	扇状灰釉	底	底部	中性、軟質、黒色粒、砂粒多、右回転無調整	直径6.8			52 54 070
1093	扇状灰釉	底	2/3	還元、軟質、黒色あり、砂粒多、回転無調整、地成焼成	口径(13.6)底径6.0高5.0			56 57 071
1095	扇状灰釉	底	1/3	還元、やや軟質、微砂粒、気泡、やや赤み	口径(13.0)			55 57 071
1096	扇状灰釉	底	1/2	還元、軟質、砂粒多、高台磨耗	口径(13.4)底径(6.1)高5.0			56 57 071
1099	扇状灰釉	底	1/3	還元、軟質、微砂粒、鉄分含む、回転無調整	口径(13.5)底径(7.0)高5.0			56 57 071
1100	扇状灰釉	底	1/4	還元、やや軟質、微砂粒、鉄分、高台磨耗、地成焼成?、外削み?	口径(14.0)			56 57 071
1101	扇状灰釉	底	底部	中性、軟質、砂粒多、右回転無調整	直径6.4			56 57 071
1102	扇状灰釉	底	底部	中性、軟質、微砂粒、気泡多、回転無調整、器壁厚	直径(6.0)			56 57 071
1104	扇状灰釉	底	底部	還元、良好、微砂粒、回転無調整、地成焼成 厚手	直径(6.0)			56 57 071
1108	扇状灰釉	底	3/5	還元、潤滑、やや軟質、微砂粒、底ナテ	口径(14.6)底径(6.2)高5.6			62 63 084
1114	扇状灰釉	底	口縁1/4	還元、やや軟質、微砂粒	62 63 084			
1118	扇状灰釉	底	1/3	中性、やや軟質、微砂粒、鉄分、右回転後ややナテ	口径(13.8)底径(6.8)高(5.9)			62 63 084
1120	扇状灰釉	底	1/3	やや中性、軟質、微砂粒、回転無調整	口径(13.2)底径(7.2)高5.3			62 63 084
1124	扇状灰釉	底	底部	還元、軟質、微砂粒、回転無調整	62 63 084			
1097	扇状灰釉	底?	底部	還元、軟質、砂粒・黒色粒多、器壁・高台粗く均一	56 57 071			
1111	扇状灰釉	底?	口縁	還元、良好、白色鉱物粒	62 63 084			
1113	扇状灰釉	底?	口縁	中性、やや軟質、微砂粒、縁削「木」	62 63 084			
1091	扇状灰釉	底	3/5	低還元、黒黒	直径6.3			27 29 028
1005	扇状灰釉	底	3/5	中性、軟質、黒色粒多、地成焼成、右回転 10世紀	口径(13.2)底径4.7高4.3			19 23 031
1046	扇状灰釉	底	4/5	還元、微砂粒調整、赤み少、微砂 8世紀	口径(13.8)底径4.4高4.0			19 23 031
1026	扇状灰釉	底	底部	砂粒含む、地成良好、地成調整	直径(6.0)			39 38 055
1050	扇状灰釉	底	底部	還元、砂粒多、右回転無調整	78 81 112			
1031	扇状灰釉	底	3/5	還元、やや軟質、砂粒やや多、右回転無調整、見込に輪脚	口径(13.5)底径(6.4)高4.3			41 40 056
1052	扇状灰釉	底	3/5	還元、焼成やや赤み、白色鉱物粒、右回転無調整	口径(12.6)底径(5.6)高4.2			41 40 056
1045	扇状灰釉	底	底部	還元、やや軟質、地成良好	直径6.6			72 71 060
1051	扇状灰釉	底	口縁1/5	中性、やや軟質、鉄分多	45 44 065			
1056	扇状灰釉	底	1/2	還元、やや良好、微砂粒、右回転無調整少(磨耗)	口径(12.9)底径(6.5)高4.1			45 44 065
1060	扇状灰釉	底	底部	還元、硬質、右回転無調整	64 63 067			
1071	扇状灰釉	底	底部	中性、やや軟質、右回転?無調整	直径(5.4)			48 49 068
1076	扇状灰釉	底	底部	還元、硬質、微砂粒、右回転無調整	直径5.7			48 49 068
1092	扇状灰釉	底	底部	還元、軟質、砂粒多、右回転無調整	直径6.6			64 65 116

番号	種類	器形	部位	特徴	数量	図	写真	備考
1115	瓦器部	坏	底部	酸化、やや良好、微砂粒、流しす	直径5.0		62	63 084
1033	磁器部	小型坏	3/5	還元、良好、気泡やや多、砂粒やや含む、右側縦溝型	口径(10.6)直径5.6高さ3.4		41	40 056
1044	黒色土器	碗	底部	酸化、砂粒やや多、内黒色			72	71 070
1083	黒色土器?	碗	3/5	内面一部黒色、酸化、良好、微砂粒多、高台割落	口径14.0		52	54 069
1010	土器部	甕	口縁	炭物粒多			82	84 091
1021	土器部	甕	口縁	砂粒・炭物粒多			82	86 103
1022	土器部	甕	口縁	砂粒・鉄分多、焼成良好	口径21.0		39	38 055
1027	土器部	甕	底部	焼成良好			37	36 054
1028	土器部	甕	口縁	酸化、焼成良好			39	38 055
1037	土器部	甕	口縁	中性、砂粒多			42	40 057
1038	土器部	甕	口縁	砂粒石灰多、炭物焼成			43	44 057
1043	土器部	甕	口縁	鉄分含む、焼成良好	口径(19.0)		72	71 069
1049	土器部	甕	口縁	砂粒やや多、焼成良好			45	45 065
1054	土器部	甕	口縁	焼成良好、微砂粒、赤みあり			45	44 065
1055	土器部	甕	口縁	焼成良好、微砂粒			45	44 065
1058	土器部	甕	口径1/4	微砂粒、やや軟質	口径(19.2)		43	44 065
1059	土器部	甕	口縁	焼成良好、鉄分含む、赤み			45	46 065
1061	土器部	甕	口縁	焼成良好、鉄粉多、炭物焼成			78	81 112
1063	土器部	甕	口縁	砂粒やや多 「C」字溝	口径(20.0)		48	49 068
1072	土器部	甕	底部	焼成良好、砂粒含む	径44.5		48	49 068
1085	土器部	甕	底部	酸化、良好、砂粒、内面内含有物?	径44.8		52	54 070
1086	土器部	甕	口縁	酸化、砂粒含む、赤み大、炭物焼成 口径下僅小			52	54 070
1091	土器部	甕	口径1/2	酸化、良好、砂粒少	口径(19.0)		53	54 076
1094	土器部	甕	口径1/5以下	砂粒・石灰石(3-5mm)多、気泡含む			56	57 071
1107	土器部	甕	3/5	酸化、焼成良好、微砂粒含む、赤みスチ着	口径19.6直径(4.4)高さ(25.5)		58	59 072
1109	土器部	甕	3/5	焼成良好、微砂粒・赤色炭物粒多	口径20.0		62	63 084
1112	土器部	甕	口縁側部	中性、炭成良好、微砂粒・鉄分含む	口径21.0		62	63 084
1116	土器部	甕	口縁側部3/5	酸化、やや軟質、微砂粒・鉄分、気泡やや含む、内容物痕	口径20.5		62	63 084
1119	土器部	甕	口径1/4	酸化、良好、微砂粒、炭物焼成	口径(20.0)		62	63 084
1034	土器部	小型甕	口縁	砂粒多、炭物焼成			43	44 067
1117	土器部	小型甕	口径1/5	酸化、良好、微砂粒・鉄分、スチ着、炭物焼成	口径(12.0)		62	63 084
1121	土器部	小型甕	口縁	酸化、良好、砂粒・炭物粒多	口径(12.0)		62	63 084
1052	土器部	台付甕	台部	酸化、砂粒多、赤み大	径49.5		45	46 065
1078	土器部	碗	底部	酸化、軟質、砂粒多、気泡多、赤赤み	径49.7		52	53 075
1084	土器部	碗	底部	焼成良好、砂粒多、赤赤み、面口口成形、内容物	径49.7		52	54 076
1093	土器部	坏	3/5	酸化、やや赤み、砂粒少、8世紀	口径12.6高さ2.8		19	23 021
1029	土器部	坏	口縁	焼成良好、赤赤み、8世紀			29	28 025
1053	土器部	坏	1/3	焼成良好、鉄分含む、炭物焼成	口径13.0直径6.2高さ4.0		45	46 065
1062	土器部	坏	4/5	焼成良好、砂粒、内スチ 割り坏	口径13.0直径6.6高さ3.7		48	49 068
1074	土器部	坏	底部	微砂粒、焼成良好、8世紀			72	71 115
1075	土器部	坏	3/5	焼成良好、砂粒含む、内炭化物 割状坏	口径11.8直径4.2高さ3.0		48	46 066
1079	土器部	坏	1/2	還元、軟質、砂粒多 割り坏	口径12.4直径4.1高さ1.1		52	54 070
1018	土器部	不明	口縁	織状痕、黒色粒			66	68 079
1068	粘土塊	不明		酸化、良好、ワラ痕、粒焼成	径4.2幅2.5厚2.2重量13g		46	49 069
1066	土製品	紡錘車	輪部	酸化、黒色炭物粒、割れ口磨耗	高1.5		48	49 069
1068	陶文	浅鉢	把手	赤色炭物粒多 跡痕			19	23 021
1002	陶文	浅鉢	輪部	砂粒多			27	29 023
2002	石製品	砥石	2/3	2面使用、炭物焼成少、砥沢石	幅0.2厚3.3重量155g		42	40 057
2004	石製品	砥石	ほぼ全存	5面使用、左側面に磨痕、砥沢石	径7.4幅3.9厚4.2重量151g		46	49 069
2005	石製品	砥石	ほぼ全存	3面使用、炭物焼成、砥沢石	径6.7幅3.7厚3.1重量51g		53	54 070
2009	石製品	紡錘車	定存	放射状磨痕、やや暗色部分あり、総絞付	径1.1厚1.1孔1.0孔重量32g		43	44 067
2001	打製石部	石錐	ほぼ全存	無茎、チャート	径2.5幅3.5重量1.0g		82	84 087
2003	打製石部	石錐	ほぼ全存	有茎、チャート	径2.4幅3.0厚0.5重量3g		35	36 082
2006	打製石部	石錐	ほぼ全存	有茎、黒色頁岩	径2.4幅3.1厚0.4重量1g		35	36 082
2007	打製石部	彫刻刀型石部	ほぼ全存	片面のみ磨痕、黒曜石	径3.5幅2.0厚0.6重量5g		62	63 084
2008	打製石部?	鏡片		新しい割れあり、黒曜石	重量3g		62	63 084
2002	陶製品	鉄琴	定存	砂粒 本質残存	径6.4幅4.5厚1.9重量102g		19	23 021
2003	陶製品	刀子	1/3	割れやや大	幅0.9直径2.2重量57g		48	49 069
2004	陶製品	刀子	2	2枚並置少	径6.4幅2.6厚2.1重量190g		48	49 069
2005	陶製品	刀子	1	パイプ状痕み	径6.4幅2.6厚2.5重量200g		52	54 070
2001	ガラス製品	瓶	小片	気泡少、透明 「正一合」	重量35g		13	14 033
4001	炭化材	角材状					2	44 065
4002	炭化材	角材状					2	44 065

法量()は推定値

報告書抄録

ふりがな	ためがいでいこんがいでいど							
書名	田部井大根谷戸遺跡							
副書名	JR両毛線国定駅南口整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	なし							
シリーズ名	⑧群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告							
シリーズ番号	第305集							
編著者	坂井 隆・木下 良							
編集機関	⑧群馬県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL.0279-52-2511							
発行年月日	2002年9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° 〇 〇	東経 ° 〇 〇	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
田部井大根谷戸	群馬県勢多郡東村 大字国定 大字田部井	104621		362130	1375432	2001.07.01) 2001.09.30	2,564	駅前開発 道路建設
				362123	1375434		2,537	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
田部井大根谷戸	交通 居住 居住?	中世 古代 旧石器	道路遺構 大堀 竪穴住居 11 掘立柱建物 1	土器類 袋状鉄斧 土器類 彫刻刀形石器	上野国を東西に横断する幹線道「あずま道」 直線で2.7km以上延びる水流痕のない遺構 8世紀の築造で12世紀初頭まで残存 9世紀を主体とする集落 竪穴住居群中の正方形2×2間の総柱建物 竪穴住居掘り方より出土			

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第305集

田部井大根谷戸遺跡

JR両毛線国定駅南口整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第305集



平成14年9月30日 印刷

平成14年9月30日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局